

福岡市
板付周辺遺跡調査報告書第20集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集

1999

福岡市教育委員会

福岡市
板付周辺遺跡調査報告書第20集

福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集

1999

福岡市教育委員会

序

福岡市は豊かな自然環境に恵まれ、地理的条件も加わり、古来より海外交流の拠点として栄えてきました。稻作農耕の伝播を示す板付遺跡、古代の対外交流の迎賓館である鴻臚館、貿易都市・博多など多くの歴史遺産があります。

福岡市教育委員会では、文化財の保存と保護措置に鋭意努めているところであります。しかし、アジアの拠点都市を目指して都市づくりがすすんでいる福岡市は変貌著しく、各種の開発事業によって、失われてゆく埋蔵文化財も少なくありません。

福岡平野のほぼ中央に位置する板付遺跡は、大正6年、当時、九州大学医学部教授であった中山平次郎博士によって初めて学界に紹介されました。昭和26年から日本考古学協会によって発掘調査が開始され、以後、明治大学、九州大学、福岡県教育委員会、福岡市教育委員会へと発掘調査が引き継がれ、数々の大発見がありました。環濠集落、最古の水田の確認は、板付遺跡が日本最古の農村遺跡の一つであることを確固たるものとしました。昭和51年には、遺跡の中心地が国史跡に指定され、平成7年には指定地内の整備も終了し、弥生時代開始期の史跡として広く市民に親しまれているところです。

本書は、昭和52・53年度に発掘調査を実施した板付遺跡の成果の一部を報告するものです。本書に収録したのは、住宅の移転改築に伴う、G-7a・7b調査区の日本で最も古い水田遺構の報告であり、日本の歴史を解明するには欠かせない資料を提供しています。

発掘調査から報告書作成まで長時間を要する結果となりましたが、その間、ご指導いただきました先生方をはじめ、地元の皆様、発掘作業員、整理作業員等、多くの方々のご協力を得ましたことに深甚の感謝を表するものであります。

本書が埋蔵文化財の保護と理解を深める一助となり併せて研究資料としてご活用いただることを願うものであります。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田英俊

例　　言

- 1、本報告書は、福岡市教育委員会が国庫補助を受けて、昭和52・53年度に実施した福岡市博多区板付遺跡および周辺遺跡の民間宅地造成に伴う緊急調査の報告の一部である。本書に収録したのは、G-7a区、G-7b区、G-7c区、F-8c区の遺構の報告である。
- 2、本報告書に収録した発掘調査は山崎純男、沢皇臣、山口譲治、横山邦継が担当した。
- 3、本報告書に収録した写真の撮影には山崎、沢、原　俊一、前田義人があたった。
- 4、本報告書に使用した図面の作成には山崎、沢、山口、原、前田、木下尚子、森瀬圭子があたり、図の製図は山崎がこれにあたった。
- 5、本報告書の図面の北はすべて磁北である。
- 6、本報告書の執筆は山崎がこれにあたった。
- 7、本報告書の編集は山崎がこれにあたった。

遺跡調査番号 7842・7843

遺跡番号 ITZ

本文目次

第1章 はじめに	1
1、調査に至る経過	1
2、調査体制	2
3、福岡・早良平野における弥生時代開始期の遺跡	5
第2章 G-7a区の調査	19
1、調査区の位置	19
2、調査区の層序	19
3、板付I式土器期の水田遺構	24
(1) 水田遺構の概要	24
(2) 幹線水路（小河川）	24
(3) 取排水溝	27
(4) 畦畔	29
(5) 水田面	30
4、突帯文土器単純期の水田遺構	32
(1) 水出遺構の概要	32
(2) 突帯文土器単純期の層位	35
(3) 突帯文土器単純期上層の水田遺構	38
(4) 幹線水路	38
(5) 井堰と取排水溝	39
(6) 畦畔	41
(7) 水田面	42
第3章 G-7b区の調査	43
1、調査区の位置	43
2、調査区の層序	43
3、板付I式土器期の水田遺構	45
(1) 水田遺構の概要	45
(2) 幹線水路	46
(3) 井堰と橋	46
(4) 取排水溝	50
(5) 畦畔	52
4、突帯文土器単純期の水田遺構	53
(1) 水田遺構の概要	53
(2) 幹線水路	53
(3) 畦畔	54
(4) 水田面	55
(5) 土器貯蔵土坑	55
第4章 G-7c区の調査	56

1、調査区の位置	56
2、調査区の層序	56
3、土層断面にみられる遺構	57
第5章 F-8c区の調査	58
1、調査区の位置	58
2、調査区の層序	59
3、検出遺構	59
第6章 調査のまとめ	60
1、板付I式土器段階の水田構造	60
2、突帯文土器単純期段階の水田構造	62
3、水田祭祀について	64

挿 図 目 次

Fig. 1 板付遺跡の地形と各調査区	3
Fig. 2 福岡・早良平野における弥生時代開始期の遺跡(1)	6
Fig. 3 福岡・早良平野における弥生時代開始期の遺跡(2)	7
Fig. 4 福岡・早良平野における弥生時代開始期の遺跡(3)	8
Fig. 5 G-7a・b調査区の位置	20
Fig. 6 G-7a区 土層断面位置図	21
Fig. 7 G-7a区 土層断面図 I	22
Fig. 8 G-7a区 土層断面図 II	23
Fig. 9 G-7a区 板付I式土器期水田遺構全体図	25
Fig. 10 G-7a区 板付I式土器期取排水溝実測図 I	26
Fig. 11 G-7a区 板付I式土器期取排水溝実測図 II	27
Fig. 12 G-7a区 水田畦畔実測図	29
Fig. 13 G-7a区 板付I式土器期上層水田面足跡実測図	30
Fig. 14 G-7a区 板付I式土器期下層水田面足跡実測図	31
Fig. 15 G-7a区 下層断面図 I	33
Fig. 16 G-7a区 下層断面図 II	34
Fig. 17 G-7a区 突帯文土器単純期水田遺構全体図	37
Fig. 18 G-7a区 中層水田面足跡実測図	38
Fig. 19 G-7a区 突帯文土器単純期幹線水路断面実測図	39
Fig. 20 G-7a区 突帯文土器単純期、井堰・水口実測図	40
Fig. 21 G-7a区 突帯文土器単純期水田畦畔実測図	42
Fig. 22 G-7b区 遺構面地形実測図	44
Fig. 23 G-7b区 土層断面実測図	45
Fig. 24 G-7b区 上層遺構全体図	47
Fig. 25 G-7b区 井堰実測図 I	48

Fig. 26	G-7b区 非堰実測図 II	49
Fig. 27	G-7b区 井堰出土土器実測図	50
Fig. 28	G-7b区 水口、土層断面実測図	51
Fig. 29	G-7b区 水口、祭祀土器出土状況	52
Fig. 30	G-7b区 下層遺構全体図	53
Fig. 31	G-7b区 木器貯蔵坑実測図	54
Fig. 32	G-7c区 土層断面実測図	56
Fig. 33	F-8c区 土層断面実測図	58
Fig. 34	G-7a・b区 水田遺構関連図 I (板付I式土器期)	61
Fig. 35	G-7a・b区 水田遺構関連図 II (突帯文土器単純期)	62

図 版 目 次

- PL. 1 1. G-7a区 全景(東より)
 2. G-7a区 全景(北東より)
 3. G-7b区 下層遺構全景
- PL. 2 1. G-7a区 板付I式土器期取排水溝の井堰 1. 北より、2. 西より(祭祀用土器出土状況)
 3. 東より、4. 西より
- PL. 3 1. G-7b区 祭祀土器出土状況(北より)
 2. (南より)
 3. G-7a区 突帯文土器出土状況
- PL. 4 G-7b区の井堰と溝
 1. 網代出土状況
 2. 網代細部
 3. 溝断面
- PL. 5 G-7a区の水田面の足跡
 1. G-7a区 板付I式土器期下層水田足跡
 2. G-7a区 板付I式土器期上層水田足跡
 3. G-7a区 突帯文土器単純期足跡石膏型
- PL. 6 G-7a区 突帯文土器単純期幹線水路断面
 1. H-I間断面
 2. C-D間断面
 3. 調査区北壁部
- PL. 7 G-7a区 突帯文土器単純期取排水溝
 1. 遠景、2. 近景、3. 杭除去後
- PL. 8 G-7a区 突帯文土器単純期の取排水溝と井堰
 1. 西より、2. 北より、3. G-7a区 立木倒壊状況
- PL. 9 G-7b区 木器出土状況
 1. 遠景、2. 近景、3. 石斧柄未製品

PL. 10 G-7a区 畦畔

1. 突帯文土器單純期（北より）
2. 突帯文土器單純期断面
3. 板付I式土器期（東より）

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

板付遺跡は福岡平野のほぼ中央に位置する。福岡市博多区板付2丁目から5丁目にかけての約80万m²に広がる大規模な遺跡である。遺跡は弥生時代を中心とするが、一部に、先土器時代、縄文時代の遺物がみられ、弥生時代以降は現代まで連続と続く複合遺跡である。遺跡は古くから知られていて、江戸時代の終り頃、遺跡の中心部にあたる中央台地に所在していた通津寺境内から広形銅矛5口が発見されたことが、通津寺過去帳に記されている。大正時代末期には、通津寺の南東に存在した円墳状の高まりが土取りにあり、金海式壺棺とみられる前期末の壺棺群が発見され、数基の壺棺から細形銅劍、細形銅矛各3口が出土した。これを、当時九州帝国大学医学部教授であった中山平次郎博士が学界に報告され、はじめて遺跡の重要性が認識された。この時出土した銅劍、銅矛は東京国立博物館に保管されている。この壺棺群が発見された円墳状の高まりの頂上部には板状の大石が建てられており、現在の知見では墳丘墓であった可能性が極めて強い。

また、戦後すぐに、地元の研究者である中原志外頭氏によって通津寺境内近くの畠地より、縄文時代末期の突帯文土器と弥生前期土器が採集された。これを受けて、昭和26年から開始された日本考古学協会、明治大学、九州大学を中心とした発掘調査は、縄文時代から弥生時代への移行過程、換言すれば、弥生時代開始期の諸問題の解明を意図したものであった。その成果は当初の発掘目的を充分に果たしたものであった。集落を濠で囲む最古の環濠集落が明らかになり、濠内からは炭化米をはじめ、土器上に残された輥圧痕、収穫具としての使用が考えられる石臼、伐切具である太形蛤刃石斧、加工工具である抉入柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、あるいは武器である磨製石劍、磨製石鎌等の大陸系磨製石器、縄文時代終末期の刻日突帯文土器と弥生時代初頭の板付I式土器の共伴関係から、日本列島における最古の稻作農耕の存在が確認され、最古の農村の一つの姿を具体的にうかびあがらせることとなった。また、稻作農耕の故地は共伴する大陸系磨製石器の形態から朝鮮半島に求められることが推測できるようになった。日本列島の歴史の中で最も大きな変革期を明らかにする重要な成果を得ることとなったのである。

昭和40年代後半にははじまる日本列島改造による開発の急増は、板付遺跡周辺においても例外ではなかった。遺跡の中心部をなす環濠集落をのせる台地西側の広大な冲積地に市営、県営住宅団地の建設が進められたのをはじめ、周辺部でも宅地造成等の開発が進められた。これらの宅地造成に伴う緊急調査は福岡市教育委員会が担当して実施してきた。これらの緊急調査に伴う発掘調査成果も重要なものであった。集落をのせる台地西側の冲積地では、弥生時代以降の全期間を通じて水田関連遺構が確認され、当時では数少ない木製農具をはじめとする木製品が多量に出土し、その内容は、弥生時代の農村の姿を如実に示すものであった。また、遺跡の範囲がさらに拡大することが確認され、遺跡の重要性はますます高まることとなった。

昭和51年6月21日には、日本歴史の解明に欠くことのできない重要な遺跡として、環濠集落を含む遺跡の中心部と、西に隣接した冲積地の水田地帯の合わせて27,796m²が国の史跡として指定された。以後、指定地内は保存、整備され、公開されている。

板付遺跡および周辺遺跡は、その歴史的重要性から、昭和48年以来、民間の宅地造成や住宅建設に伴う遺跡破壊については国庫補助金を受けて緊急調査を実施している。本報告書に収録した昭

和52年・53年度の調査地区は、史跡指定地内から、史跡保存のために指定地外への転出に伴う住宅建設が多く、遺跡保存のための措置が、指定地外の遺跡、遺構を破壊するという矛盾した現象を生み出す結果となった。

昭和52年・53年の発掘調査は史跡指定地周辺の15地区を対象として実施した。この中で、本報告書に収録したG-7a、7b地区では、これまで弥生時代初頭とされていた板付I式土器階段の水田遺構を検出したのみならず、さらに下層からは縄文時代晚期終末とされていた刻目突帯文土器単純層が確認され、その下面に同時期の水田遺構を検出した。この発見は、日本列島における水稻農耕開始を縄文時代晚期まで遡らせただけでなく、縄文時代、弥生時代という時代区分まで問題にするところとなり、マスコミによって大きく報道された。また、G-7c、F-8c地区も、これら水田址の拡がりを確認するための重要な所見を提供している。第6章において、板付遺跡における稻作農耕開始期の水出の拡がりと構造について検討を加えてみたい。

なお、昭和52年・53年度調査地区的概報は『福岡市板付周辺遺跡調査概報（板付周辺遺跡調査報告書（5）1997～8年度）』福岡市埋蔵文化財調査報告第49集、1979年として発行している。また、F-5a区、F-5b区、F-6b区の3ヶ所については、正式報告書『板付周辺遺跡調査報告書第18集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第539集、1997年、F-5c区、F-7a区、F-7b区、F-8c区4ヶ所については、正式報告書『板付周辺遺跡調査報告書第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集、1998年を刊行している。本報告書はG-7a区、G-7b区、G-7c区、F-8c区の4地区の遺構編の正式報告書である。

各区の概要是以下のとおりである。

- 1、G-7a区 板付5丁目2-2外、中牟田久人氏所有地 1,410m²、検出遺構、板付I式土器期、突帯文土器単純期水田址（水路、井堰、取排水溝、畦畔、水田面）
- 2、G-7b区 板付5丁目2-1外、中牟田久人氏所有地 464m²、検出遺構、板付I～II式土器期、突帯文土器単純期水田址（水路、井堰、取排水溝、畦畔、水田面）
- 3、G-7c区 板付5丁目1-1外、中牟田久人氏所有地 2,100m²、検出遺構、各時期水田址（水路、畦畔、自然河川）
- 4、F-8c区 板付5丁目2-13外、 100m²、検出遺構、板付I式土器水田址（水路）

2. 調査体制

おりからの列島改造に伴う開発の急増により、埋蔵文化財の緊急調査件数が大幅に増加し、教育委員会文化課埋蔵文化財係では、緊急調査に対応する体制を完全にとることができない状況下におちいった。文化課では急掘、板付遺跡の調査に従事していた板付遺跡調査事務所と埋蔵文化財係を合同させた調査体制を組み、市内遺跡の緊急調査に備えることとなった。昭和52・53年度の市内遺跡の緊急調査のうち、当班が受け持った調査は、板付遺跡および周辺遺跡の15ヶ所、有田・小田部遺跡の3ヶ所、神松寺御陵古墳・神松寺遺跡の計19ヶ所である。有田・小田部遺跡・神松寺・神松寺御陵古墳については、すでに報告書を刊行しているので、詳細は下記の報告書によられたい。

『神松寺遺跡－弥生時代住居址と前方後円墳の調査－』福岡市埋蔵文化財調査報告書第45集 1978年

『有田・小田部第6集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第113集 1985年

『有田・小田部第19集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集 1994年

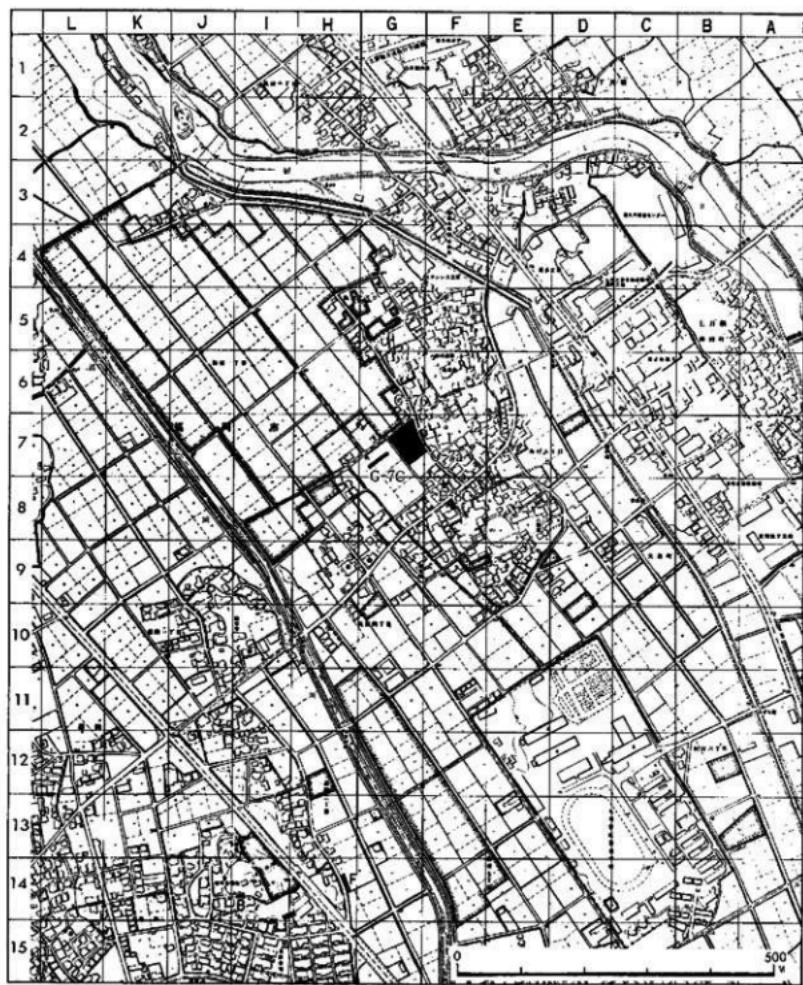


Fig. 1 板付遺跡の地形と各調査区

『有田・小田部第23集』福岡市埋蔵文化財調査報告書第470集 1996年

調査地区 福岡市博多区板付2丁目～5丁目

調査期間 1977（昭和52）年5月11日～1979（昭和53）年1月20日

調査主体 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財係・板付遺跡調査事務所

調査関係者

調査指導委員

岡崎 敬（九州大学文学部教授・故人）

横山浩一（九州大学文学部教授・現福岡市博物館館長）

森貞次郎（九州産業大学教授・故人）

三島 格（福岡市教育委員会文化財専門員・現肥後考古学会会長）

藤井 功（福岡県教育庁文化課長・故人）

下條信行（九州大学文学部助手・現愛媛大学文学部教授）

後藤 直（福岡市立歴史資料館・現東京大学文学部教授）

福岡市教育委員会

教育長 田中成一（当時） 町田英俊（現）

文化部長 志鶴幸弘（当時）

文化財部長 平塚克則（現）

文化課長 清水義彦・井上剛紀（当時）

埋蔵文化財課長 柳田純孝（現）

埋蔵文化財係長 三宅安吉（当時）

板付遺跡調査事務所長 植崎幸利（当時）

調査第1係長 二宮忠司（現）・調査第2係長 山口譲治（現）

庶務会計 安田正義・河鍋好輝（当時）・木原淳二・谷口真山美・河野淳美（現）

発掘調査担当

山崎純男（文化課埋蔵文化財係・現文化財部大規模事業等担当課長）

沢 皇臣（文化課板付遺跡調査事務所・現宮崎県考古学会）

山口譲治（文化課板付遺跡調査事務所・現埋蔵文化財課調査第二係長）

横山那緒（文化課板付遺跡調査事務所・現埋蔵文化財センター主任文化財主事）

調査補助員

原 俊一・前田義人・奈良崎和典・森瀬圭子・小野山美子・村上順子・伊崎俊秋・

木下尚子・田口真理・久保智康・山田威洋・市橋重喜・松永幸男・為貞由紀・

速見信也・谷 豊信・出利葉浩司・福岡大学歴史研究会諸氏

3. 福平・早良平野における弥生時代開始期の遺跡

板付遺跡周辺の遺跡とその歴史的環境、あるいは、さらに拡大した福岡平野の遺跡と歴史的環境について、これまで刊行された福岡市埋蔵文化財調査報告書の中で、再三・再四ふれられているので、詳細はそれらの報告書にゆだね、ここでは省略する。

本稿では、板付遺跡の位置する福岡平野とその西側にある早良平野を中心に、弥生時代開始期の遺跡とその分布を検討し、福岡・早良両平野における弥生時代開始期の状況を素描し、問題点を抽出してみたい。

Fig. 4 は、1998年度末現在における弥生時代開始期の遺跡分布図である。筆者はかつて同様の分布図を二度にわたって作成したことがある。最初は1980年に作成し (Fig. 2)、2回目は14年後の1994年に作成 (Fig. 3) したものである。前2回は刻目突帯文土器・板付I式土器出土遺跡の分布図で、今回の分布図は、刻目突帯文土器・板付I式土器に加えて刻目突帯文土器の直前とされる黒川式土器併行期の遺跡を加えた。以下、3回の分布図を比較検討してみよう。もちろん、比較検討するのは、刻目突帯文土器・板付I式土器段階の遺跡で、黒川式土器併行期の遺跡は除いている。

1回目、1980年の段階では、合計24ヶ所の遺跡が確認されている。地域別にみると、裏柏屋の海岸部小平野では鹿東町貝塚、夜白遺跡の2ヶ所で、共に小規模の貝塚を伴い、生業の一部が海に依拠していたことが想定される。表柏屋の多田羅川・宇美川流域の柏屋平野では遺跡の発見はない。御笠川・那珂川流域の福岡平野では、板付遺跡（環濠集落・墓地・水田址）春住遺跡（貯藏穴）中・寺尾遺跡（墓地）・諸岡遺跡をはじめ計9ヶ所の遺跡が確認されている。板付遺跡では刻目突帯文土器単純期から板付I式土器段階の水田址が確認され、その重要性が増加した。しかし、板付遺跡以外はいずれも小規模な遺跡である。室見川流域の早良平野では、有田遺跡（環濠集落）、藤崎遺跡（墓地）が古くから有名である。低地に発見された十郎川・石丸遺跡では刻目突帯文土器と板付I式土器共伴期の土器、石器等の遺物が多量に出土し、その構成を明らかにしている。また、有田台地の西側冲積地に位置する有田七田前遺跡では溝より黒川式土器から刻目突帯文土器単純期の遺物が多量に出土して注目された。計12ヶ所の遺跡が確認されている。有田遺跡以外は比較的小規模な遺跡である。早良平野以西の今津・今宿地区では野々花学園遺跡（墓地）が知られ、地図外に長浜貝塚がある。板付II式土器段階の今津貝塚の存在を考えると、この地域の遺跡も生業の一部を海に依存していたことが考えられる。

2回目、1994（平成6）年段階では、合計52ヶ所の遺跡が確認され、1980年段階の遺跡数に比し倍増している。裏柏屋の海岸部小平野では遺跡数に変動はない。表柏屋の柏屋平野では多出羅川中流域で新たに江辻遺跡1ヶ所が発見された。江辻遺跡は刻目突帯文土器を主体とした集落址で、わずかに板付I式土器が混在する。集落はほぼ完掘され、松菊里型堅穴住居址11棟、掘立柱建物7棟が確認されている。周辺の低地に水田の存在が予想される。福岡平野では御笠川、那珂川中流域を中心に、前回の2倍の22ヶ所の遺跡が確認されている。特に野多目遺跡で刻目突帯文土器単純期の水田址が確認され、板付遺跡の成果を追認した意義は大きい。また、福岡空港内の雀居遺跡では、水路に投棄された状態で多量の土器・石器・木製農具・紡績具等が出土し、不明確であった道具類の組み合わせが明らかになったことは特筆すべきである。時期的には刻目突帯文土器単純期から板付I式土器共伴期、一部、板付II式土器期におよんでいる。なお、刻目突帯文土器に共伴して、大洞C式上器、林岩里タイプの無文土器が出土しており、時間的に横の拡張性が確認できたことは大きい成果である。板付遺跡の西約2kmの比恵台地西端に確認された那珂環濠遺跡は、北部九州で初めて明らかにされた二重環



Fig. 2 福岡・早良平野における弥生時代開始期の遺跡(1)

塗である。出土遺物は刻目突帯文土器に限られるが、型式的には板付I式土器共伴期の刻目突帯文土器とみられる。同一平野に2ヶ所の環濠集落が対称的に確認された意味は大きい。早良平野では古武・金武の扇状地を除いた平野全域に遺跡が確認され、倍増まではいかないが、遺跡数は急増している。遺跡はいずれも沖積地に立地し、早良平野は刻目突帯文土器の段階には、すでに平野全体にわたって水田開発が終了したかの感を与える。



Fig. 3 福岡・早良平野における弥生時代開始期の遺跡(2)

今回、1998年末段階では、遺跡数はさらに増加し、計98ヶ所の遺跡が確認されている。前回より5年弱を経過したにすぎないが、すでに倍増する遺跡があらたに発見されている。特に福岡平野での遺跡の倍増が顕著で、26ヶ所の遺跡が新たに確認され、計48ヶ所となっている。福岡平野も早良平野同様に平野全体に遺跡が拡がり、東の粕屋平野や西の糸島平野でも同様の傾向がうかがえるようになってきた。もはや、北部九州における開拓は刻目突堤土器段階にはかなり拡大していたことは疑いな



Fig. 4 福岡・早良平野における弥生時代開始期の遺跡(3)

い状況を示している。

弥生時代開始期の遺跡は、板付遺跡発掘調査開始の昭和20年代後半から昭和40年代後半までに、福岡・早良両平野およびその周辺地域では、夜臼遺跡、板付遺跡、春住遺跡、有田遺跡、長浜貝塚等10指に満たない遺跡が知られていたのみである。まさに隔世の感、弥生時代開始期の遺跡分布と遺跡の

内容は一変した。遺跡の増加は昭和40年代に始まる国土開発と無関係でなく、開発に伴う緊急調査によって確認された遺跡が多い。早良平野における遺跡の急増は、農地から宅地への転用、圃場整備事業に伴う緊急調査によるものである。また、福岡平野の場合は、都市化が比較的早かったため、遺跡の存在は未確認の状態であったが、最近、住宅の改築や再開発に伴う発掘調査によって遺跡が急増している。かっての開発によって遺跡の残存状況は良くないが、那珂遺跡群における二重環濠をもった集落など重要な発見もある。柏屋平野や糸島平野は福岡の都市部に比較して、開発がゆるやかであり、それに伴う緊急調査も多くないが、福岡・早良両平野と同じような遺跡分布を示すことは疑いなかろう。

Fig. 4 に示した現時点の弥生時代開始期の遺跡分布から、福岡・早良両平野を中心とした弥生時代開始期の状況、問題点を検討してみよう。

先ず、刻目突帯文土器の直前の時期、黒川式土器併行期の遺跡分布から検討していくことにしよう。現在、確実に水稻農耕が存在するのは刻目突帯文土器単純期段階で、それ以前には、炭化米、土器上の梗圧痕、土器胎土中あるいは包含層におけるイネ・プランツオ・パール等、断片的な資料があり、稻作農耕の始まりはまだ古く遡りそうである。それを証明する一つの方法として遺跡のあり方、分布は大きな意味をもっている。黒川式土器併行期の遺跡は、これまでこの地域ではあまり知られていないが、山麓部から沖積地の調査が進むにつれて遺跡数が増大している。両平野を中心に26ヶ所の遺跡が確認されている。柏屋平野では、分布図には2遺跡を示しているが、地図外の平野奥部の久山町には有力な当該期の遺跡がある。福岡平野では平野の西と南を限る山地の裾部に11ヶ所の遺跡が点在している。開発の進んでいる新幹線車両基地周辺に遺跡が多いことは、今後の遺跡分布のあり方に示唆的である。遺跡はいずれも小規模である。早良平野では13ヶ所の遺跡が確認されている。遺跡の立地は福岡平野同様に大部分は平野周辺の山麓部に立地している。ただし、田村、東入部、四箇、入部、岩本、有田七田前遺跡は沖積中に位置し、注目される。しかし、遺跡はいずれも小規模である。東入部遺跡は黒川式土器併行期よりも若干古い時期であるが、竪穴住居址、竪穴住居址の可能性ある遺構が計4棟確認されている。最小単位の集落と考えられ、遺跡の構造が判明している唯一の例である。早良平野の西の今宿、今津地区では、高祖山の北麓で3ヶ所の遺跡が確認されている。

当該期の遺跡分布について若干のまとめをしておこう。① 東入部遺跡では居住址4棟から構成される最小単位の集落構造が明らかにされている。② しかし、大部分の遺跡は遺構を伴わず、少量の遺物を出土する小規模遺跡である。③ 遺跡立地は山麓部が圧倒的に多いが、早良平野では沖積地に立地する遺跡も出現していく。④ 当該期から刻目突帯文土器期に連続した遺跡が存在する。柏屋平野2遺跡 福岡平野4遺跡 早良平野2遺跡を数える。⑤ 後期後半から晩期前半に盛行した打製石斧が残存し、石器構成の中に占める比重は前段階ほどではないが高い。②～⑤から、この時期の生業がどのようなものであったか興味あるところである。稻作農耕の存在も含めて今後の検討課題としておきたい。

次に刻目突帯文土器の段階の遺跡分布についてみてみよう。

刻目突帯文土器の段階は大きく刻目突帯文土器単純期と板付I式土器併存期の二時期に分けられる。刻目突帯文土器単純期の存在は本報告に収録したG-7a・7b調査区で明らかになったもので、現在においても刻目突帯文土器単純期の遺跡の数は少ない。柏屋屋敷内には、現在明確な単純期の遺跡はない。福岡平野では、御笠川中流域に、板付、雀居、諸岡の各遺跡が出現し、那珂川中流域には野多目遺跡が出現する。板付、諸岡、野多目遺跡は中位段丘II面に、雀居遺跡は御笠川の自然堤防上に立地している。板付、諸岡、雀居遺跡では竪穴住居や土坑等の遺構があり、集落の存在を示しているが、遺存状

態が悪く集落構造の把握までにはいたっていない。また、板付、野多目遺跡では水出が検出され、その構造は本報告に収録するとおりである。雀居でも水路が検出され、多量の木製農具が出土しているので、周辺に初期水田が存在しているのは疑いなかろう。やゝおくれて、那珂川中流域右岸に那珂環濠集落遺跡が出現する。全掘していないが、徑125～150mの二重の環濠になると考えられる。濠内には刻目突帯文土器をはじめ、石器等の遺物があるが、板付遺跡の環濠の遺物と比較すると極端に少なく、土器・石器等の消耗度に大きな差があったことがわかる。その差には種々の問題点が内在していると考えられる。後で検討してみよう。那珂環濠集落遺跡の状況に類似する例として、後述する早良平野の有田遺跡がある。環濠の規模は大きく異なるが濠内の遺物の状況は極めて良く似ている。有田遺跡の環濠は板付I式土器共伴期でわずかに板付I式土器を共伴するが、場所によっては刻目突帯文土器が単純に出土する。早良平野では刻目突帯文土器の遺跡として有田七田前遺跡があげられ、橋本一丁田、十郎川遺跡の一部は単純期まで遡る。いずれの遺跡も沖積低地の自然堤防上に立地している。明確な遺構を伴わないが、水路状の溝が確認されており、水田遺構に伴うものと考えられる。遺物の出土量や種類から、集落は近くに存在していることが推測できる。いずれの遺跡も室見川中流域から下流域に位置している。

板付I式土器共伴期の遺跡分布は、前段階の遺跡分布を踏襲しながら、平野全体に拡大しているが、板付I式土器との関係から見るとかなり複雑な様相を示している。柏原平野では先にあげた江辻遺跡で、松葉里型住居址が検出されている。出土土器の90%以上が刻目突帯文土器で占められ、板付I式土器は極めて少量で、他より搬入された可能性が強く、刻目突帯文土器を使用した人々の集落とみられる。福岡平野では、板付遺跡をはじめ、那珂環濠遺跡、比恵遺跡群（春住遺跡、瑞穂遺跡等）柏田遺跡、雀居遺跡、天神森、中・寺尾遺跡、御陵前ノ株遺跡等、大部分はこの時期に属する遺跡である。このうち、板付、雀居の両遺跡は刻目突帯文土器単純期から継続する遺跡である。注目されるのは板付遺跡の存在である。この時期に集落に環濠をめぐらし、水田の幹線水路は環濠をのせる台地をとり囲むように配され、広義の二重環濠の様相を示している。出土土器の割合は、日本考古学協会の環濠の調査、あるいは、これまで実施してきた福岡市の調査では5割強を板付I式土器が占めている。筆者が調査した環濠（東部分）、弦状濠では7割前後が板付I式土器で占められ、刻目突帯文土器は少ない。福岡、早良およびその周辺では唯一、板付I式土器が優越する遺跡であり、かつ大規模であることの意味は大きい。板付遺跡に近い雀居遺跡や比恵遺跡群では、他の遺物に比較して板付I式土器の占める割合は高いが、5割を超えることはなく、だいたい3割前後にとどまっている。一方、この段階の遺跡でありながら、板付I式土器を共伴せず、刻目突帯文土器のみで構成される遺跡もある。先にあげた那珂環濠遺跡、野田目括渡遺跡、柏田遺跡はその代表的な遺跡である。このような遺跡は、平野の中部から奥部に顕著である。このような状況は、福岡平野においても、可耕地の拡大を荷ったのが、刻目突帯文土器を使用した人々の集落であったことを推測させる。なお、最近、月隈丘陵の麓部にこの時期の墳墓が発見されつつある。20～30基前後からなる小規模な墓地で板付I式～II式の小壇が副葬されている。天神森遺跡、御陵前ノ株遺跡、中・寺尾遺跡、伯玄社遺跡等がある。現在、集落との関係が明らかでなく、その位置づけは今後にゆだねることにする。早良平野の状況も福岡平野と良く似ているが、板付遺跡のような特異な遺跡の存在はない。早良平野の拠点集落と目される有田遺跡には、板付遺跡を上まわる大規模な環濠集落が出現する。前述したように主体となるのは刻目突帯文土器で、少量の板付I式土器が共伴している。橋本一丁田遺跡、拾六町平田遺跡、田村遺跡群等は、早良平野におけるこの段階の代表的な遺跡である。これらの遺跡でも有田遺跡同様に主体を占める土器は刻目突帯文土器で、板付I式土器は客体として存在するにすぎない。このように、早良平野

でも状況は福岡平野と同様である。墓地については古くから著名な藤崎遺跡がある。これまで板付I式からII式にかけての小壺が発見されていたが、最近の調査で、これら小壺は木棺墓の副葬品であることが判明した。

突帯文期の塚棺も出土している。墓地はその全域が明らかになっていないが、大規模なものではない。他に、田村、人部遺跡群内に刻目突帯文土器期、板付I式土器期の塚棺（塚棺）から構成される墓地が発見されている。いずれも20基前後からなる小規模な墓地である。福岡平野とは立地が異なり、沖積地の自然堤防状に位置している。墓地と集落の関係は福岡平野同様に明確でないが、早良平野では、墓地の周辺に同時期の遺跡が散在しているので、近い将来、有機的関連性が把握できるものと思われる。早良平野の状況は以上の如くである。やゝ時期的に下るが、有田遺跡の環濠集落の変遷が注目されるので概略を説明しておこう。有田遺跡の環濠は有台地の南半部の頂部を取り囲むように掘削された大規模なものであることは先述したとおりであるが、最近の調査で他に2ヶ所の環濠の存在がわかつてきた。これらの環濠は互いに切り合うか、近接して存在する。仮に最初に確認された環濠を1号環濠、切り合い関係にある環濠を2号環濠、東側に存在する環濠を3号環濠として話を進める。1号環濠は長径300m×短径200m長楕円形、断面形はV字形、刻目突帯文土器、板付I式期土器共伴期に掘削される。出土遺物は極めて少なく、存続期間が短期間であったことを物語っている。刻目突帯文土器、板付I式期土器共伴期に使用が停止している。2号環濠は配置からみて1号環濠と切り合い関係にあるとみられる。現在、直線的に約40mが確認されている。古墳時代に再掘削され利用されているので、遺物は最下層にわずかに板付I式期土器が存在するに過ぎない。断面形はV字形をなす。平面形や時期があと一步、不明瞭であるので今後の問題点としておこう。3号環濠は1号環濠の東側に確認された環濠で1号環濠と直接の切り合い関係はない。丘陵頂部から丘陵東斜面にかけて存在する。2ヶ所でV字濠が確認され、その距離は75mを測る。あまりに部分的で平面プランは明らかではないが、規模的には板付遺跡の環濠と同程度か。濠底には板付IIa式土器がほぼ単純に、押しつぶされた状態で多量に存在する。極少量の退化した刻目突帯文土器が伴出する。小壺はいまだ板付I式期土器の特徴を良くそなえている。この環濠は板付IIa式土器以降は廃絶したとみられ、後続する時期の遺物の出土はない。ただし、上層には古墳時代初頭の遺物があり、この環濠は古墳時代には凹みとして遺存していたことが知られる。このように、有田遺跡では同一地域に、しかも短期間のうちに数ヶ所の環濠集落が次々に形成されていることは興味あるところである。後で若干の考察を加えてみたい。今宿・今津地区では遺跡の増加は顯著ではないが、今津の野々花学園遺跡や今宿の砂丘上に当該期のカメ柏墓地が形成されるが、他地域の墓地同様に小規模である。

刻目突帯文土器・板付I式期土器共伴期には北部九州の沿岸小平野は、これまでみてきたように遺跡は平野全域に拡大している。遺跡は沖積地の中位段丘面や自然堤防上に立地し、稻作農耕との強い結びつきを示している。遺跡自体も水路等の水田造構と関連したものが多い。ちなみに、明治の中頃に作成された地図に遺跡分布を重ね合わせると、当時の農村集落と遺跡が非常に良く重なり合う。このことは、弥生時代開始期には、平野部における開田状況が、想像以上に進んでいたことを示唆している。また、当該期の遺跡の主体となる土器は刻目突帯文土器で、板付I式期土器は客観的に存在するに過ぎない。これと逆の状況を示しているのが板付遺跡であり、板付周辺の当該期遺跡も板付I式の占める割合は高い。このことは、弥生時代開始期の複雑な様相を反映しているとみることができよう。今少し、拠点集落とみられる環濠集落をとおして考察を進めてみる。福岡平野の環濠集落は板付遺跡と那珂環濠集落の2ヶ所、早良平野は有田遺跡に3ヶ所が存在している。福岡平野の両遺跡はほぼ同時期である。板付遺跡は板付I式期土器が主体で、中期まで継続しているものの、前期段階では

漆の大半が埋没していて、その機能は消失していたと考えられる。一方、那珂環濠遺跡は刻目突帯文土器が主体を占めるが量的には少なく、板付I式期土器共存期には廃棄されていて、板付遺跡とは対称的である。早良平野の有田遺跡は、1号、2号、3号環濠の順に形成されている。2号は不明な点が多いので省略する。1号環濠は刻目突帯文土器が主体であるが、出土量は極めて少ない。該期のうちに使用が停止したと考えられる。3号環濠は板付IIa式土器段階に形成され、板付I式期土器の系譜を引く板付IIa式土器が主体で、ほぼ単純に近い。福岡平野における板付遺跡と那珂環濠遺の関係と早良平野における有田遺跡の3号環濠と1号環濠の関係は、時期的には若干のずれがあるが、相対立した構図として示唆的である。板付遺跡の環濠の特異性から、その性格を刻目突帯文土器社会に打ち込まれたユロニーと規定すると、那珂環濠や有田1号環濠は、その構成要素から、板付環濠に対し刻目突帯文土器社会の拠点集落として成立した可能性がある。しかし、それからの環濠も板付I式期土器社会の発展に伴い、吸収され短期間に消失したと考えられる。そして、有田3号環濠は早良平野に成立した二次的なコロニーとしての機能をもったと理解できる。宗像の砂丘上に成立した今川遺跡も環濠をもち、板付IIa式土器を主体とする点、コロニーとしての性格をもっていたと考えることができる。

この問題については、今後さらに検討を進め再論したいと思う。

註

- 1、山崎純男「弥生文化成立期における土器の編年的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合ー」『古文化論叢』1980年
- 2、山崎純男「北部九州における初期稻作」『古代の水田を考える』帝塚山考古学研究所、1994年

付記、本稿脱稿後『江辻遺跡—第4地点』柏原町教育委員会に接した。黒川式土器併行期から刻目突帯文土器にかけ、豊富な資料が出土している。刻目突帯文土器は一条突帯が多く、底部が丸底になる変形土器もある。東からの影響の強い土器群で注目されるが、本稿では触れることができなかった。

弥生時代開始期遺跡地名表

No	遺跡名	所在地	遺構 (性格)	出土遺物			文献
				晩期	突帯文	板付I	
1	東町貝塚	古賀市鹿部東町	貝塚	○	○		1
2	夜白	柏原郡新宮町夜白	貯藏穴(貝塚)	○	○	○	2、3
3	蒲田東	福岡市東区蒲田		○	○		4
4	江辻	柏原郡柏原町江辻	集落	○	○	○	5
5	江辻第4地点	柏原郡柏原町江辻		○	○	○	145
6	博多遺跡群	福岡市博多区博多			○		6
7	宝満尾	福岡市博多区宝満尾	貯藏穴		○		7
8	吉塚本町	福岡市博多区吉塚本町		○			8
9	雀居	福岡市博多区雀居	溝、土坑	○	○	○	9、10
10	瑞穂	福岡市博多区瑞穂	水田址	○	○	○	11
11	春住	福岡市博多区春住	貯藏穴	○	○	○	12
12	比恵遺跡群	福岡市博多区比恵		○	○	○	13、14

13	那珂	福岡市博多区那珂		○ ○	15、16
14	東那珂	福岡市博多区東那珂		○	
15	那珂深才	福岡市博多区那珂字深才		○	
16	那珂環濠	福岡市博多区那珂	環濠集落	○ ○	17
17	那珂君休	福岡市博多区那珂字君休		○	18、19
18	那珂久平	福岡市博多区那珂字久平		○	20
19	板付	福岡市博多区板付	環濠集落 墓地・水田	○ ○ ○ ○	21~38
20	諸岡	福岡市博多区諸岡	集落	○ ○ ○	39、40
21	警察学校	福岡市博多区		○	
22	五十川赤目	福岡市博多区五十川字赤目		○	41
23	三筑	福岡市博多区三筑		○	42
24	井相田	福岡市博多区井相田			43
25	天神森	福岡市博多区字天神森	墓地	○	44
26	大橋南	福岡市南区大橋		○	45
27	野多目4	福岡市南区野多目			46
28	野多目	福岡市南区野多目	水田	○ ○	47
29	野多目拈渡	福岡市南区野多目字拈渡		○ ○	48、49
30	中・寺尾	大野城市大字中字寺尾	墓地	○	50、51、143
31	御領前ノ塚	大野城市中2丁目522-1	墓地	○	52
32	石勺	大野城市曙町2丁目4番18号		○	53、54
33	牛頭塚原	大野城市牛頭～烟ヶ坂一丁目		○	55
34	井手ノ原	筑紫郡那珂川町大字中原字井手ノ原		○	56
35	柏田	春日市上白水		○ ○	57
36	深原	筑紫郡那珂川町中原		○	58
37	門田	春日市上白水			59
38	辻田	春日市上白水		○	60
39	戸内	筑紫郡那珂川町大字今光字戸内		○	61
40	伯玄社	春日市	墓地	○	70
41	松木	筑紫郡那珂川町			62、63、66
42	観音山	筑紫郡那珂川町中原		○	64、65
43	山田西	筑紫郡那珂川町山田字西		○	67
44	ヒナタ	筑紫郡那珂川町		○	68
45	中原	筑紫郡那珂川町中原		○ ○ ○	69
46	柏原A-2	福岡市南区柏原字荒谷		○ ○ ○	71
47	柏原K	福岡市南区柏原字ゴン		○ ○	
48	笠栗	福岡市城南区			
49	クエゾノ	福岡市早良区		○	73
50	藤崎	福岡市早良区藤崎	墓地	○ ○	74~77
51	原談儀	福岡市早良区原字談儀		○	78
52	原16次	福岡市早良区原		○	79

53	原 深町	福岡市早良区原深町		○		80
54	有田	福岡市早良区有田	環濠集落	○ ○ ○		81~
55	小田部	福岡市早良区小田部		○ ○		92
56	有田七田前	福岡市早良区有田字七田前	溝	○ ○ ○		93
57	下山門	福岡市西区下山門		○		94
58	拾六町ツイジ	福岡市西区拾六町字ツイジ	土坑	○ ○ ○ ○ ○		95
59	高崎	福岡市西区高崎		○		96
60	高崎5号墳	福岡市西区高崎		○		97
61	湯納	福岡市西区拾六町字湯納		○		98、99
62	十郎川	福岡市西区石丸		○ ○ ○ ○		100
63	拾六町平田	福岡市西区拾六町字平田		○ ○ ○ ○		101
64	広石	福岡市西区広石		○		102
65	牟多田	福岡市西区拾六町字牟多田		○ ○ ○		103
66	鶴町	福岡市早良区加茂字鶴町		○ ○ ○ ○		104
67	高柳	福岡市早良区高柳		○		105
68	羽根戸	福岡市西区羽根戸		○		106
69	金武	福岡市西区金武		○		107
70	橋本一丁田	福岡市西区橋本字一丁田	水路	○ ○ ○ ○ ○	114、108	
71	野芥	福岡市早良区野芥		○		109
72	次郎丸	福岡市早良区次郎丸		○ ○		110、112
73	次郎丸石高	福岡市早良区次郎丸字石高		○ ○	42、110	111
74	野芥大藪	福岡市早良区野芥字大藪				113
75	田村	福岡市早良区田村		○ ○		115
76	々	福岡市早良区田村		○ ○		1
77	々	福岡市早良区田村	墓地	○		119
78	四箇	福岡市早良区四箇		○		120
79		福岡市早良区四箇		○		
80	四箇南	福岡市早良区四箇		○		125
81	入部	福岡市早良区入部				
82	東入部	福岡市早良区入部	集落	○		126
83	々	福岡市早良区入部				1
84	々	福岡市早良区入部				1
85	々	福岡市早良区入部				
86	々	福岡市早良区入部	墓地	○		130
87	岩本	福岡市早良区入部字岩本		○		131
88	古田	福岡市早良区入部字古田		○ ○		132
89	浦江谷	福岡市西区金武				大塚
90	脇山A	福岡市早良区脇山		○		133
91	B	福岡市早良区脇山		○		1
92	C	福岡市早良区脇山		○		137

93	飯氏	福岡市西区飯氏			138
94	今宿松原	福岡市西区今宿松原	墓地	○	139
95	周船寺	福岡市西区周船寺			140、141
96	米單板付基地	福岡市博多区		○ ○	142
97	野々花学園	福岡市西区今津野々花学園	墓地	○	
98	石丸	福岡市西区橋本石丸			

文献目録

- 木村幾多郎・高橋 微「福岡県古賀町鹿部東町貝塚」『九州考古学』No53 九州考古学会 1978年
- 森貞次郎「福岡県夜久遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂 1961年
- 西田大輔・夜久・三代地区遺跡群』新宮町埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 新宮町教育委員会 1994年
- 長永 伸「蒲田部木原遺跡5」福岡市埋蔵文化財調査報告書第550集 福岡市教育委員会 1998年
- 新宅信久「蒙古の渡米作業場落一福岡県江口遺跡」『季刊考古学』第45号 1993年
- 柳沢一男・杉山富雄「摩多ニ第一・21・20・22火査定の概要一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第118集 福岡市教育委員会 1985年
- 山崎純男「宝満尾遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第26集 福岡市教育委員会 1974年
- 常松幹雄「吉塚町本郷遺跡2次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第320集 福岡市教育委員会 1993年
- 下村 智「雀居遺跡2一福岡空港西側整備に伴う文化財調査報告書一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第406集 福岡市教育委員会 1995年
- 松村道博「雀居遺跡3一福岡空港西側整備に伴う文化財調査報告書一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第407集 福岡市教育委員会 1995年
- 吉岡完祐他「瑞穂一福岡市比恵台寺遺跡」日本住宅公同 1980年
- 筑紫野史学研究会「見捨てられた春住遺跡」1972年
- 官井善朗「比恵遺跡群08一比恵遺跡群第52次発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第404集 福岡市教育委員会 1995年
- 山口讓治・吉留秀敏・小畑弘己・田崎博之「比恵遺跡群09」福岡市埋蔵文化財調査報告書第255集 福岡市教育委員会 1991年
- 山口讓治・吉留秀敏・田崎博之・龜井明徳「那珂5-1第10-12・14・16・17・21次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第291集 福岡市教育委員会 1992年
- 佐藤一郎・長家 伸「那珂遺跡19-那珂遺跡群第51~54次発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第525集 福岡市教育委員会 1997年
- 吉留秀敏「那珂11-2重環濠集落の調査一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第366集 福岡市教育委員会 1994年
- 横山邦継・浜石哲也「那珂郡体遺跡II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第106集 福岡市教育委員会 1984年
- 小畑弘己「那珂郡体遺跡IV」福岡市埋蔵文化財調査報告書第208集 福岡市教育委員会 1989年
- 方武卓治・大庭庭「那珂久平遺跡II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第163集 福岡市教育委員会 1987年
- 森貞次郎・岡崎 敬「福岡県板付遺跡」『日本農耕文化の生成』東京堂 1961年
- 杉原莊介「環濠集落付遺跡」日本考古学会第35回公研研究発表會要 1969年
- 杉原莊介「福岡県板付遺跡」昭和三四年・昭和四四年度の調査「来る丁」第4号 1970年
- 下條信行「福岡市板付遺跡調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第8集 福岡市教育委員会 1970年
- 後藤直・沢臣臣・横山邦継・山口讓治他「板付一市営住宅建設にともなう発掘調査報告(1971-1974)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第35集 福岡市教育委員会 1976年
- 後藤直・沢臣臣・山口讓治・横山邦継「板付周辺遺跡調査報告(2)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第31集 福岡市教育委員会 1975年
- 沢臣臣・山口讓治・横山邦継・浜石哲也・原俊一「板付周辺遺跡調査報告書(3)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第36集 福岡市教育委員会 1976年
- 横山邦継・沢臣臣・山口讓治「板付一県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第39集 福岡市教育委員会 1977年
- 沢臣臣「板付一県道505号線新設改良に伴う発掘調査報告書(2)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第48集 福岡市教育委員会 1978年
- 山崎純男・沢臣臣・山口讓治・横山邦継「板付遺跡調査概報一板付周辺遺跡調査報告書(5)(1977-8年度)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第49集 福岡市教育委員会 1979年
- 山口讓治・松村道博・浜石哲也「板付一板付会館建設に伴う発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第73集 福岡市教育委員会 1981年
- 柳沢一男・二宮忠司・横山邦継「板付周辺遺跡調査報告書(8)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第83集 福岡市教育委員会 1982年
- 杉山富雄・小畑弘己「板付周辺遺跡調査報告書(1)一下水道工事に伴う削金(1984-85年度)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第135集 1986年
- 山口讓治・杉山富雄・吉留秀敏「板付周辺遺跡調査報告書(2)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第154集 福岡市教育委員会 1987年
- 横山邦継「板付周辺遺跡調査報告書(3)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第171集 福岡市教育委員会 1987年

36. 荒牧宏行「板付周辺遺跡調査報告書04-1987年度一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第206集 福岡市教育委員会 1989年
37. 山崎純男・二宮忠司・力武卓志「板付遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第410集 福岡市教育委員会 1995年
38. 山崎純男「板付周辺遺跡調査報告書第19集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第567集 福岡市教育委員会 1998年
39. 櫻沢一男・横山邦雄「板付周辺遺跡調査報告書(6)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第57集 福岡市教育委員会 1980年
40. 櫻沢一男・杉山富雄他「諸岡遺跡-第14・17次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第108集 福岡市教育委員会 1984年
41. 井沢洋一・池田孝弘「五十川赤目遺跡-南区五十川に所在する五十川遺跡群の第1次調査一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第363集 福岡市教育委員会 1994年
42. 山崎純男・沢臣昌・『学校建設地内遺跡調査報告書-三筑遺跡・次郎丸高石遺跡』福岡市埋蔵文化財調査報告書第69集 福岡市教育委員会 1981年
43. 大庭康時「升井田C第6次-升井田C遺跡第6次調査の概要一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第519集 福岡市教育委員会 1997年
44. 松村道博・白井克也・佐藤「下月隈火森森遺跡Ⅲ-都市計画道路福岡空港線・高木下月隈線建設に伴う埋蔵文化財調査-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第457集 福岡市教育委員会 1996年
45. 横山邦雄・小林義彦「公園関係埋蔵文化財調査報告書I」福岡市埋蔵文化財調査報告書第219集 福岡市教育委員会 1990年
46. 大庭康時「野多目A-野多目口A遺跡群3次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第263集 福岡市教育委員会 1991年
47. 山崎純男「野多目遺跡群-稻作開始期の水田遺跡の調査-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第159集 福岡市教育委員会 1987年
48. 山口謙治「野多目古渡遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第93集 福岡市教育委員会 1983年
49. 小林義彦・山村信栄・岩本陽介「野多目古渡遺跡Ⅲ-野多目中央公園付設道路拡幅に伴う発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第160集 福岡市教育委員会 1987年
50. 清田信也・酒井仁夫「中・寺尾遺跡」大野町の文化財第3集 1972年
51. 馬田弘忠編「中・寺尾遺跡」大野城市文化財調査報告書第1集 大野城市教育委員会 1977年
52. 舟山良一・向直也・『前原前・後遺跡』大野城市文化財調査報告書第48集 大野城市教育委員会 1997年
53. 舟山良一・向直也・石木秀啓「石勺遺跡I-丘地点の調査-」大野城市文化財調査報告書第47集 大野城市教育委員会 1996年
54. 舟山良一・石木秀啓・丸尾博志・石勺遺跡II-G地点の調査-」大野城市文化財調査報告書第50集 大野城市教育委員会 1997年
55. 舟山良一・石木秀啓・徳本洋・「倉石地区面整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書第44集 人野城市教育委員会 1995年
56. 鶴久嗣郎・鶴田康旗・井上裕弘・木下修・小池史哲「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-春日市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査-」第2集 福岡県教育委員会 1976年
57. 小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-春日市・柏田遺跡の調査-」第4集上巻 福岡県教育委員会 1977年
58. 木下修・橋昌信「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-筑紫郡那珂川町大字中原所在深原遺跡の調査-」第8集 福岡県教育委員会 1978年
59. 井上裕弘編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-春日市・大字上白水字門田・辻田所在門田遺跡谷地区的調査-」第11集 福岡県教育委員会 1979年
60. 小池史哲編「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-春日市大字上白水所在辻田遺跡の調査-」第12集 福岡県教育委員会 1979年
61. 井上裕弘「山陽新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-鞍手郡若宮町・福岡市・筑紫郡那珂川町所在遺跡群の調査-」第13集 福岡県教育委員会 1979年
62. 深田康夫・佐々木隆彦編「松木遺跡I-筑紫郡那珂川町大字松木所在遺跡群の調査-」那珂川町文化財調査報告書第11集 那珂川町教育委員会 1984年
63. 深田康夫・佐藤昭則「松木遺跡II-筑紫郡那珂川町大字松木所在遺跡群の調査-」那珂川町文化財調査報告書第12集 那珂川町教育委員会 1985年
64. 佐藤昭則編「鍾乳山古墳群II-筑紫郡那珂川町大字中原所在古墳群の調査報告書-」那珂川町文化財調査報告書第14集 第14集 那珂川町教育委員会 1986年
65. 佐藤昭則・茂和敏編「鍾乳山古墳群III-福岡県筑紫郡那珂川町大字中原所在古墳群の調査-」那珂川町文化財調査報告書第17集 那珂川町教育委員会 1988年
66. 佐藤昭則・茂和敏「松木遺跡III-筑紫郡那珂川町松木所在遺跡群の調査-」那珂川町文化財調査報告書第21集 那珂川町教育委員会 1989年
67. 深田康夫・佐藤昭則「山田西遺跡-福岡県筑紫郡那珂川町大字山田字西所在の遺跡の調査-」那珂川町文化財調査報告書第28集 那珂川町教育委員会 1991年
68. 佐藤昭則・茂和敏「中原・ヒナタ遺跡群-博多南駅前土地区画整理事業地内遺跡群の調査-」那珂川町文化財調査報告書第39集 那珂川町教育委員会 1997年
69. 井上裕弘「安部・造善・片純地区区画整理事業地内第1地点の調査」那珂川町文化財調査報告書第39集所收 1997年
70. 松岡史・龜井勇「福岡県伯友社遺跡調査報告」福岡県文化財調査報告第36集 福岡県教育委員会 1967年

71. 山崎純男「柏原遺跡群V - 先土器・繩文時代遺跡A - 2・C・H・J - N 遺跡の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第190集 福岡市教育委員会 1988年
72. 三島格・高倉洋彰・沢田臣「桀葉古代製鉄遺跡発掘調査報告」福岡市土地開発公社 1969年
73. 岩松幹雄他「クエゾノ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第420集 福岡市教育委員会 1995年
74. 宮井善朗「九州大学文学部考古学研究室・九州大学教養部玉泉館収蔵の藤崎・西新町遺跡周辺の遺物」『藤崎遺跡Ⅱ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第137集所収 福岡市教育委員会 1986年
75. 井沢洋一・田中寿郎・山崎龍雄・米倉英樹「藤崎遺跡Ⅳ」福岡市埋蔵文化財調査報告書第138集 福岡市教育委員会 1986年
76. 小林義彦・瀧本正志「藤崎遺跡V - 第12・13・14次の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第232集 福岡市教育委員会 1990年
77. 浜石哲也・池崎謙二「藤崎遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第80集 福岡市教育委員会 1982年
78. 折尾学「原遺跡第一次の調査」福岡市早良区大字原字談諭 (株)ダイエー原店用地の調査一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第192集 福岡市教育委員会 1996年
79. 宮井善朗「原遺跡7 - 第16次発 sondage」福岡市埋蔵文化財調査報告書第337集福岡市教育委員会 1993年
80. 糸高憲雄・刀武卓治「原深町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集 福岡市教育委員会 1981年
81. 森貞次郎他「福岡市有田古代遺跡発掘調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第1集 福岡市教育委員会 1967年
82. 森貞次郎他「有田遺跡 - 福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第2集 福岡市教育委員会 1968年
83. 井沢洋一・米倉秀紀・谷沢仁「有田・小田部第7集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第139集 福岡市教育委員会 1986年
84. 井沢洋一・山崎龍雄・池田洋子「有田・小田部第8集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第155集 福岡市教育委員会 1987年
85. 井沢洋一・山崎龍雄・米倉秀紀「有田・小田部第9集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 福岡市教育委員会 1988年
86. 山崎龍雄・米倉秀紀「有田・小田部第10集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第212集 福岡市教育委員会 1989年
87. 山崎龍雄・米倉秀紀・加藤良彦「有田・小田部第21集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第264集 福岡市教育委員会 1991年
88. 井沢洋一「有田・小田部第22集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第427集 福岡市教育委員会 1995年
89. 井沢洋一「有田・小田部第24集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第471集 福岡市教育委員会 1996年
90. 井沢洋一「有田・小田部第29集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第538集 福岡市教育委員会 1997年
91. 井沢洋一「有田・小田部第30集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第547集 福岡市教育委員会 1998年
92. 菅波正人「有田・小田部31 - 有田遺跡群181次、184次調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第574集 福岡市教育委員会 1998年
93. 山崎純男・松村道博・山口讓治「有田七田前遺跡 - 有住小学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第95集 福岡市教育委員会 1983年
94. 山崎純男「下山門遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第23集 福岡市教育委員会 1973年
95. 山口讓治「城原小学校建設地内遺跡調査報告書 - 八六町ツイジ遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第92集 福岡市教育委員会 1983年
96. 浜田信也・酒井仁夫・兩島邦弘「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 福岡市大字拾六町所在の遺跡群」第1集 福岡県教育委員会 1970年
97. 畠原和彦・上野精志「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 福岡市西区大字拾六町所在の遺跡」第3集 福岡県教育委員会 1973年
98. 畠原和彦・上野精志・馬田稔弘「今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告 - 福岡市西区大字拾六町所在湯納遺跡の調査」第4集 福岡県教育委員会 1976年
99. 小林義彦「湯納遺跡 - 第9次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第225集 福岡市教育委員会 1990年
100. 吉岡完祐編「十郎川 - 福岡市早良平野・石丸・吉川遺跡 - 」住宅・都市整備公団 1982年
101. 山崎龍雄「拾六町平田遺跡2 - 第2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第349集 福岡市教育委員会 1993年
102. 山崎純男・柳沢一男・浜石哲也「玄石古墳群」福岡市埋蔵文化財調査報告書第41集 福岡市教育委員会 1977年
103. 島津義昭「車多田遺跡 - 福岡市西区大字野方字キ多田、宅岐中学校造成地内調査報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第27集 福岡市教育委員会 1974年
104. 方武卓治「鶴町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集 福岡市教育委員会 1976年
105. 横山邦雄・刀武卓治「高柳遺跡 - 田畠中学校建設地内遺跡の発掘調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第70集 福岡市教育委員会 1981年
106. 小林義彦・小畑弘己「羽根戸」遺跡、福岡市埋蔵文化財調査報告書第134集 福岡市教育委員会 1986年
107. 荒牧宏行「余武古墳群 - 余武古墳群古武G群の調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第579集 福岡市教育委員会 1998年
108. 二宮忠司・瀧本正志「櫛本一丁田遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第220集 福岡市教育委員会 1990年
109. 松村道博・小林義彦「野芥遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第297集 福岡市教育委員会 1992年
110. 山口讓治「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告1 - 福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡・次郎丸石高遺跡第2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第467集 福岡市教育委員会 1996年
111. 山口讓治・池田祐司「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告2 - 福岡市早良区茂茂所在次郎丸石高遺跡第3次調査、免跡2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第536集 福岡市教育委員会 1997年
112. 山崎龍雄「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告3 - 福岡市早良区次郎丸所在次郎丸遺跡第2次調査」福岡市埋蔵文化財調査報告書第535集 福岡市教育委員会 1997年

113. 山崎龍雄「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告4」福岡市早良区賀茂所在野芥大蔵遺跡第1次調査一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第581集 福岡市教育委員会 1998年
114. 山口謙治・杉山富雄・池田祐司「福岡外環状道路関係埋蔵文化財調査報告5」福岡市西区一丁目第2次調査、横本遺跡第1次調査一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第582集 福岡市教育委員会 1998年
115. 浜石哲也、赤司義彦・岡部裕俊「田村遺跡II」福岡市埋蔵文化財調査報告書第104集 福岡市教育委員会 1984年
116. 浜石哲也編「田村遺跡III」福岡市埋蔵文化財調査報告書第167集 福岡市教育委員会 1987年
117. 二宮忠司・浜石哲也・佐藤一郎「田村遺跡VI」福岡市埋蔵文化財調査報告書第200集 福岡市教育委員会 1989年
118. 浜石哲也・二宮忠司「田村遺跡V」福岡市埋蔵文化財調査報告書第216集 福岡市教育委員会 1990年
119. 櫻木義嗣・吉留秀敏・瀧本正志「田村遺跡区-第8次・11次・13次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第384集 福岡市教育委員会 1994年
120. 柳田純孝・二宮忠司「四箇周辺遺跡調査報告(1)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第42集 福岡市教育委員会 1977年
121. 二宮忠司・渡辺和子・小林義彦「四箇周辺遺跡調査報告書(4)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第63集 福岡市教育委員会 1981年
122. 吉武学「四箇周辺遺跡群-24次調査報告書」福岡市埋蔵文化財調査報告書第196集 福岡市教育委員会 1989年
123. 常松幹雄編「四箇周辺遺跡群-24次調査の報告」福岡市埋蔵文化財調査報告書第261集 福岡市教育委員会 1991年
124. 二宮忠・大庭康時「四箇周辺遺跡調査報告書(6)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第428集 福岡市教育委員会 1995年
125. 二宮忠司・大庭康時「四箇周辺遺跡調査報告書(7)」福岡市埋蔵文化財調査報告書第482集 福岡市教育委員会 1996年
126. 山口謙治・池田祐司「東入部遺跡群1-東入部遺跡第4次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第381集 福岡市教育委員会 1994年
127. 山口謙治・池田祐司「東入部遺跡群3-東入部遺跡群第6次調査の報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第383集 福岡市教育委員会 1994年
128. 井沢洋一「入部I-県営圃場整備事業に伴う第3次発掘調査の概要」福岡市埋蔵文化財調査報告書第268集 福岡市教育委員会 1991年
129. 浜石哲也・長冢伸・池田祐司・桜木義嗣・尾山洋「人部IV-1991年度調査概要、岩本遺跡群第2次発掘調査報告 安造遺跡群発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第343集 福岡市教育委員会 1993年
130. 浜石哲也「人部V」福岡市埋蔵文化財調査報告書第424集 福岡市教育委員会 1995年
131. 吉留秀敏「岩本遺跡-岩本遺跡群第3次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第342集 福岡市教育委員会 1993年
132. 池田祐司・尾山洋「古田遺跡-古田遺跡 第1次・第2次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第509集 福岡市教育委員会 1997年
133. 常松幹雄・杉山富雄・井沢洋一・菅波正人・野村後之・池田祐司「脇山I-県営圃場整備に伴う発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第236集 福岡市教育委員会 1990年
134. 井沢洋一・池田祐司他「脇山II-県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第269集 福岡市教育委員会 1991年
135. 井沢洋一「脇山III-県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告、脇山A遺跡第4次調査報告一、福岡市埋蔵文化財調査報告書第311集 福岡市教育委員会 1992年
136. 浜石哲也・池田祐司・桜木義嗣「脇山IV-県営圃場整備事業に伴う脇山A遺跡5次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第312集 福岡市教育委員会 1992年
137. 浜石哲也「脇山VI-県営圃場整備事業に伴う脇山A第7次・栗屋B遺跡第1次調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第386集 福岡市教育委員会 1994年
138. 松村道博・宮井善郎・長冢伸・瀧本正志「飯氏遺跡群1」福岡市埋蔵文化財調査報告書第352集 福岡市教育委員会 1993年
139. 塩屋勝利・井沢洋一・吉田扶希子「今宿遺跡-今宿遺跡第1・3次発掘調査報告一」福岡市埋蔵文化財調査報告書第389集 福岡市教育委員会 1994年
140. 二宮忠司・松村道博他「国造202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告VI-周船寺遺跡群-」福岡市埋蔵文化財調査報告書第429集 福岡市教育委員会 1995年
141. 杉山富雄・尾山洋「国造202号線今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告VII」福岡市埋蔵文化財調査報告書第583集 福岡市教育委員会 1998年
142. 中原忠外顧・渡辺正気「福岡県筑紫郡春日町米草板付墓地内出土の繩文土器」九州考古学10 九州考古学会1960年
143. 渡辺正気・小田富士雄「筑紫郡大野町発見の古式弥生土器」九州考古学15 九州考古学会 1962年
144. 山崎純男他「有田・小田部第19集」福岡市埋蔵文化財調査報告書第377集 福岡市教育委員会 1994年
145. 新宅信久「江辺遺跡-第4地点一」柏原町文化財調査報告書第14集 柏原町教育委員会 1998年

第2章 G-7a区の調査

1. 調査区の位置

板付遺跡は集落・墓地がのる台地上から、主要な生産地である水田、河川のある台地の東西の沖積地を含めた拡大な遺跡である。本調査区は板付I式土器期の環濠が掘削された中央台地（集落・墓地がつくられた板付の台地は中位段丘Ⅱ面で、南北に細長く、2ヶ所にくびれがあり、大きく三つの台地に分かれ、南の二つの台地はそれぞれが頂部をもっている。）の南西部沖積地に位置している。史跡指定地の南西部コーナーとは県道505号線をはさんで、対角線上にある。先に報告したF-7b区、F-7d区のすぐ西側の台地際の水田地帯の一角を占めている。次章でのべるG-7b区とは県道505号線を挟んで南北に相対しているが、もともとは一筆の水出区画内である。水田の標高は約9.00mで、台地との比高差は、現状で0.5mを測る。板付5丁目2-2外に所在し、調査対象面積は1410m²である。

調査区は水田として利用されていた。表土層の水出耕作土を除くと、酸化鉄、マンガンが沈殿した水田床土となり、その下は厚い黒灰色の粘土層となっている。この土層は、いわゆる土器層となっていて、ほとんどが土器等の遺物で占められ、土は少ない。このような状態は台地際が顯著で、台地から離れると遺物は少なくなり、水田区画の中位では、ほとんど遺物はみられなくなる。このことから、遺物は台地上から流れ込んだものであることが判る。遺物は弥生時代中期から中世におよぶが、時期が占いものが下層に、新しいものが上層にあり、いったん堆積したものが流れ込んだのではなく、時期ごとに常時落ち込んでいたことがわかる。十層中には砂層の介在が处处に見られ、流水によって土砂が流れ、重い遺物が隙間なく堆積していったものと考えられる。遺物の量は寛大で、貴重なものも多い。本調査区の土器層から出土した代表的な遺物として、青銅器鋳型、銅鏡、編物、太形蛤刃石斧、柱状片刃石斧、扁平片刃石斧、石包丁等のいわゆる大陸系磨製石器、弥生式土器、須恵器、土師器、瓦器、石鍋等がある。土器層の下は粗砂層で洪水が全面をおおったことがわかる。それより下位は水平層の堆積となっているが、これはいずれも水田遺構の重なりである。水田遺構はいずれも良好な状態で遺存しており、以下に述べる如く重要な資料を提供している。

2. 調査区の層序

調査区の層序はFig. 7とFig. 8に示した。Fig. 7は調査区北壁の中央よりや、東寄りの断面実測図である。花粉分析、プラント・オパール分析、植物種子分析等の分析資料のための土壤サンプルを採取した場所の層位である。水田耕作土が抜ける部分のため、自然堤防状になった畦畔部分の層が欠けている。第1層は厚さ15cm前後、現水田耕作土。第2層は酸化鉄、マンガンが沈殿した水田床土、厚さ10cmでや、厚い。第三層は厚さ35cm前後の暗茶褐色粘質土層である。この層は東側の台地際では多量の遺物が含まれ、あたかも上器層の状況を示している。弥生時代中期から中世までの遺物が含まれるが、下位が古く、上層に新しい遺物が堆積している。台地上から流れ込んだ遺物群である。第4層は厚さ10cm前後の淡茶褐色混砂土層である。径1mmの砂粒を多く含んでいる。第5層は厚さ5~10cmの粗砂層、洪水層と思われる。板付I式土器の小片が含まれている。第6層は厚さ10~20cmの暗茶褐色有機質土層。第5層との接点、つまり第6層の表面には無数の凹みがあるが、これは、そのほとんどが人の足跡である。第7層は第6層よりや、黒っぽい暗茶褐色有機質土層。厚さ20cm前後。この層の表面も第6層同様に人の足跡が無数につき凹凸が著しい。この部分には見られないが、調査区

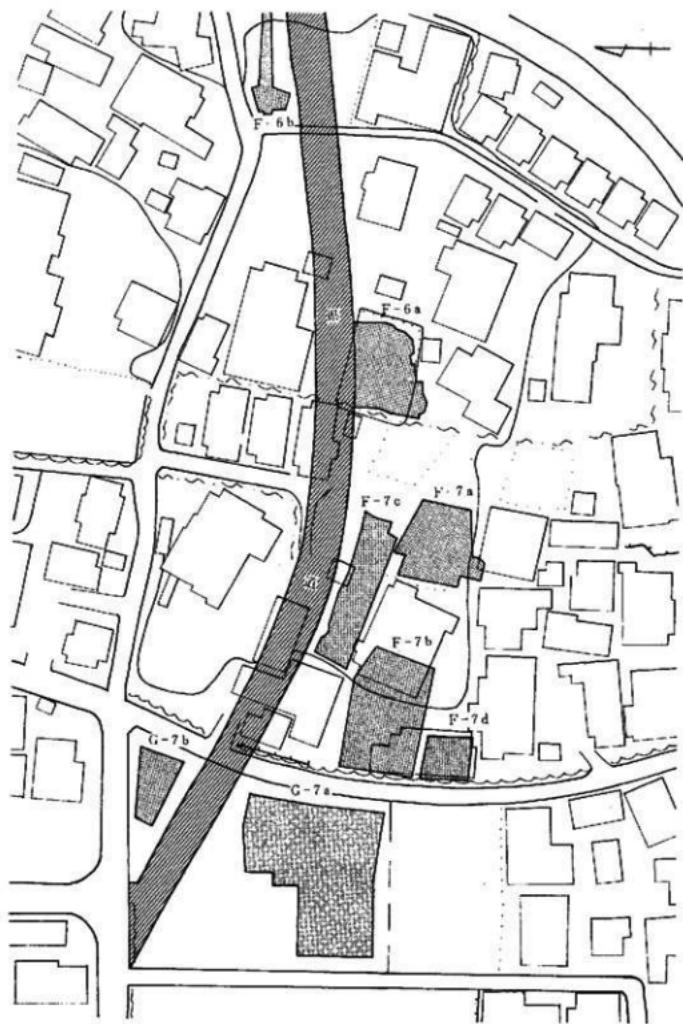


Fig. 5 G-7a・b調査区の位置

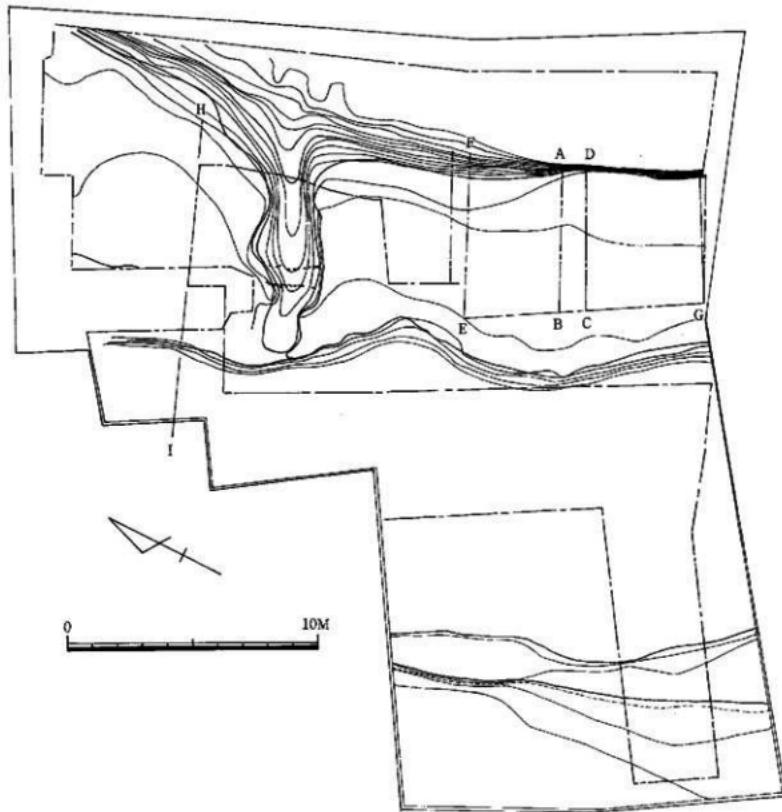


Fig. 6 G-7a区 土層断面位置図

の大部分には第6層と第7層の間に洪水砂である粗砂層が介在している。第6・7層の下位には小破片となった板付I式土器が若干存在している。共に板付I式土器期の水田耕作土である。第8層は厚さ10~15cm前後の暗灰黒色砂質土層であるが、やや粘性が強い。この層の表面にも人の足跡が部分的に認められるが、洪水による擾乱が随所に存在する。刻日突帯文上器期の水田耕作上の可能性が強いが、面的には把握できなかった。第9層は厚さ20~25cm前後。暗灰黒色砂質土層である。上層に比較し、砂質で粘性はない、部分的に偽層が認められ、洪水による堆積とみられる。第10層は厚さ10cm前後の黒灰色粘質土層。この層の表面も凹凸があり、人の足跡が残っているが、凹みは浅く、明瞭な足跡は検出できない。刻日突帯文土器期の水田耕作土である。第11層は八手粘土層となっている。

Fig. 8は、調査区南端の断面実測図である。第1層、現水田耕作土、第2、3層は水田床土、第4

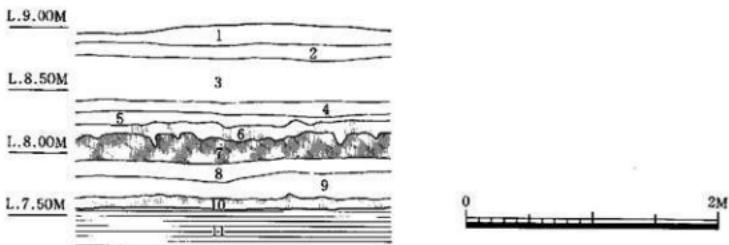


Fig. 7 G-7a区 土層断面図 I

層、黒茶褐色粘質土層、第5層、淡茶褐色混砂土層は、Fig. 7と基本的に変化ない。それ以下の層は、開田と洪水のくりかえしで複雑な層位関係を示していく、地区によても異なる。基準点より12~14mの所に弥生時代中期の溝が南北に掘削され、その周辺はかなり層が乱れている。6層から10層にかけてが中期層で、いずれも洪水による砂の堆積である。6層は小範囲の層で、厚さ4cmの微砂層。第7層は中期溝の右岸に約8m広がる茶褐色粗砂を混入した土層で、厚さ10cm前後。第8層は中期溝の両側に堆積した粗砂層。右岸では約6mの範囲に、左岸では調査区外に延びている。厚さ10cm前後。第9・10層も粗砂層、色の違いで分層できる。溝の東側の土手には薄く微砂層(第11層)が堆積し、その下は幅約60cmで畦畔状の高まりを見せる。第12層は厚さ10cm前後の暗灰色粘土層。畦畔状の高まりとは区別できないが、中期の水田耕作土とみられる。東側に約5m拡がるが、それ以東は洪水によって流失した可能性がある。東側の基準点から1~2mの所にも浅い溝状の断面が観察できるが、これは断面部分に局所的にみられる。洪水によってえぐられた可能性が高い。第13層は微砂層の薄い堆積。第14層は厚さ5cm前後、暗灰色粘質土層、赤褐色の酸化鉄の沈殿がみられる。第15層は淡灰褐色粘土層、厚さ10~15cm。第13~15層はいずれもレンズの堆積である。時期不明。第16層は中期溝の西側に堆積した厚さ10cm前後の灰色の粘土塊を少量混じえた細砂層。第17層は基準点より3~9m、17m以西に堆積した粗砂層で10~30cmの厚さを有する。Fig. 7の第5層に対応する洪水層で、調査区内ではほぼ全面にわたって板付I式土器期の上層水田耕作土を覆っている。水田面の足跡も、この粗砂によって埋っている。第17層の下面には部分的に鉄分の沈殿した粗砂層が薄く堆積する(第18・19層)。第20層は厚さ10~20cmの若干粗砂を混入した淡黒灰色粘質土層。板付I式土器期の上層水田耕作土である。第20層の下面には薄く細砂層が堆積し、基準点より14m以西には厚さ10~20cmの粗砂層が堆積し、下層の水田耕作土を明瞭に分離している(第21層)。第22層は厚さ15cm前後、暗灰色砂質土層で土層の水田耕作土より粘性が弱い。基準点より12m前後の位置、すなわち中期溝のすぐ東側に幅60cm、高さ10cmの畦畔がある。北側でこの東端に矢板列が打ち込まれている。この畦畔より西は耕作土が東より10cm低くなり、水平に拡がっているが、西端部では洪水のため流されて耕作土は存在しない。第23~26層は自然堤防状になった部分を形成する層で、板付I式土器期の幹線水路と水田を限る畦畔の役目を果している。第23層は自然堤防状に薄く堆積した粗砂混入の細砂層。第24層は厚さ15cm前後の青灰色微砂層、第25層は厚さ20~30cmの淡青灰色微砂層、第26層は灰色微砂層で薄い堆積である。第23層以下は刻印突起文土器の単純層である。第27層は厚さ10~15cmの暗灰色微砂層、や、粘質土である。第28層は厚さ10~15cmの灰黑色混砂粘質土層、状況から水田耕作上の可能性が高いが、平面的な遺構としては確認できなかった。第29層は砂層をかみこんだ暗黒灰色砂質土。

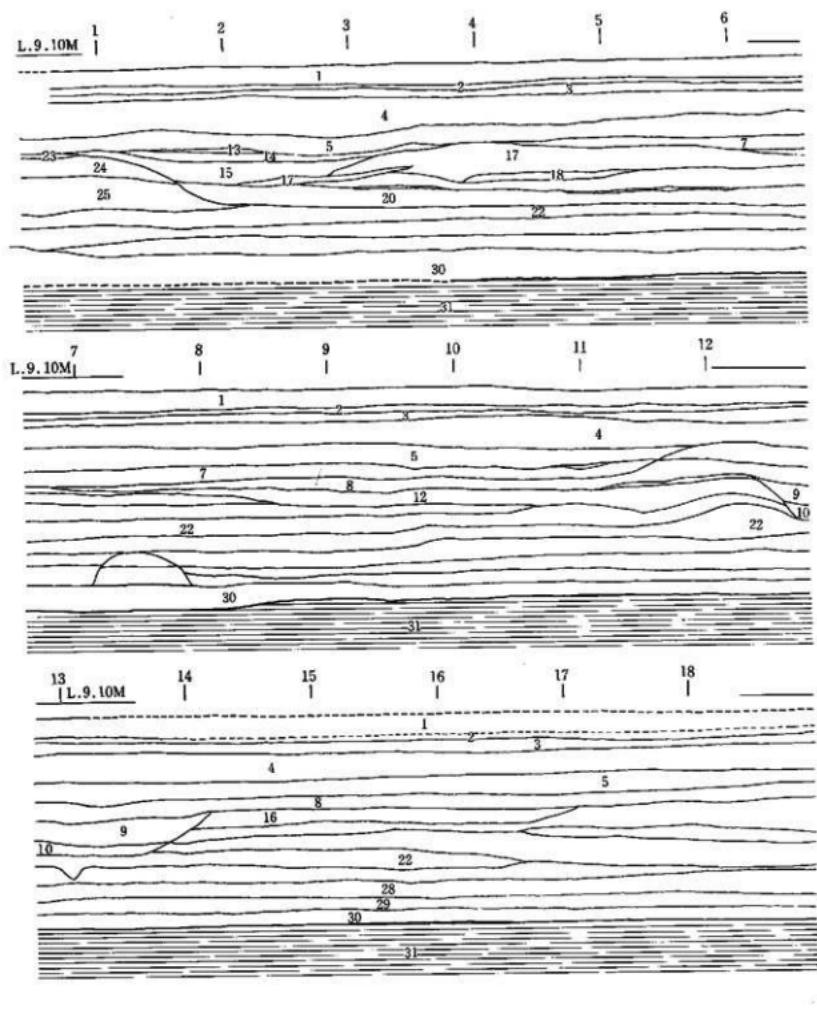


Fig. 8 G-7a区 土層断面図Ⅱ

層、厚さ10~15cm、基準点から7m~8mの間に幅80cm、高さ30cmの畦畔が観察できる。第30層は黒色粘質土層、厚さ10~20cm。水田耕作土で表面は小さな凹凸がある。水田耕作土である。第31層は基盤の八女粘土層となっている。

3. 板付I式土器期の水田遺構

(1) 水田遺構の概要 (Fig.9)

G-7a区で検出した水田遺構は幹線水路である小川、小川と水田を限る土手、土手に掘削された取排水溝、上・下二面の水田耕作土、水田を限る畦畔である。幹線水路である小川は調査区の東端部において、その西岸（左岸）を確認しているに過ぎない。東岸は道路敷の下になる。F-7b区の調査所見から、川幅は10mを超えることはない。川の深さも完掘していないので不明。川と水田を限る土手は幅7~10m、河川と水田を結ぶ取排水溝は調査区のやや北に片寄った所に検出した。川との接点部は調査のミスで一部を破壊したが図上で復原した。幅1~3m、長さ約9m、深さ10~70cm、水田から川に向かって傾斜している。溝の途中には溝に直交し二列の杭、矢板列があり、ここで水田の水量調整を行っていたことがわかる。水田耕作土は上・下二面存在し、いずれも廃絶は洪水による粗砂の堆積によるもので、水田に残る足跡も、この粗砂によって埋っている。水田区画は東側が川の土手によって限られ、上の水田では発区内に畦畔は認められない。下の水田は調査区の西端部に南北に並ぶ矢板列が認められ、この矢板列が西側を限るが、南北は調査区内で確認出来ない。いずれにしても推測される地形から南北に細長い水田区画が考えられる。水田1区画の広さは、上層の水田で18m以上×26m以上の468m²以上、下層の水田で11m×26m以上の286m²以上の最小面積が求められる。水田耕作土中からは多くの炭化米が出土し、プラント・オバール、水田雑草等の分析結果も水田であることを強く支持している。

以下、水田の各施設について詳述する。

(2) 幹線水路（小河川）

調査区の東端部に検出した水路で、水路の西側（左岸）と流路の一部を確認したが、大部分は台地際の道路の下に埋もれている。調査区内では南側で幅広く約4.0mを測るが、北に向って序々に狭くなり、調査区の北端では水路の西岸を確認したにすぎない。調査区内で検出した水路の西岸は台地に沿って、ゆるやかに湾曲しているが、その状況は一様でない。南端部から約6.0mの間は垂直あるいはオーバーハング気味にたちあがり、北にいくに従い岸の傾斜はゆるやかになる。次に述べる取排水溝がその変換点となっている。この岸の状況からみると、水路は調査区の両端で大きく東側に蛇行していたと想定できる。水路幅は道路になっているため確認できないが、本調査区と道路を挟んで相対する台地際を含んだF-7b区、F-7d区の発掘所見から10m前後の幅をもっていると推測される。水路は検出面から1.5m、場所によっては2m前後まで掘り下げたが、調査区の東側（道路）部分の壁の崩落が心配されたので、それ以上の掘削はおこなっていない。よって、水路の深さや底の状況、断面形等は明らかでない。水路を埋める堆積土は、小田面を覆う粗砂層と黒褐色有機質粘土層の互層となっている。黒褐色有機質粘土層にはカンの実や葉をはじめとして、多くの種子類や木葉を含み、流木もみられた。流木には大きいものや木製品は含まれていない。

水路の西岸は幅7~10mの自然堤防状の高まりとなり、水路に平行して走っている。さらに西にある水田面とは20cm前後の比高差をもっている。この堤防状の高まりは水田と水路を限る畦畔の役割を果しているが、幅からいって簡単な作業場としても利用されていたと思われる。また、樹木も繁っていたとみられ、木の株が立木のままや水路に落ち込むような状態で出土している。株が検出された場所は調査区の北東隅と南側で共に取排水溝から約10m離れている。北側が立木のままで、南が一部水路に落ち込んでいる。これらの樹木は共にカシ（専門家の同定は得ていない）とみられ、板付I式土器期の上層水田が洪水によって埋没した時に、同様に埋没したとみられる。樹木の年輪は共に28を数える。これらの樹木が人工的に植えられたものか、否かは判別できないが、板付I式土器期の水田の存続期間を知る上で、極めて貴重な資料である。

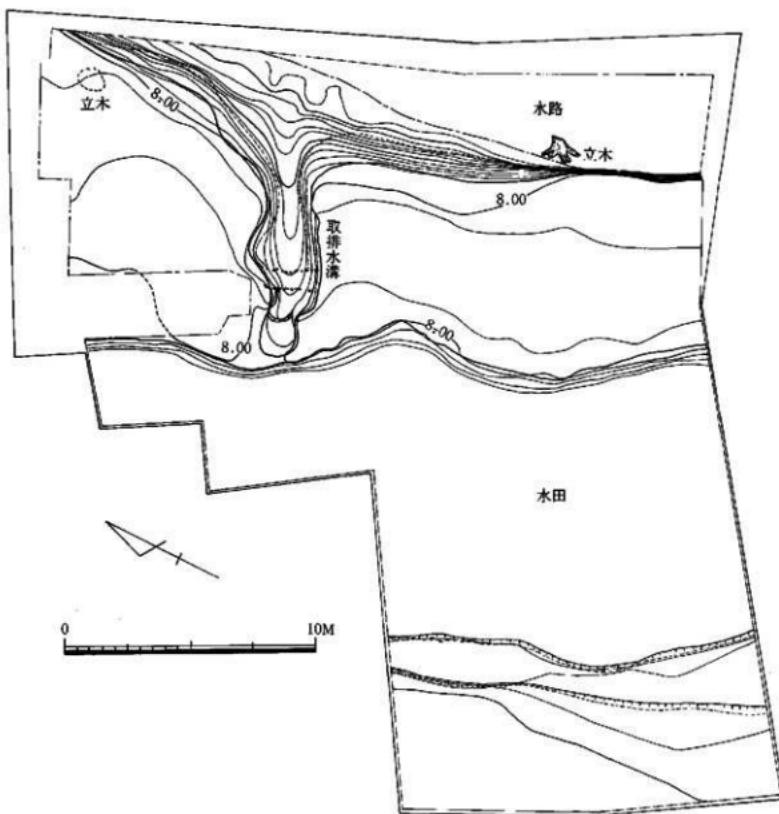


Fig. 9 G-7a区 板付I式土器期水田遺構全体図

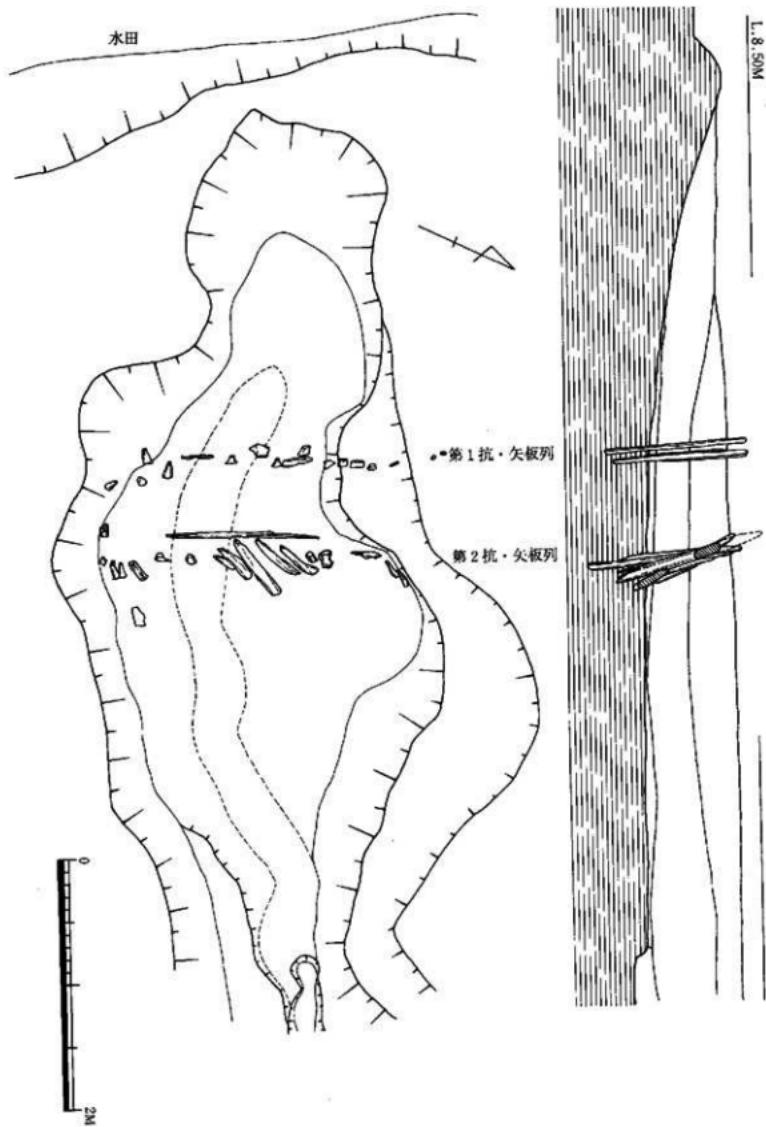


Fig.10 G-7a区 板付T式土器期取排水溝実測図 I

(3) 取排水溝 (Fig. 10・11)

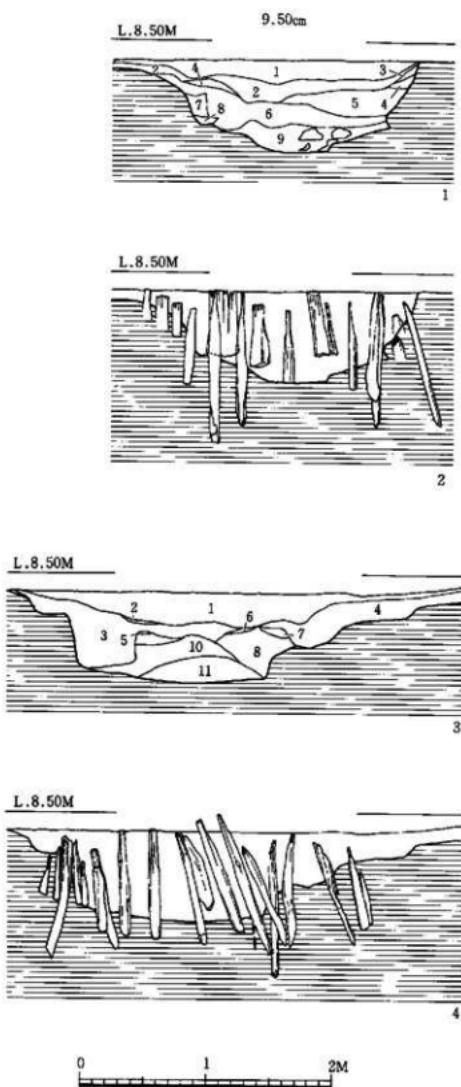


Fig.11 G-7a区 板付I式土器期取排水溝実測図 II

調査区の東側、中央よりや、北側に片寄って検出した幹線水路と水田を結ぶ取水、排水を兼用した溝である。幹線水路西側の自然堤防状の高まりを直交、横断するように掘削されている。一部、調査ミスで幹線水路との接点部分を掘り過ぎてしまったが、周辺部分の検討で図上復原できた。溝は長さ8.5m(現在7.4m)を測る。溝幅は西端部で1.3~1.5m、西より約2m東にいった所で急に拡がり2.5mを測る。そこより東に向って序々に幅を増し、溝の中央部付近で最大となり約3.5mを測る。それより東側は序々に狭まり、西端部より約7mの地点では最小幅となり1.7mを測る。水路との接点部分は再度ラッパ状に拡がり、幅約5.0mを測る。溝の深さは0~0.9mを測り、東に向って序々に深さを増しているが、水路との接点部は急に落ち込むものと考えられる。溝の横断面は西側では浅いU字形をなし中央部および東側は下位が逆台形となり、壁の上位は崩壊し、ゆるい傾斜をなす。溝の西端から2.7m付近(第1杭・矢板列)と3.5m付近(第2杭・矢板列)には、溝に直交して井堰状に杭・矢板列が打ち込まれている。

第1杭・矢板列は、杭10本、矢板11本から構成されている。列の長さは2.7mを測る。杭は径6cm~10cm、9cm前後の物が大部分で杭としては大きめである。溝の両端部の杭は特に大きいものを選び深く打ち込まれている。地中にある杭の深さは30cm~80cmを測り強く固定している。一方、杭・矢板列の中央部の約80cmの

間は、矢板が多用され、打ち込み部はほとんどなく、取りはずしが自由にできるようになっている。

第1杭・矢板列部分の土層断面はFig.11-1に示した。第1層、暗灰色粘砂混入の暗褐色粗砂層、厚さ15~20cm、全体を覆う。第2層、暗灰色粘砂層、厚さ8~20cm。第3層、灰色細砂層、擧ぎわにブロック層として存在。第4層、粗砂層のブロック。第5層、暗灰色粘質細砂層、南壁側に厚く堆積する。厚さ約20cm。第6層、北壁側から流れ込んだ堆積とみられ、北が厚く約30cm、南に序々に薄くなり、8cmを測る。灰色粗砂を混入した細砂層。第7層、暗茶褐色粘砂のブロック層。第8層、褐色粘砂のブロック層。第7・8層は共に北壁に接している。第9層は褐色粗砂層で床面を広く覆っている。厚さ24cm前後。この層中には暗茶褐色粘砂や灰色細砂層のブロックがみられる。最下層の第9層の状況をみれば頻繁に水が流れていたことがわかる。

第2杭・矢板列は丸太杭8本、丸太を半割した杭6本、矢板杭8本から構成されている。杭・矢板列の長さは2.9mを測り、第1杭・矢板列と大きな差はない。ただし、第1杭・矢板列と比較するとかなりの差がある。第1杭・矢板列では幅広の矢板が利用されているが、第2杭・矢板列では幅広の矢板ではなく、いずれも板杭というべきものである。杭は径5~8cmで比較的大きい。杭の打ち込みは比較的浅く、10~40cmを測るが、大部分は15~20cmにとどまっている。第1杭・矢板列の両端部が深く打ち込まれているとは対称的である。使用された材や打ち込みの違いから、両杭・矢板列は同時に打ち込まれたのではなく、まず最初に第1杭・矢板列が打ち込まれて壠として機能していたが、後に補強のために第2杭・矢板列を打ち込んだ可能性もある。なお、両杭・矢板列の先端部は尖らせるための特別加工を加えられていない。次に述べる土層との関係で、南壁の横の杭は溝の底でとまっており、取りはずしが可能となっている。杭列の中央部には横木が一本渡されている。

第2杭・矢板列部分の土層図はFig.11-3に示した。第1層は溝全体を覆っている。灰色粘砂を混入した暗褐色粗砂層で、厚さは5~26cm。溝の中央部が最も厚くなっている。第2層は薄くレンズ状に堆積した細砂層、厚さ3cm。第3層は溝の南壁側に片寄って堆積している。特に南壁に接した部分は幅50cm、深さ約30cmの落ち込みとなり、水口状をなしている。この部分の杭が取りはずし自由であることを考えれば、必要に応じて水口として利用されていたことが推測される。暗灰色粘砂層、水口部分は厚さ50cm、中央部は薄く10~15cmを測る。第4層は北壁側から流れ込んだ状態で堆積し、中央部より南には括がらない。暗灰色粘砂層、厚さ20cm前後を測る。第5層は薄くレンズ状に堆積する粗砂層のブロック層である。厚さ2cm前後。第6層、第5層同様にブロック状に薄く堆積する。細砂層で厚さ3cm前後。第7層も前二者同様にブロック状に堆積している。厚さ7cm。長さ20cmの粗砂のブロック層である。第8層、南壁に接して厚く堆積する。灰色細砂を混入した粘砂層。厚さは厚い所で40cmを測る。層中には薄い粗砂層が水平に走っている。第9層、灰色細砂層、厚さ8cm前後。ブロック状に狭い範囲に堆積している。第10層、溝の中央部に堆積している。水口と推定した落ち込みはこの層を切り込んでいる。灰色粗砂を混入した粘砂層。厚さ15~20cm。層中には薄く粗砂層が介在し、ほぼ水平に走っている。第11層は第10層の下位に堆積している。凸レンズ状に層の中央が盛りあがっている。最も厚い所で20cmを測る。褐色粗砂層で、第1杭・矢板列部分同様に溝底ではかなりの水が流れていたことがわかる。

第1、第2杭・矢板列間は約80cm、ほぼ平行している。取排水溝は水田から幹線水路に向って傾斜している。この溝に設置された杭・矢板列はどのような機能を果したのであろうか。水田に水が必要な場合は幹線水路の水位を上げる必要があるが、このための施設としては後述するG-7b区の非堰がある。水位が上った幹線水路から取排水溝を逆流させて水を水田に入れるが、この際は取排水溝の杭・矢板列は不要であり、その時は取りはずせる杭や矢板は取り除かれ、その他の杭もそのままの状

態でおかれていたと思われる。水田に水が滞水した後は、水田からの漏水を防ぐために2列の杭・矢板列が利用されたと思われる。この際、この杭・矢板列には横木が渡され、この杭・矢板の間には雑草や土を入れ堰の機能をもたせたものであろう。排水する必要がある場合は、取りはずし自由な矢板列を除いたと考えられるが、流水の流れを調整するため、杭・矢板間の水路は直口せず、屈曲させていたことが、十層断面の観察から推測することができる。なおこの排水溝と水田面との間には約20cmの段差があるが、精査したにもかかわらず、小さな溝等は確認できなかった。

(4) 畦畔 (Fig.12)

この段階の水田区画のための畦畔はあまり明瞭に残っていない。後述するようにこの段階の水田面は二面残っており、畦畔もそれぞれ異なっているので畦畔も分けて述べる。

a. 上層水田の畦畔

上層水田の区画を限る畦畔は東側のみで、西側と南北側は調査区内では把握できていない。東側を限る畦畔は、幹線水路の西側の自然堤防状の高まりが、そのまま利用されている。堤防状の高まりはトレンチ南端部で約7mの幅を有し、北端部では約13mの幅があり、中央部では9m前後を測る。この自然堤防上には立木が植っていたことは前述したとおりである。

この高まりと水田の接点は直線的ではなく蛇行している。蛇行は10m間隔ではほぼ規則的であるが、水路の蛇行とは全く無関係である。何によって蛇行しているかは明らかにできない。上層水田面と堤防の比高差は約20mを測る。水田西側は、中期の水路が南北に走って搅乱しているので、調査区内には確認できない。

b. 下層水田の畦畔 (Fig.12)

下層水田も東側を限るのは上層水田と同じように自然堤防状の高まりである。ただ水田面と高まりの比高差は約40cmと高くなっている。西側を限る畦畔はかろうじてその痕跡をとどめている。東側畦畔から11~12m離れて、東側畦畔は平行に矢板が打ち込まれている。矢板列はFig.12に示したが残存状態は良くない。杭2本、矢板8本から構成され、長さは約2m、畦畔に敷き込まれたとみられる草木類の堆積が矢板列の延長上に認められる。それらを含めて残存しているのは約4.5mにすぎない。矢板自身も残りが悪く5~35cmを残し、大部分は10cm前後が

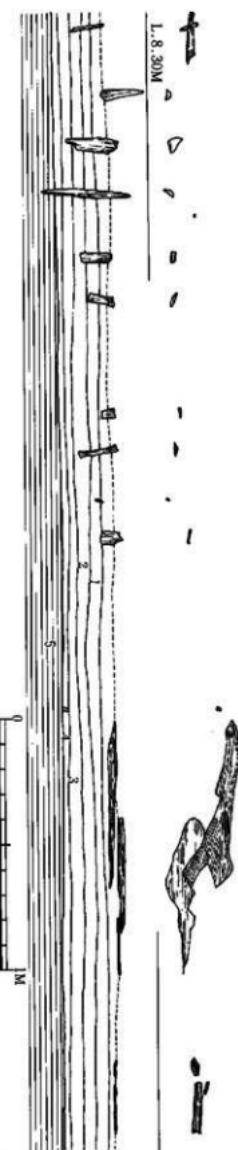


Fig.12 G-7a区 水田畦畔実測図

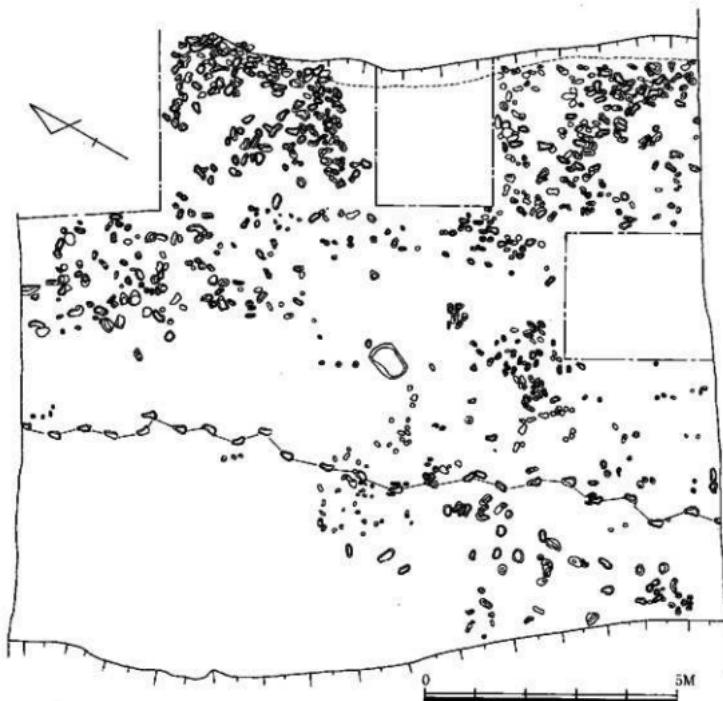


Fig.13 G-7a区 板付I式土器期上層水田面足跡実測図

残っているのみである。このように畦畔の残りが悪いのは、水田面を覆う洪水粗砂と大きく関係し、畦畔が流された可能性が強い。矢板の確認面は下層水田面で、打ち込まれた土層は、第1層、灰褐色砂質粘土層。第2層、暗灰色微砂層。第3層、上層より粘性が強く、やや色の強い暗灰色微砂層。第4層、黒灰色粘土層（突帯文土器期水田耕作土）。第5層、暗黒灰色混砂土。第6層、黒色粘土となってい。

(5) 水田面 (Fig.13・14)

板付I式土器期の水田面は上・下二面が存在する。共に洪水による粗砂層に覆われ、水田面の保存状態は良好である。水田面には洪水前に残された足跡や稲の株跡と思われる凹みが無数に存在する。凹みには粗砂が充填しているのでその判別は容易である。ただし、洪水砂に覆われていない部分は、水田耕作土と凹みの堆土との区別が困難で、足跡やその他の凹みの検出はできていない。以下、上下各層の水田面をみてみよう。

a. 上層水田面 (Fig.13)

調査区の全面が厚さ10cm前後の洪水砂（粗砂層）に覆われている。調査区の西側の一部は中期の溝

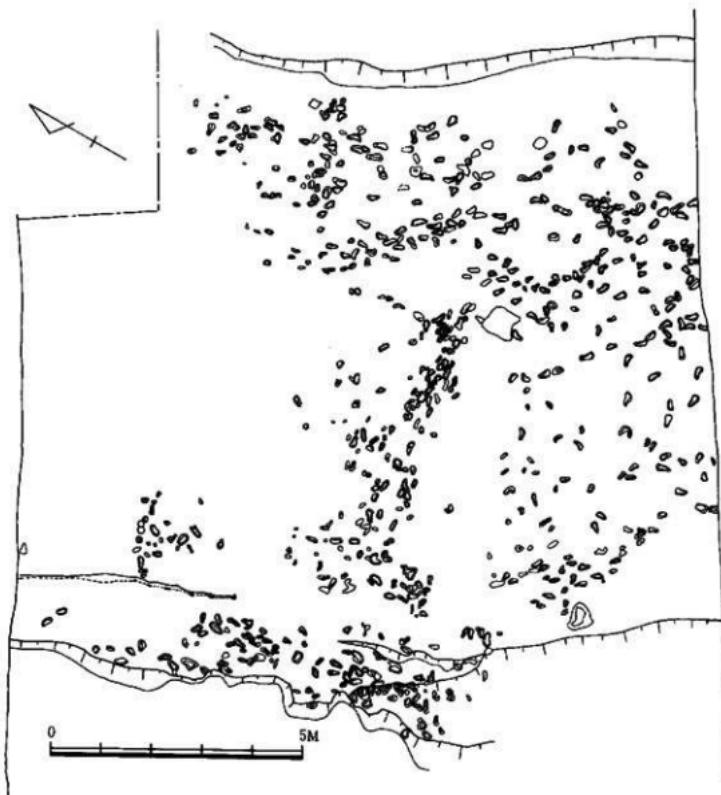


Fig.14 G-7a区 板付Ⅰ式土器期下層水田面足跡実測図

ため、この段階の水田面は存在していない。足跡等の凹みは、中期の溝より東側のほぼ全面に認められるが、北西部の一部には全然認めることができない。水田の東の部分、自然堤防状の畦畔に近い部分には無数の足跡があり、相互に切り合い関係も認められ、足跡の左右の区別は保存状態が良好なため容易であるが、歩行の軌跡を追求するにはやや困難である。水田の中位から西側は足跡と考えられる凹みは少なくなるが、それに変わって、径10cm前後の丸い凹みが散見される。部分的には規則的に並んでいる部分もあるが、全体としては不規則的である。この丸い凹みは状況から推測して稻株の跡とみることができるが、確証はない。丸い凹みのないところもあり、洪水によって流されたとみることもできる。今後の詳細な検討が必要であろう。

この水田面で注目されるのは、調査区の中央部で検出した、一人の人の歩行を示す足跡である。北から南には一直線歩いており、調査区内に24歩の足跡を認めることができる。調査当初、足跡についても疑問視する研究者が多かったので、その鑑定を福岡県警の鑑識課に依頼した。鑑識課からは

数名の捜査員を派遣し、足跡の調査にあたっていただいた。その調査結果の概略を記すと以下の如くである。「足跡は同一人間の歩行である。歩行の状態は、途中で一度、立ち止り、次に滑って、あわてて体勢を立て直した状況がうかがえる。足跡の計測、歩幅の計測から、県警の保有する現代人の資料と比較し、この人の身長は164cm前後が考えられる。」というものであった。

この上層水田面に残っている足跡がいかなる行動によって残ったものかは、遺跡の状態からは判断できない。

b. 下層水田面 (Fig.14)

調査区のほぼ全面を厚さ10cm前後の洪水砂（粗砂層）が覆っているが、北側は洪水砂が薄くなり、調査区北端部ではほとんどみることができない。この水田面も上層同様に調査区の西側の一部は中期溝のため存在しない。足跡等の凹みは、中央部から南半部に顕著である。凹みを良く観察すると、すべてが人の足跡で上層でみられたような稲株のあとと思えるものはない。足跡のある部は集中しており、足跡のない部分とは明瞭に区別され、ある一定の規則性を読みとることができる。足跡として、その歩行の軌跡が追えるのは9人分である。このうち5人は東側畦畔とそれから4m離れた範囲内で、畦畔にはほぼ平行した歩行を示している。このうち、3人は北から南に進み、2人は南から北に進行している。残る4人の歩行軌跡は調査区の南側に片寄って確認した。このうち2人はやや不規則ながら、東側畦畔に平行した動きを示し、北から南に進んでいる。他の2人は共に南から北東に進み、途中で方向を変え南東に進んでいる。この他、個人の歩行軌跡としては追えないが、水田と対角線状に進む行動軌跡が把握できる。

以上、上・下二面の水田面に残された足跡等の凹みは、この水田で行われた行動やその季節性を追求する上では重要である。上・下二面の水田面の凹みを比較検討してみると、稲株状の凹みは上層水田には多数認められるのにに対し、下層水田で皆無である。これは、水田が洪水によって廃棄された季節の違いを示しているのであろう。また、人の足跡は、上層水田では、歩行軌跡の追える人は一人であるのに対し、下層水田では、数人の規則性ある歩行軌跡が追求でき、少なくとも何らかの農業に関連した労働を行っていたと推定できよう。

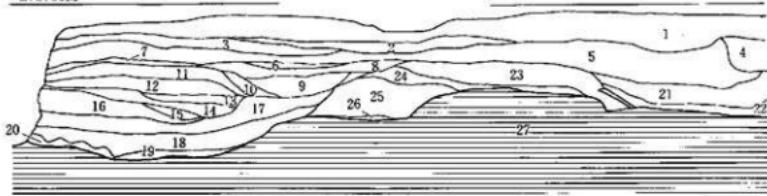
なお、上・下層水田の耕作土中には、しばしば植物を焼いた炭化層が薄く認められ、穂刈りのすんだ稻、あるいは刈り取られた稻に火をつけ、灰を肥料として利用していた可能性を認めることができる。また、水田耕作土中には炭化米がかなりの量存在する。

4. 突帯文土器単純期の水田遺構

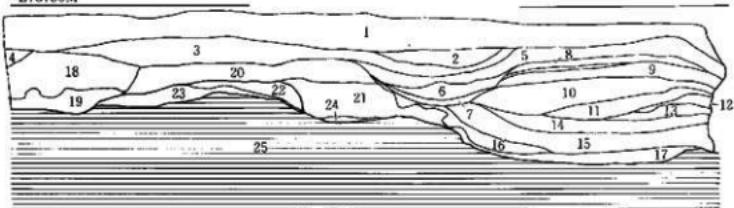
(1) 水田遺構の概要 (Fig.17)

G-7a区の下層の突帯文土器単純期の水田遺構は、水出に給水するための幹線水路、この水路に設置された井堰、水路と水田を限る畦畔、水田と水田を区画する畦畔、水田から排水するための排水溝、それに設置された井堰、水田と幹線水路を結ぶ取排水溝がある。幹線水路は人丁的に掘削された、断面U字形の溝で、調査区内で約25mを確認した。この時期の幹線水路は板付I式土器期の幹線水路と切り合い関係にあり、東壁の大部分が破壊されている。幹線水路、水路と水田を限る畦畔、水田からの排水溝、幹線水路と水田を結ぶ取排水溝等の主要な水田遺構は、板付I式土器期の幹線水路の西側

L.8.50M



L.8.50M



L.8.50M

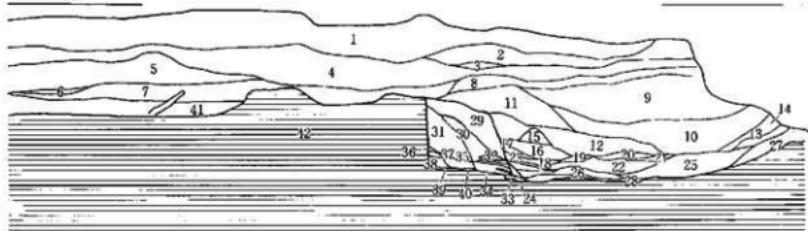


Fig.15 G-7a区 下層断面図 1

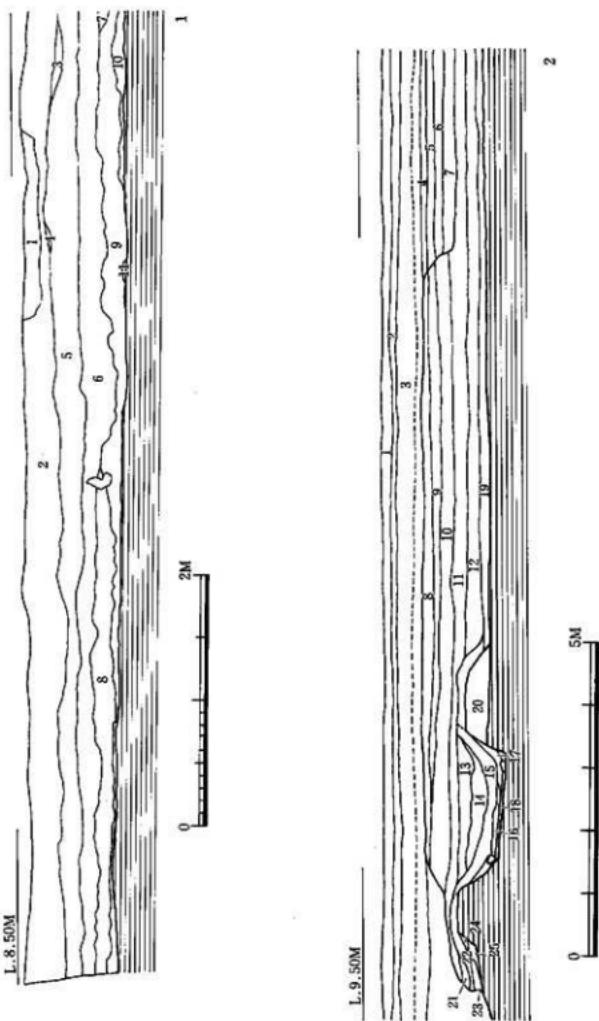


Fig.16 G-7a区 下層断面図 II

に存在する自然堤防状の高まりの下、約1mの所より検出したもので、明らかに板付I式土器期とは層位関係をもって存在している。水田の構造は規模的には小さくなるが、板付I式土器段階の水田と変わることはない。

なお、板付I式土器と突帯文土器単純期水田の間の層中に水田遺構と思える部分があり、一部、平面的に足跡を確認したが、他の遺構については検出することができなかった。層位の断面においては、溝等の遺構が確認できる。以下、下層の層位関係を見ていいくなかで、中層遺構の検討を行なうこととする。

(2) 突帯文土器単純期の層位(Fig.15、16)

突帯文土器単純期の土層は、調査区の西半部は板付I式土器期の水田開発によって、土層の上半部は削平されている。よって、最も保存状態の良好な自然堤防状の高まりの部分について詳述する。なお、土層の上半部は筆者がかって、土器編年した時の夜臼IIa式土器の段階に相当する。上層断面の位置はFig. 6に示したとおりである。

Fig.15-1、第1層、灰褐色細砂層。夜臼IIa式土器を包含。第2層、第1層とはほぼ同様の層でレンズ状に堆積。第3層、白色砂層。第4層、白砂と暗褐色土層の互層。第5層、や、土まじりの暗褐色砂層。第6層、白色砂層。第7層、粗砂層。第8層、や、土まじりの暗褐色砂層。第9層、白砂と暗褐色土層の互層。第10層、土を混入した砂層。第6、8~10層は断面U字形の溝状遺構の埋土。溝状遺構は幅約1.5m、深さは約30cmを測る。後述する中層検出の足跡に伴う水路と考えられるが、トレンチのベルトで検出したのみで、平面的には検出していない。次の第11層から第20層までは、下層水田の水路の埋土である。第11層は粘質砂層。第12層は白色の粗砂が混入した黄褐色粗砂層。第13層、や、土まじりの砂層。第14層、土まじりの暗褐色砂層。第15層、や、土まじりの砂層。第16層、径1cm程の黄色粘土を混入した黒褐色粘土層。第17層、木片を多量に含んだ暗褐色粘土層。第18層、第17層と類似した粘土層。第19層、黒色粘土、八女ロームのブロックが混在する粗砂層。第20層、不規則なブロックの灰色の八女粘土層となっている。第21層、黄褐色の砂が混入した暗褐色細砂層。第22層、暗褐色粘質土層で突帯文土器単純期の水田耕作土とみられる。第22層と第23層の間に杭が打ち込まれている。第23層~第26層は畦畔を構成する土層である。畦畔が屈曲する部分にあたっており、実際よりかなり幅広くなっている。第23層、上面に炭を含んだ暗褐色粘土層。第24層、暗褐色粘土層。第25層、黒色粘土、八女粘土のブロックが混在する粘土層。第26層、軽石を混入する粗砂と黒色粘土の混在層となっている。第27層は基盤層の八女粘土層である。

Fig.15-2はFig.15-1と同じベルトの反対側の断面で、約1m離れた部位である。第1層、灰褐色細砂層。第2層、白色砂層。第3層、や、土まじりの暗褐色砂層。第4層、白砂と暗褐色土層の互層。第5層、や、土まじりの暗褐色砂層。第6層、白色砂層。第7層、白砂と暗褐色土層の互層。第8層、粗砂層。第9層、砂と土の互層。第10層、黄褐色粗砂層。第11層、暗褐色粘質土層。第12層、黄褐色砂層。第13層、黄色粘土粒が混入した黒褐色粘土層。第14層、木片を多く混入した黒褐色粘土層。第15層、第14層と同様の層。第16層、暗褐色粘土層。第17層、黒色粘土、八女ロームのブロックの混入した粗砂層。第18層、黄褐色砂が混じる細砂層。第19層、暗褐色粘質土層、上面に炭を混じる。第20層、炭、粗砂を混入した暗褐色粘土層。第21層、黒色粘土、八女ロームブロックが混在する粘土層。第22層、暗褐色粘土層。第23層、黒色粘土、八女ロームブロック混在層。第24層、粗砂を混入した黒色粘土層。第25層、基盤である八女粘土層となっている。このうち第5~7層は中層の溝状

遺構の埋土。第8～17層は幹線水路埋土。第19層は水田耕作土。第21～24層は畦畔盛土である。

Fig.15-3 1・2の北側ベルトの断面である。第1層、灰褐色細砂層。第2層、上層と良く似た灰褐色細砂層。第3層、白色砂層。第4層、白砂と暗褐色土層の互層。第5層、黒色土層に黄褐色砂層がわずかに混入。第6層、黒色土が混入した黄褐色砂層。第7層、黄褐色砂のブロックが混入した黒色土層。第8層、粗砂層。第9層、白砂、粗砂、暗褐色土の互層。第10層、木片を多く含んだ暗褐色粘土層。第11層、黄褐色砂を混入した細砂層。第12層、暗茶褐色砂質土。第13層、暗茶褐色砂質土層。第14層、暗灰色微砂層。第15層、濃黒色粘質層。第16層、粗砂層。第17層、淡茶色微砂層。第18層、暗灰色粘質土層。第19層、暗灰色細砂層。第20層、粘質砂層。第21層、黒色砂質土層。第22層、小石を混じえた黄褐色砂層。第23層、微砂層。第24層、粗砂層。第25層、砂と黒色粘土層の互層。第26層、黒色粘質砂層。第27層、黒色粘土層。第28層、粗砂層。第29層、淡黒色粘質土層。第30層、濃黒色粘質土層。第31層、黒色粘土層。第32層、微砂層。第33層、砂層。第34層、黒色粘質土層で間に微砂層が薄く帯状にはいる。第35層、暗黒紫色微砂層。第36層、微砂層。第37層、淡青灰色微砂層。第38層、粘土ブロックが混入した細砂層。第39層、黒色粘砂層。第40層、粗砂層。第41層、暗褐色粘土層。第42層、基盤の八女ローム層となっている。この層位の中で、中層の溝遺構は不明瞭になつていて断定できないが、第7層の東端部の凹みがその名よりかも知れない。Fig.15-1、2で明瞭であったが、約4m離れた所で不明瞭になることを考えれば、遺構の残存状況は極めて悪かったと考えられる。第9～40層は幹線水路の埋土であるが、第29～40層は壁の崩落に伴う再堆積層と考えられる。第41層は水田耕作土、畦畔はこの部分は基盤層の削り出しの可能性が強い。

Fig.16-1はFig.15の断面の西側壁の断面である。第1層、暗褐色土層、深さ10cm程度の浅い掘り込みで、弥生時代の遺構とみられる。第2層、灰褐色細砂層。第3層、や、土混じりの灰褐色細砂層。第4層は第3層と同様である。第5層、白砂と暗褐色土層の互層。第6層、黄褐色砂層がまだら状に混入する暗褐色砂質土層、や、粘性が強く、中葉遺構の水田耕作土の可能性がある。第7層、粘土、粗砂混入の暗褐色砂質土層。第8層、粗砂、粘土、黄褐色砂層を混入した暗褐色砂質土層。第9層、暗褐色粘質土層、下層水田の耕作土とみられる。表面は足跡等の凹みで凸凹となる。第10層、黒色粘土層。第11層、黒色粘土層。第10・11層は共に部分的に存在する。第9層の直下が水田床面である。なお、断面中央部の第8・9層中に木が顔を出しているが、この木は東から西に傾斜し、下の方は三叉になり、水田に折ち込まれていたが、調査時の出水によって壁が崩落し詳細は不明。

Fig.16-2は板付I式土器期取排水溝の北側II-1の断面図である。板付I式土器期、突蒂文土器単純期の水田遺構の層位的関係を最も良くあらわしている。

第1層、現水田耕作土、厚さ20cm前後。第2層、酸化鉄・マンガンの沈着した水田床土。場所によつて2層に分かれる。第3層、暗茶褐色粘質土層、厚さ約40cm、東側には土器、石器等の多量の遺物を含む。台地上より流れ込んだ遺物と考えられ、台地から離れるに従い遺物量は少なくなる。3層の下部は砂質が増し、褐色砂質土層となる。第4層、洪水によると考えられる粗砂層、厚さ約10cm。第5層、暗黒灰色有機質土層、厚さ10～20cm、板付I式土器期水田の上層耕作土である。第6層、第4層と同様に洪水によると考えられる粗砂層、厚さ10cm前後。第7層、第5層よりや、黒い暗黒灰色有機質土層、厚さ20cm前後、板付I式土器期水田の下層耕作土である。第5・7層共に表面は凹凸が著しい。凹みの大部分は足跡である。第8層以下は、板付I式土器の幹線水路(小河川)の西側に存在する自然堤防状の高まりを構成する土層である。第8層、暗褐色砂質土層、厚さ10cm前後。第9層、青灰色細砂層。第10層は9層よりや、粗い灰色砂層、厚さ20cm前後。第8～10層は夜白IIa式土器の包含層である。第11層、暗青灰色砂質土層、厚さ10～15cm、突蒂文土器単純期の上層の水田耕作土の可能性がある。

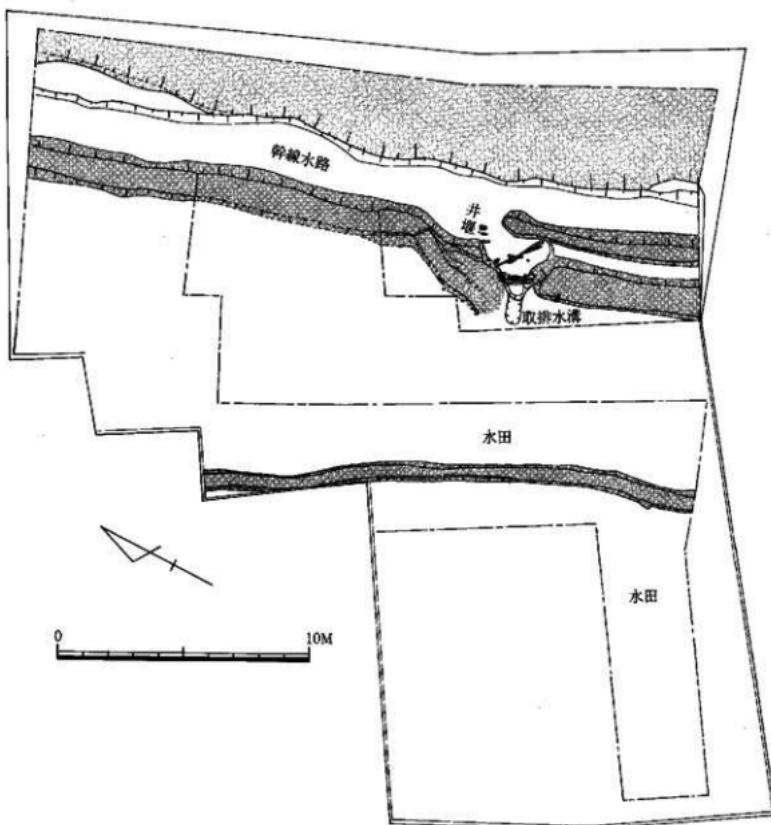


Fig.17 G-7a区 突帯文土器単純期水田遺構全体図

強い。第12層、暗灰色微砂層、厚さ10~15cm。第13~18層は、突帯文土器単純期の下層水田遺構の幹線水路の埋土である。第13層、や、粗い砂を含んだ暗灰色微砂層、厚さ10cm前後でレンズ状に堆積する。第14層、粗砂を含んだ暗灰色微砂層、厚さ10cm前後。第15層、黒灰色粘質土層、厚さ10cm前後。水路を越して両側の両側にも堆積している。区別できなかったが、この層の中に壁のたちあがりがあるとみられる。第16層、灰褐色砂質粘土層、厚さ5cm前後。第17層、八女ロームブロックの混入した黒色粘土層。第18層、灰色粗砂層、溝の埋土はいずれもレンズ状の堆積をしている。第19層は黒灰色粘質土層、厚さ15cm前後。下層水田の耕作土である。第20層、黒色粘質土で下層水田の畦畔と形成している。厚さ約40cm。第21層、暗灰色砂層、厚さ10cm前後。第22層、黒灰色粘質砂層、厚さ10cm。第23~24層は黒色粘質土層。第25層、灰色砂質粘土層となっている。板付I式土器期の水路は黒灰色粘土層と

粗砂層の互層となっている。

(3) 突帯文土器単純期上層の水田遺構

突帯文土器単純期の上層の水田遺構は一部を検出したにとどまり、全体的な把握にはいたっていない。以下、検出した遺構について説明を加える。なお、板付Ⅰ式土器期水田を上層水田、本水田を中層水田、最下層で検出した突帯文土器単純期の水田を下層水田と呼称する。

中層水田で確認したのは前述土層断面の説明で述べた水路と水田面に残された足跡がある。部分的に把握したにすぎないが、これは遺構そのものが保存状態が極端に悪かったためである。遺構が存在する周辺は白砂と粘土の互層になり、偽層ができている。洪水によつて大部分の遺構は流されて、消失してしまったと考えられる。

溝は幅1.5m、深さ約30cm、断面U字形をなす。確認したのはベルト部分の約1mであるが、方向が下層水田の幹線水路と同じであり、規模等からしても、中層水田の幹線水路であった可能性が高い。水田耕作土と考えられる上層は調査区の全面に拡がっている。プランツオパール分析や種子分析、花粉分析等の科学分析結果も、水田耕作土である可能性を支持しているが、水面の保存状態が悪く、一部に足跡の凹部が残っているにすぎない。検出した足跡はFig.18に示した。水田面の上には白色の微砂が堆積しており、足跡の検出は比較的容易である。二人の人間が歩いていたる軌跡を確認することができた。共に南から北に向かって歩いている。左側の歩行は左右の足跡各1個、右側の歩行は5個の足跡がある。他に歩行に関係ない1個の足跡がある。この面の足跡は残りの状態が良く、指の一本一本まで識別できる。特に歩行に関係ない1個の足跡は残存状態が良好であり、石膏型はP.L.5-3に示した。また、手の跡と思われる凹みも存在する。

(4) 幹線水路(Fig.19)

下層水田の幹線水路は調査区の東側に検出した。板付Ⅰ式土器期の幹線水路と切り合ひ、水路の東壁の大部分は破壊されているが、他の部分は、自然堤防状の高まりの下に密封されており、完全に残っていた。水路幅は2.4~3.0m、平均2.5m前後である。断面形は逆台形状で底面は平坦である。深さは最も残りの良い北側で1.35mを測る。調査区内で確認した長さは27.5mを測る。

水路の断面の土層は場所によってかなりの違いをみせる。前節の土層断面でも述べたが、ここでは調査区の北壁部分の土層断面について説明を加える。土層断面図はFig.19に示した。

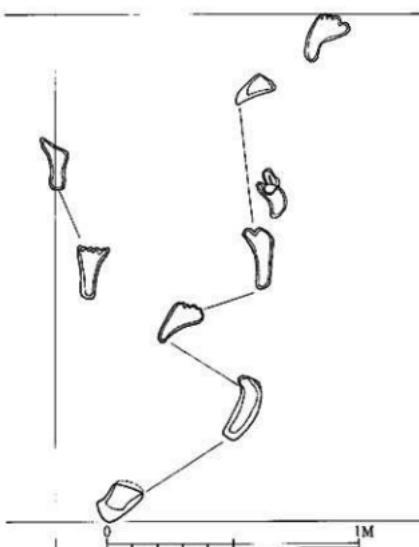


Fig.18 G-7a区 中層水田面足跡実測図

第1層、暗灰色微砂層、厚さ5cm。
 第2層、灰色微砂層、厚さ5~15cm。
 1・2層共に水田(西)側に堆積する。
 第3層、暗青灰色微砂層(砂壤土)、厚さ2~7cm。第4層、暗灰色微砂層、厚さ5~12cm。第5層、暗青灰色微砂層(砂壤土)、厚さ5cm前後、レンズ状に堆積。第6層、灰色微砂層、厚さ8cm、レンズ状堆積である。第7層、暗灰色微砂層、厚さ5~10cm、東側に堆積する。第8層、黒灰色砂質土層、厚さ10~15cm。第9層、黒灰色砂質土層、第8層より粘性が強い。厚さ10cm前後。
 第10層、暗灰色微砂層、厚さ5cm前後。第9・10層は東側に堆積する。第11層、暗灰色砂質土層、厚さ7cm前後。第12層、粗砂の混入した暗灰色微砂層。第13層、暗灰色砂質土層、厚さ5cm前後。第11~13層はレンズ状堆積である。第14層、灰色微砂層、厚さ6cm前後。レンズ状に堆積する。第15層、暗灰色砂質土層、厚さ10cm前後、西側に堆積する。第16層、灰黒色砂質土層、厚さ2~15cm。第17層、灰色~黒色微砂層、厚さ5~10cm。第18層、鉄分を含んだ灰褐色粗砂層、厚さ11cm前後。第19層、灰黒色砂質土層、厚さ10cm前後。第20層、暗灰色砂質土層、厚さ5cm前後。第21層、灰黒色砂質土層、厚さ2cm前後。第22層、灰黒色砂質土層、厚さ5~10cm。第18~22層は中央部にレンズ状に堆積する。第23層、灰黒色粘質土層。溝下半分に厚く堆積する。厚さ30~40cm。第24層、黒色粘質土層、厚さ3cm前後。第25層、八女ロームブロックの混入した灰色粗砂層。第26層、黒色粘土層、厚さ4cm前後。第24~26層は西側にレンズ状に堆積している。

(5) 井堰と取排水溝(Fig. 20)

幹線水路の中央よりや、南に幹線水路を横切る井堰が設置され、その上流部(南側)に幹線水路と水田を結ぶ取排水溝がつくれられている。また、取排水溝のすぐ東には上の水田から排水するための溝があり、この排水を給水に切り換えるための井堰が設置されている。以下、それぞれの造構について詳細にみていく。

井堰

幹線水路に直交して丸太杭が打ち込まれているが、残存状態は極めて悪い。打ち込まれた状態で残っている丸太杭は3本のみである。周辺に抜けた状態で丸太杭が散乱していた。杭はいずれも樹皮を残し、径3~5cmのものが多いが、中には径8cmにおよぶものもある。杭の先端は鋭利な利器で鋭く尖らされている。金属器が使用されている可能性もある。元来は、水路に直交して杭が打ち込まれ、それに横木を渡した井堰と考えられる。この井堰で貯水し、すぐ上流に設置された取排水溝から水田に給水していたことがわかる。

排水溝と井堰

調査区の南側、幹線水路に設置された井堰の上流部に、幹線水路のすぐ西側を平行して走る溝一条

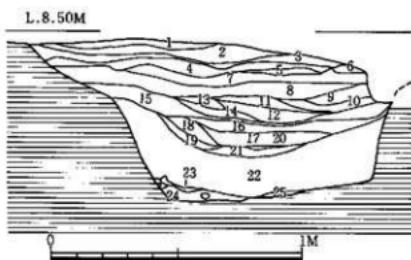


Fig.19 G-7a区 突堤文土器単純期幹線水路断面実測図

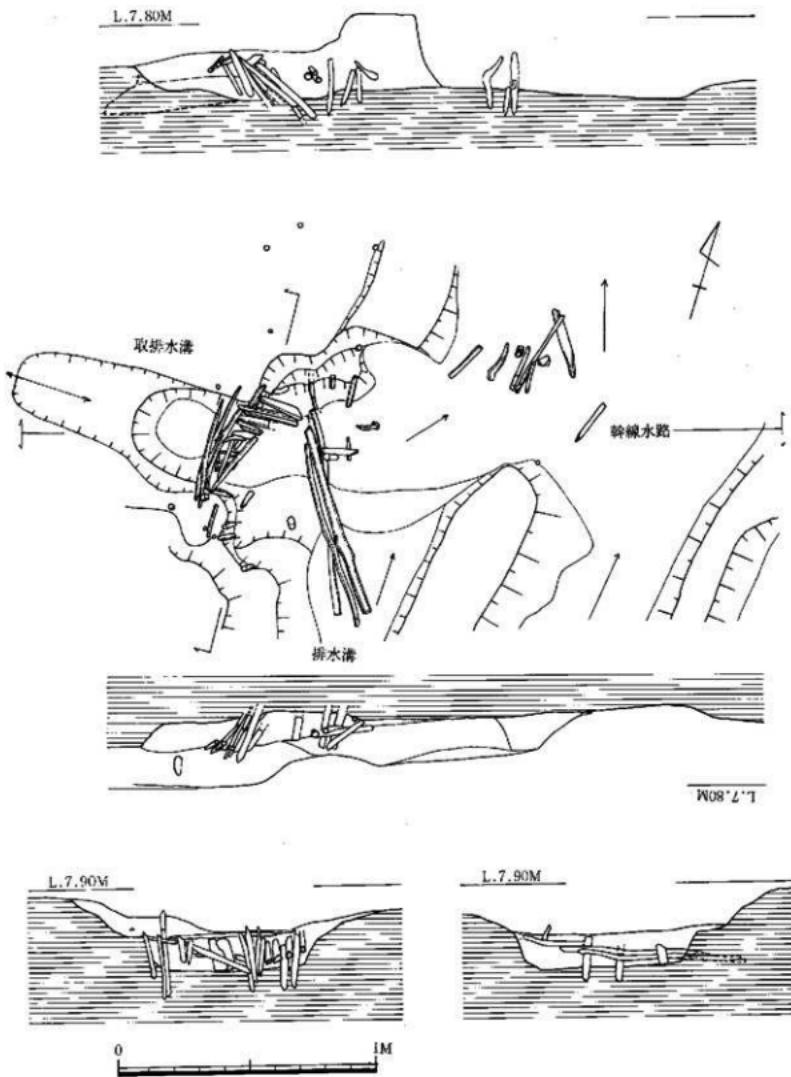


Fig.20 G-7a区 突帶文土器單純期、井堰・水口実測図

を検出した。溝幅1.0~1.6m、深さ約30cm、断面形は浅いU字形をしている。長さ約8mを有し、さらに南側に延びている。溝の両側は畦畔となっている。東側の幹線水路と限る畦畔は、基盤層である八女ロームと黒色粘土層を削り出して作られる。畦畔幅1.2~2.4m、断面は台形状をなす。西側は水田を限る畦畔で幅約3mを測る。この溝は後章において考察するが、調査区の上流(南側)に存在する水田からの排水溝と考えられる。

この排水路の出口、水田の取排水溝との合流点にも井堰が設置されている。井堰はや、太目の丸太を横木として渡し、それを杭で留めた簡単なものである。横木として使用されているのは、径8.0cm、長さ1.56mと径4.0cm、長さ1.50m、径5.0cm、長1.65mの三本である。杭は径5.0cmの丸太杭である。この井堰は排水を給水に切り換える重要な役割を荷なっている。

取排水溝 (Fig.20)

幹線水路に設置された井堰のすぐ上流につくられた幹線水路と水田を結ぶ取水・排水を併用した水田水口である。取排水溝は南北に畦畔があり、畦畔を切る形でつくられている。取排水溝は現状で長さ約1.8mを測り、途中に杭、矢板が打ち込まれ水田の水を調整するための堰が設けられている。溝は堰付近で屈曲するが、全体としてほぼ東西方向に走る。溝幅は30~50cmで一定していない。溝の西端は水田面に浅い皿状の凹みとして存在し、西端より約50cmの所で急に落ち込み、深くなる。深さ約20cmを測り、幹線水路に向かって徐々に深くなる。断面形は逆台形状をなす。溝の落ち込み部は、下方がえぐれ約30cm内側にはいりこみ、オーバーハングしている。これは排水時の侵蝕作用によるものである。落ち込み部は堰から30~50cm西側にあり、溝の両側に存在する畦畔を結んだ外側の線から約90cm離れている。このことは、水口部が排水による侵蝕のため序々に西側に移っていること、つまり、後退していることを示している。この水口の移動に伴い畦畔にも変化がみられる。取排水溝の北側の畦畔は、水田として使用開始された当初は、南側畦畔と直線的位置にあったと考えられ、幹線水路に沿った部分にその名残りが認められる。その後、取排水溝の後退に伴い、畦畔は水田内側(西側)に屈曲するが、この部分が盛土で遺存状態が悪く、また、発掘ミスも重なり充分に解明することはできなかった。ただし、畦畔の両側に不規則に打ち込まれた杭の存在から、復原は比較的容易である。

取排水溝に設置された水量調整のための堰は保存状態は極めて良好で、その構造は充分に解明できる。堰は13本の杭と矢板2本が打ち込まれ、6本の横木が渡されている。杭は丸太杭と丸太を分割した割杭を半々で使用する。杭は径4.0~5.0cmのものが使用され、水口の両側が深く打ち込まれ、中央部は取りはずしが自由なように矢板を置いている。横木はすべてが割材で長さ60~90cm、杭の間にはめ込まれているだけで、これも取りはずしが自由にできる。必要に応じて、取りはずしが自由な材を除けば、水口は確保され、遂に矢板、横木を渡せば水口は封鎖され、水の流れを塞ぐことができるようになっている。この堰の外側両側は八の字形に若干開き、壁に沿って杭が打ち込まれているが、杭は間隔で護岸用の杭と見ることもできるが、むしろ、取排水溝の後退に伴い、堰も同様に移動したと考えられ、これから杭はその名残りをみることができる。

(6) 畦畔 (Fig.21)

畦畔は調査区の東側で、幹線水路の西側に沿って、水路と水田を限る畦畔が一条、調査区西側で水田と水田を分つ畦畔一条が検出されている。いずれも土盛り(削り出し)の畦畔である。

東側の畦畔は幹線水路の西側の上手を兼ねている。土盛りの畦畔であるが、部分的には削り出された部分もある。畦畔の幅は下場で1.4~1.8m、上場で0.9~1.2mを測る。断面形は台形、高さ30cm、

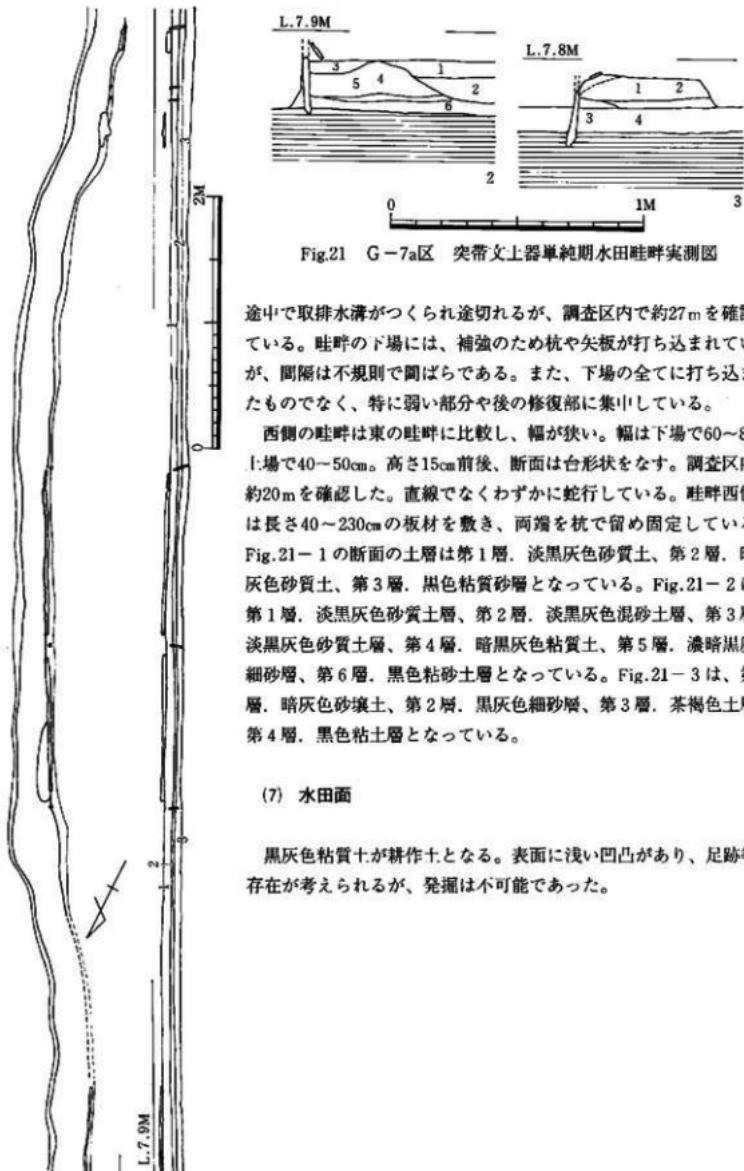


Fig.21 G-7a区 突帯文土器単純期水田畦畔実測図

途中で取排水溝がつくられ途切れるが、調査区内で約27mを確認している。畦畔の下場には、補強のため杭や矢板が打ち込まれているが、間隔は不規則で間ばらである。また、下場の全てに打ち込まれたものではなく、特に弱い部分や後の修復部に集中している。

西側の畦畔は東の畦畔に比較し、幅が狭い。幅は下場で60~80cm、上場で40~50cm。高さ15cm前後、断面は台形状をなす。調査区内で約20mを確認した。直線でなくわずかに蛇行している。畦畔西側には長さ40~230cmの板材を敷き、両端を杭で留め固定している。Fig.21-1の断面の土層は第1層、淡黒灰色砂質土、第2層、暗黒灰色砂質土、第3層、黒色粘質砂層となっている。Fig.21-2は、第1層、淡黒灰色砂質土層、第2層、淡黒灰色混砂土層、第3層、淡黒灰色砂質土層、第4層、暗黒灰色粘質土、第5層、濃暗黒灰色細砂層、第6層、黒色粘砂土層となっている。Fig.21-3は、第1層、暗灰色砂壤土、第2層、黒灰色細砂層、第3層、茶褐色土層、第4層、黒色粘土層となっている。

(7) 水田面

黒灰色粘質土が耕作土となる。表面に浅い凹凸があり、足跡等の存在が考えられるが、発掘は不可能であった。

第3章 G-7b区の調査

1. 調査区の位置 (Fig.5)

史跡指定地の南端部西側、台地の落ち際から旧水田であった沖積地に位置している。指定地とは幅6mの道路をはさんで隣接している。また、前章で報告したG-7a区とは県道505号線をはさんで相対している。G-7a・G-7b区はもともと一枚の水田であるったが、県道の新設によって分断されたものである。調査の都合上、先に調査に着手した県道南側をG-7a区、後から調査した北側をG-7b区とした。県道部分は、1976年に発掘調査が終了していたが、その発掘成果は注目すべきものであった。発掘所見は、現水田面下に弥生時代中期～中世の遺物が混在した粘土層があり、その下は、弥生前期の遺物包含層となっている。上部では板付I式土器と夜臼式土器が共伴するが、量的に板付I式土器が多く、夜臼式土器が少い。下部では同様に板付I式土器と夜臼式土器が共伴するが、板付I式土器は少なく、夜臼式土器が集中して出土するというものであった。ただし、発掘区がせまく、湧水が激しいため、その詳細について不明な点が多い。G-7a・7b区の調査はその欠を補うことを目的として進めた。

調査区は調査時には埋めていたり、宅地となっていたため、発掘調査区はキケン防止のため、敷地からかなり引いた部分で実施せざるを得なかつた。調査成果の重要性からすると、調査区の拡張ができなかつたのは、残念である。

2. 調査区の層序 (Fig.23)

Fig.23は調査区南壁の土層断面である。調査区東側の板付I式土器の段階の幹線水路部分は、壁の崩落が著しく、土層断面図は作製できなかつた。

第1層、現在の盛土、厚さ約60cm。第2層、最近までの水田耕作土、下面に酸化鉄、マンガンの沈着した水田床土がある。厚さ25～30cm。第3層、茶褐色粘質土層、台地際には土器や石器等の遺物が多量に包含される。西側にいくに従い遺物量はへり、土層も明茶褐色混砂土層となる。厚さは西側が薄く15cm前後、東側は35cm前後となる。第4層、黄褐色混砂土層、厚さ3～10cm、土器がつまっている。第5層、暗茶褐色混砂粘土層、層の上面は凹凸か著しい。厚さ5～18cm、弥生時代中期の土器を包含している。第6層、粗砂層、西側にレンズ状に堆積する。厚さは最も厚い部分で15cmを測る。第7層、灰褐色混砂土層、厚さ5～15cm、中央部に薄くレンズ状に堆積する。第8層、粗砂層、厚さ25cm前後、板付I式土器期幹線水路の西端部にあたる。水路の埋土は黒灰色有機質土層と粗砂層の互層となつていて、有機質土層中には木葉やドングリ類をはじめとして植物の種子等が多量に含まれている。第9層、青灰色微砂層、厚さ15～25cm前後、板付I式土器期幹線水路西端の自然堤防状の高まりのトップをなす層である。この土層には板付I式土器段階の層位は反映していない。第10層、暗青灰色微砂層、厚さ5～20cm、中央部にレンズ状に堆積する。第11層、や、粘性のある暗青灰色微砂層、東側に堆積している。厚さ5～15cm。第12層、暗青灰色砂質土層、厚さ5～20cm、西半部に堆積している。第13層、青灰色砂質土層、厚さ12cm前後、西側のみに堆積している。第14層、暗茶褐色粘質土層、厚さ5～15cm、西半部から始まり、西に向って序々に厚くなる。第15層、暗灰色微砂層、東半部、水路の上部にレンズ状に堆積する。厚さ8～20cm。第16層、褐色砂混入土層、厚さ9cm前後。第17層、茶

褐色砂混入微砂層、厚さ10～15cm。第16・17層は水路の上位にレンズ状に堆積する。第18層、暗黄褐色砂粒混入微砂層、厚さ10～25cm、中央部に厚く堆積している。第19層、第18層とほぼ同様の土層である。第20から第29層までは、下層水田耕作の幹線水路の埋土である。いずれもレンズ状の堆積を示している。第20層、黒褐色砂質土層、厚さ20cm前後。第21層、暗黒灰色粘質土層、厚さ15cm前後。第22層、黒色有機質土層、水路の下部に厚く堆積する。厚さ40cm前後。第23層、八女ロームのブロック層、厚さ15cm前後。第24層、黄褐色細砂層、厚さ3cm前後、黒色粘土のブロックを含む。第25層、黒灰色微砂層、厚さ5cm前後、西壁近くに部分的に堆積。第26層、黒灰色微砂層、厚さ3cm前後、東壁近くに部分的に堆積している。第27層、黄褐色微砂が混入した粗砂層、東壁近くに部分的に堆積、厚さ5cm前後。第28層、黄褐色～黒灰色微砂が混入した粗砂層、厚さ5～10cm。第29層、床面に堆積する層で、八女ロームのブロックを含む。灰色粗砂層で厚さ8～15cmである。第30層、一部に暗青灰色の微砂層を含んだ暗黒褐色砂質土層、中央部に堆積する。厚さ15～20cm。第31層、暗黒色細砂層、厚さ5～8cm。第30層の下部に薄く堆積している。第32層、暗黒褐色砂質土層、厚さ8～15cm、畦畔より西側に堆積し、下層水田耕作土を覆っている。第33層、暗黒褐色粘質土層、厚さ10～15cm。下層水田の耕作土である。表面に若干の凹凸がみられる。第34～36層は下層水田の畦畔を形成する層である。第34層は暗褐色粘質土層、厚さ7cm前後。第35層、暗褐色粘土層、厚さ5cm前後。第36層、八女ロームのブロックと黒色粘土層が混在した土層、厚さ20cm前後である。畦畔の断面形は半円状をなす。下場で幅155cm、上場で約70cm、高さ33cmで、G-7a区で検出した畦畔と同様の規模を有している。基盤は黒色粘土層、八女ロームとなっている。

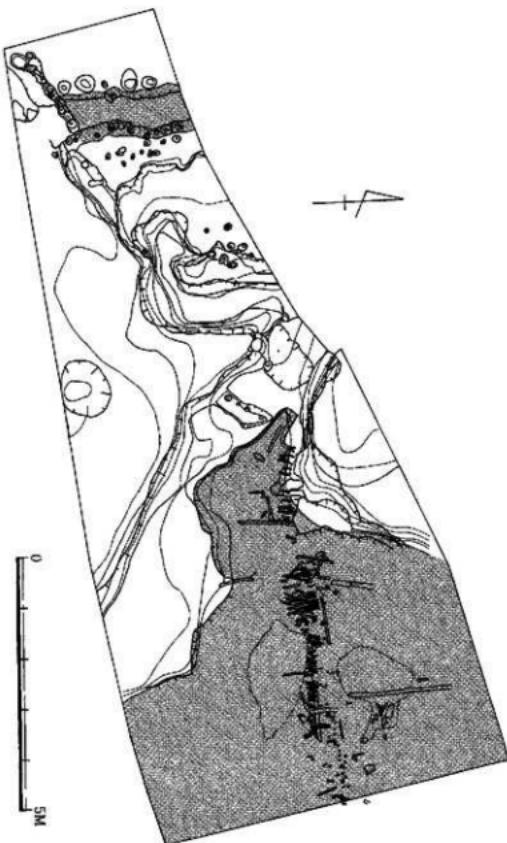


Fig.22 G-7b区 遺構面地形実測図

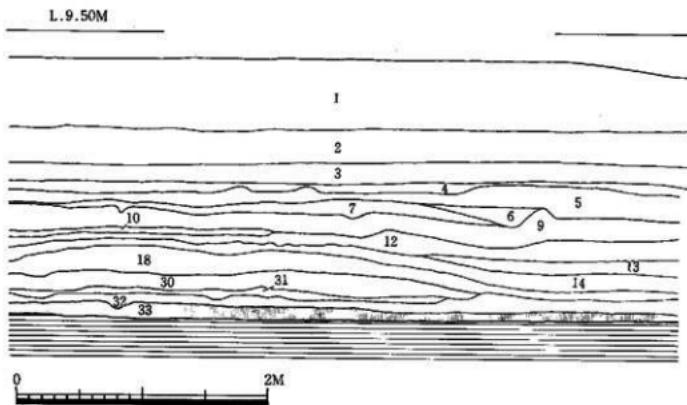
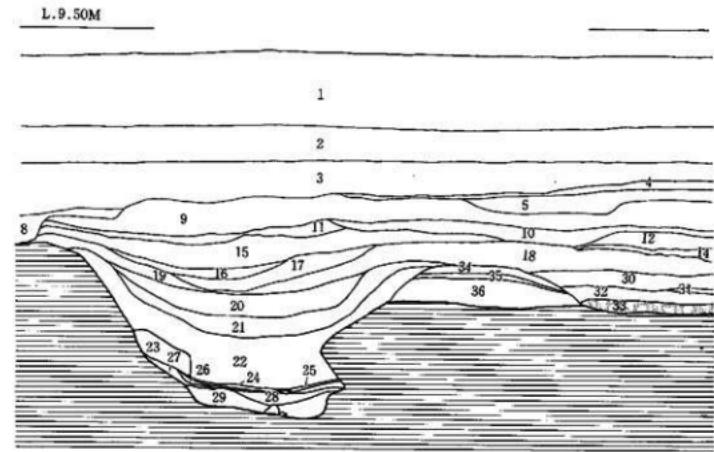


Fig.23 G-7b区 土層断面実測図

3. 板付 I 式土器期の水田遺構

(1) 水田遺構の概要 (Fig. 22, 24)

調査区がせまいために、良好な状態で遺構は検出されていないが、G-7a区の成果と合せて非常に重要な遺構が集中して検出された。G-7b区はG-7a区と約15m離れているので層位の対応関係が充分に把握できないくらいがあり、一部、板付 II a 式土器まで継続する遺構も含めて説明する。

先ずG-7b区で検出した水田造構をあげると、調査区の東側に幹線水路（小河川）が流れ、幹線水路を横切るように井堰が設置されている。井堰は後節で詳細に説明を加えるが、かなり大規模で保存状態も極めて良好である。井堰は板付I式土器段階につくられ、補修、つぎたしがおこなわれ、板付IIa式土器段階まで使用されている。井堰の上流側のすぐ横に取排水溝が設置されている。取排水溝は蛇行して掘り込まれ、幹線水路側の北岸部は護岸のため杭が打ち込まれている。構の途中に杭および杭の抜き穴が溝に直交して存在する部分があり、ここに水田への水量調整のための堰が設けられていたと考える。取排水溝の長さは約10mを測る。取排水溝の西端部に畦畔状の高まりが南北にのびている。畦畔の両側に杭の抜き穴状のピットが並んでいる。元来は杭で補強されていたと考えられる。畦畔状の高まりの西が水田面と考えられるが、調査の端にあたるので詳細は不明。排水構、畦畔の保存状態は良好とはいえないが、構造を把握するには充分である。

(2) 幹線水路

調査区の東側に検出した。西岸部の約6.0mを検出したにとどまるが、ちょうど蛇行する部分にあたり、調査区の南側から北西方向に曲り込み、調査区中央部から反転して北東に向っている。水流が直接ぶつかるために、岸部は侵蝕され、垂直に近い崖面を形成している。調査区内で検出した水路幅は3～5mを測る。実際の水路幅は12～13m前後と考えられる。水路の埋土は灰色粗砂層と黒灰色有機質土層の互層となっており、有機質土層中にはドングリ等の堅果類の種子やヒヨウタンや周辺に植っていた植物の種子が多量に含まれ、また木葉や小さな流木が含まれている。

(3) 井堰と構 (Fig. 25, 26)

調査区の東側中央部に幹線水路を横切ってつくられた井堰造構と木橋と考えられる造構を検出した。調査区内で確認した井堰の長さは約6.5m、井堰は水流のため押し倒されかなり傾斜しているが、現状で約2.0mの高さを有し、保存状態も良好である。基本的な構造は杭を打ち込み、それに横木を渡し、横木にさらに杭をたてかけたものである。

詳細にその構築方法をみていく。先ずは水路の流路部分を堰止める方法がとられている。径20.0cm前後、長さ2.60mあるいはそれ以上の長さを有し、上部が又になった丸太杭をつくり、それを川底に打ち込んでいる。調査区内で確認したのは3本で、川の中央部に近い杭の間隔は0.4m、他の一本は1.0mの間隔で打ち込まれている。流れの急な部分をより補強していることがうかがえる。基礎となる杭を打ち込んだ後、又になった部分に横木を渡している。横木も径20cm前後の丸太で3m以上。次に横に沿って径5～6cm、長さ3m前後の丸太杭を打ち込み堰の基礎部分はできあがるが、さらに水位をあげる必要性があり、上部に同様の方法で堰のかさあげを行っている。堰の西半部では径25cm前後、長さ2.5m前後、やはり頭部が又になった杭を3.0mの間隔で2本打ち込み、径約25cm、約7.0mの横木を渡し、横木に沿って径5～10cm、長さ4.0m前後の杭を幾重にも打ち込んでいる。水路の西側では一段の構築になるが、中央に近づき二段の構築となっている。中央部の構造は判然としないが、一段目の基礎、川岸に近い部分の二段目構築の強度を利用しながら、横木を渡しこみ、それを基礎に杭を幾重にも打ち込んでいたと考えられる。杭はからみ合うように打ち込まれ、幅は約1mに達している。これだけでは、貯水した水の圧力をささえのに困難であったと考えられ、随所に堰を北側（下流）からささえるために径25cm前後の柱が斜に固定されている。井堰は現状で高さ2m前後を有して

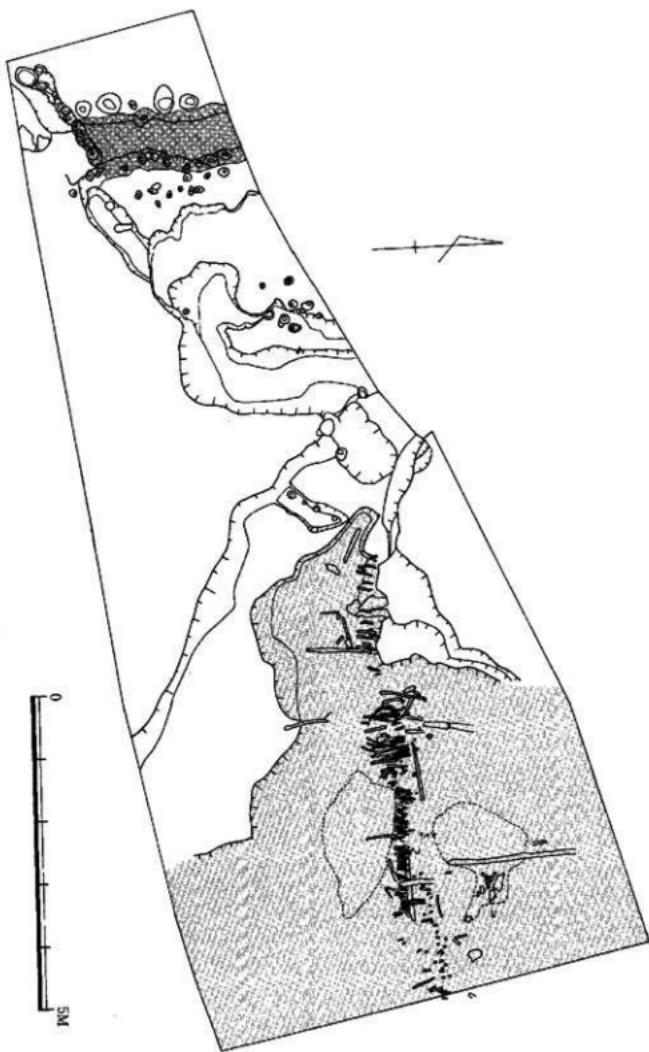


Fig.24 G-7b区 上層造構全体図

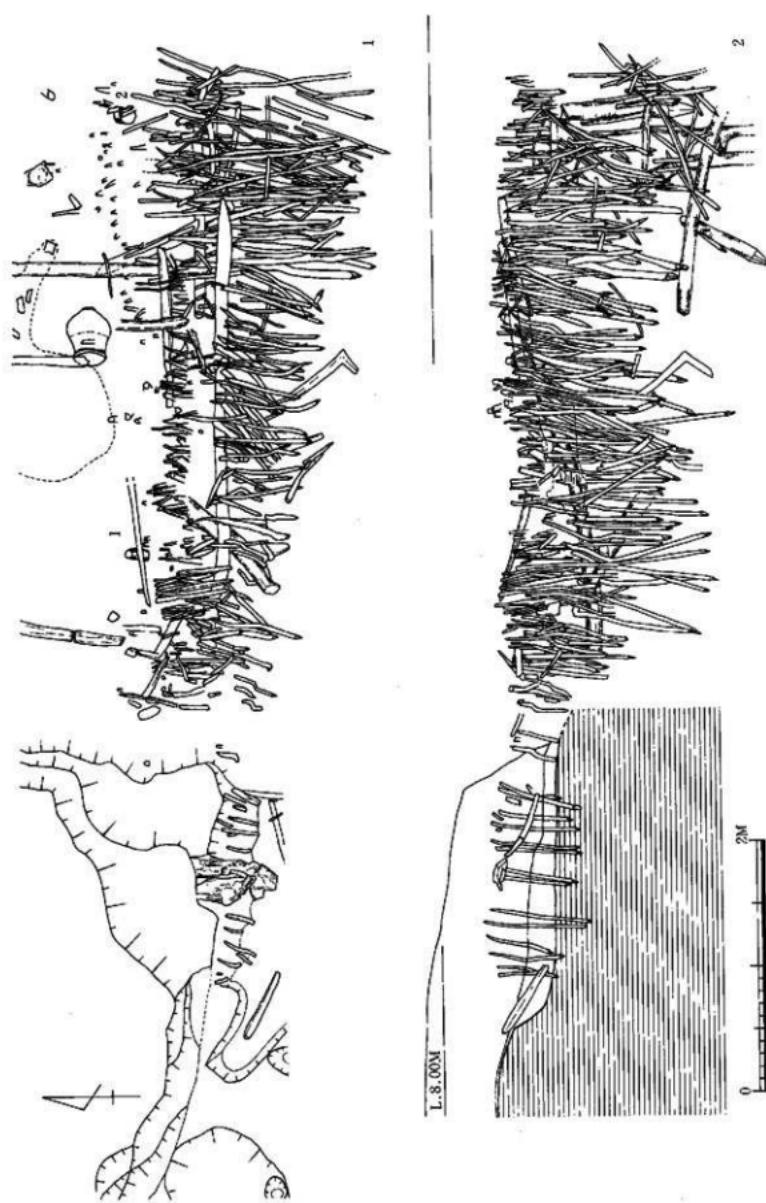


Fig.25 G-7b区 井壁実測図 I

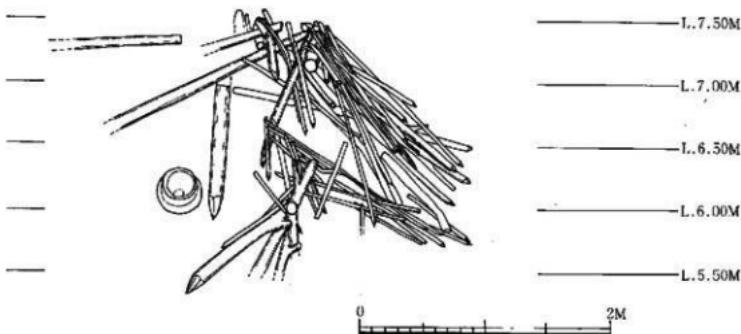


Fig.26 G-7b区 井堰実測図 II

いるが、これでは、水田への給水は無理である。土圧等による堰の杭の傾斜を修正しても、さらにもう一段程度の堰のつぎたしが必要であったと考えられる。杭の数は、Fig.25-1の平面図でも明らかのように中央部に厚く打ち込まれている。発掘で明らかにした井堰は全体の半分にもおよんでいないので、今後の調査が期待される。

なお、この井堰のすぐ下流には木橋が渡されていた可能性が強い。井堰に關係しない遊離した杭や材から推測できるものである。Fig.25-1の平面図で、1、2で示した杭は径約30cm、現在の長さ2.2mで垂直に打ち込まれ、井堰との直接の関係はない。杭の先端部の位置からすると、井堰よりあとに作られたことは明らかである。1号杭から西岸までの距離は約7m、1号杭と2号杭の距離も約7mを測る。この1・2号杭の周辺には堰に關係ない加工材が、平行ないしは直交する形で散乱している。1号杭、2号杭に対応する杭は調査区内では確認できなかったが、調査区北壁まで3mも離れていないので、北側の調査区外に存在する可能性は高い。この1号・2号杭を橋げたの基礎と考えれば、ここに井堰の補強も兼ねた簡単な木橋の存在を考えて良いと思われる。集落の存在する台地と水田の間には、これまで述べてきたように幅約10mの水路が流れていたことになり、当然、集落と生産地である水田との間には橋が必要である。台地上に掘削された環濠には南西部に1ヶ所の陸橋がつくられているが、その延長上に今回想定した木橋がある。位置的にいっても橋と考える必然性は高いのである。

この井堰の周辺で水に対する農業祭祀がおこなわれていたと考えられる。井堰のすぐ下流の一段目の構築部より、板付I式土器の完形品が横になった状態で出土している。また、井堰の杭列の中からは丹塗りの木製の「陰部かくし」が出士している。いずれも祭祀に使用されたと考えられる。特に水に対する祭祀は随所で行われたらしく、後述する取排水溝の完形土器やG-7a区板付I式土器段階の取排水溝の土器片は、その祭祀行為を有弁に語っている。

祭祀用土器 (Fig. 27)

井堰のすぐ下流に投げ込まれた状態で出土した。層位的にはかなり下方であり、井堰からみると最初に井堰が作られた時に使用されたものと考えられる。土器は完形品。出土した時は、口縁下に植物質の紐（ツルか？）が4条まかれていたが、保存状態が悪く一部を残して剥落した。口径25.6cm、胴部最大径38.3cm、器高41.0cmを測る。口縁部には粘土帯を貼り付け肥厚させ、下端に段をつくり出している。口縁は大きく外反する。頸部と胸部の境にゆるやかな段をもつ。胸部の最大径はや、上位にあり、タマネギを逆にしたような形をしている。底部は円盤貼り付け状をなす。器面の

調整は、下地に下から上にかけて継ぎの刷毛目調整が左まわりに施され、仕上げにヘラ研磨が加えられる。ヘラ研磨は胸部上半部が右から左の横方向、下半部は左から右の斜方向に丁寧に施している。底部付近に消し残された刷毛目調整痕がみられる。内面はナデによって調整されているが、一部に刷毛目痕が残っており、外面同様に下地として刷毛目調整を加えたことがわかる。口縁部は横方向のヘラ研磨調整。外面の全面と口縁部内側に丹塗りを認める。頸部の粘土接合部には指押えの痕跡が明瞭に残っている。粘土帯の接合は外傾接合。胎土には小さな砂粒を多く含み、焼成は堅緻、色調は外面が赤褐色、内面が黒褐色をなす。

(4) 取排水溝 (Fig. 24、28、29)

取排水溝は井堰のすぐ上流に接してつくられている。ほぼ調査区内におさまっているが、一部、北側で調査区外にのびている。復原は容易である。構造の遺構で途中で大きく蛇行している。整然とした溝ではなく、凹凸が著しいが、全体としてはまとまりがある。

溝は東側の幹線水路と接する部分は、八の字形にひらき、大きくなる。開口部は6.0mで、井堰の杭列は中央よりや、北に片寄った所に打ち込まれている。溝は開口部から北西方向に約4m延び、転して方向を南に変え約3m延び、さらに方向転換して西に4m延びて畦畔の所に達する。溝は西から東、すなわち、水田から幹線水路に向って傾斜している。断面形は整形ではないが、浅い皿状をな

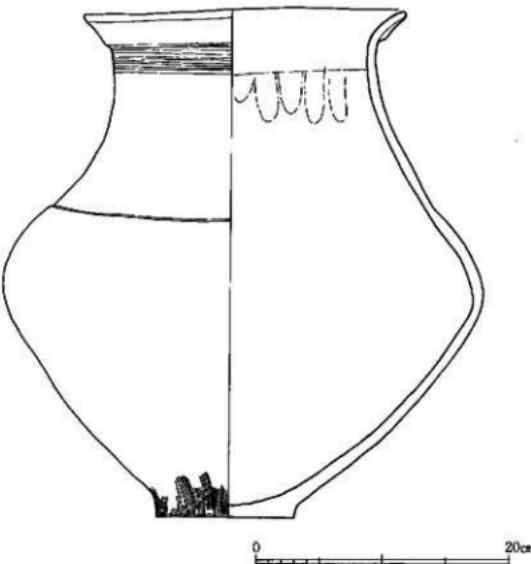


Fig.27 G-7b区 井堰出土土器実測図

し、部分的に深くなる。取排水溝の開口部の北岸は、井堰から延長した杭が打ち込まれていて、護岸を兼ねている。杭は約2mの間に打ち込まれている。杭が切れた部分に溝に直交して水量調整のための堰が設置されていたと考えられる。倒れた杭1本と基部が残った杭穴1個、杭の抜き穴3個が一直線に並んでいる。杭5本を打ち込み横木を渡した簡単な堰と考えられる。

この取排水溝が作られた時期は、G-7a区の板付I式土器段階の取排水溝との関係で問題になるが、溝築造時期は不明。ただし、存続期間は、G-7b区の取排水溝の方が長く、Fig.29にみる祭祀土器からも判断できる。また、井堰がかなり埋った以後、取排水溝は水路に延長され、堰の一部を壁としていること（Fig.28-2）からも判断できる。

Fig.28-1は、取排水溝の堰付近の上層断面実測図である。土層断面は複雑で流路かたびたび変わることを示している。第1層、茶褐色混砂土層、厚さ約10cm。第2層、暗黄褐色砂質土層、厚さ8cm前後。第3層、黄褐色細砂層、厚さ8~15cm。第4層、黄褐色細砂のブロックを含んだ灰色微砂層、厚さ15cm前後。第5層、赤褐色粘砂上層、厚さ10~18cm。第6層、暗茶褐色砂質土層、厚さ10~15cm。第7層、淡茶褐色細砂層、溝の大部分を占める。厚さ25~50cm。第8層、淡灰色微砂層ブロック、厚さ10cm前後。第9層、暗灰色砂質土層、厚さ10~15cm。第10層、暗灰色微砂層、厚さ5~10cm。第11層、淡茶褐色微砂層、厚さ5cm前後。第12層、粗砂層、厚さ20cm。第13層、茶褐色細砂層、厚さ15cm前後となっている。第5・6層が最も新しい流路の埋土層、第1~3、7~9層はそれ以前の流路の

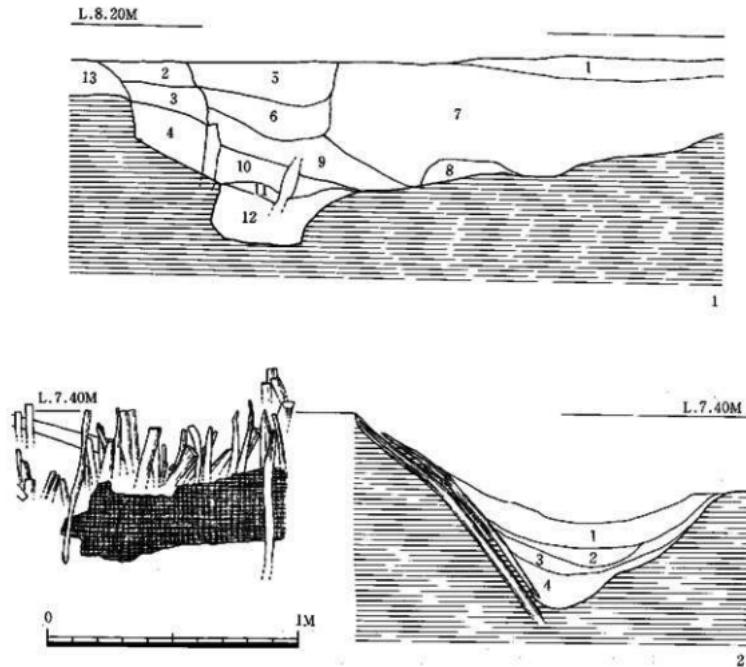


Fig.28 G-7b区 水口、土層断面実測図

埋土。第4、10~12層がさらに以前の流路の埋土と考えられる。縦位を示す層は杭の抜け穴である。

Fig.28-2は幹線水路がある程度埋まり、取排水溝がさらに東に延長された時の延長部分の断面実測図である。溝は粗砂層中に掘り込まれている。溝は幅115cm、深さ約50cm、断面はV字形をなす。北壁は井堰の杭列をそのまま利用している。杭に網代をあて、80cm間隔で杭でとめて、水が漏水するのを防いでいる。この部分の溝の埋土は以下の如くである。第1層、黒褐色有機質土層、厚さ約10cm。第2層、暗黒灰色砂質土層、厚さ約5cm。第3層、暗褐色有機質土層、厚さ2~5cm。第4層、砂を含んだ暗褐色有機質土層、厚さ5~12cmとなっている。いずれもレンズ状の堆積をなす。

この溝の最終時期を示すものに祭祀に使用されたとみられる土器がある。取排水溝の東から2番目の屈曲から出土した。出土状況はFig.29に示した。溝底に横わたり、土圧によって押しつぶされているが、本来は完形品であったことがわかる。大型の壺形土器で器高は50cmを超える。この取排水溝を遺棄する時に投げ込んだものか、あるいは水路周辺に置かれていたものが、洪水等によって流れ込んだかは明らかにできないが、いずれにしても祭祀に使用された土器であり、この水路の最後を示すものである。

(5) 畦畔

調査区の西端に検出した。取排水溝の先端部もこの附近で止まっている。検出した畦畔はG-7a区の自然堤防状の高まりを利用したものとは異なり、土盛りの畦畔である。畦畔は幅が下場で80~100cm、上場で50~60cm。高さは10cm未満で極めて低い。確認した長さは約2mと極めて短い。溝の両側には細かいビットが並んでいる。杭の根痕は残っていないが、大きさや状況から杭穴とすることができる。それからすると畦畔の両側には杭が打ち込まれており、高さもさらに高かったと推測することができる。

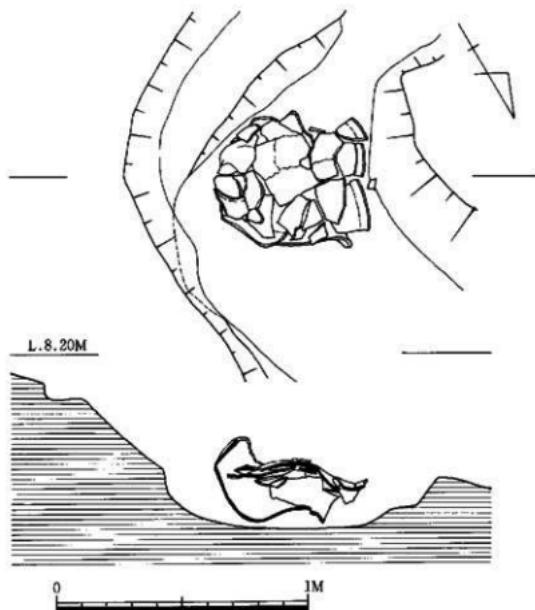


Fig.29 G-7b区 水口、祭祀土器出土状況

4. 突帯文土器単純期の水田遺構

(1) 水田遺構の概要 (Fig. 30)

調査区はせまいが刻目突帯文土器単純期の下層水田は明瞭な形で検出することができた。検出した遺構は調査区の東側を流れる幹線水路と水路西側の畦畔および水田面である。

また、水田遺構とは直接関係ないが、幹線水路に一段深く掘った土坑があり、木器未製品を貯蔵していた。

遺構の保存状態は極めて良好であり、その拡がりを確認すると共に、本来の姿に復元する材料を提供している。また、遺構ではないが、水田面からは石庵丁1点、木器貯蔵土坑からは踏手鉤、エブリ、石斧の柄各1点と柄3点の未製品が出土し、遺構と共に刻目突帯文土器単純期の稻作農耕の存在を確定的なものとした。

(2) 幹線水路

調査区の東側において確認した。板付I式土器段階の幹線水路（小河川）と切り合い関係にあり、水路の東側壁（右岸）は南側の一部を除いてほとんど残っていない。水路は残存状態の良い南側で幅約2.3m、断面形は逆台形ないしはU字形をなすと考えられるが、底に木器貯蔵土坑が刷り込まれているので明らかにできない。深さは約1.0mを測る。調査区で確認した長さは約5.0mである。東壁（右岸）は、板付I式土器段階の幹線水路だけでなく井堰の構築時にも破壊されている。東壁中央部の破壊が最も著しいのは、そのためである。西壁（東岸）

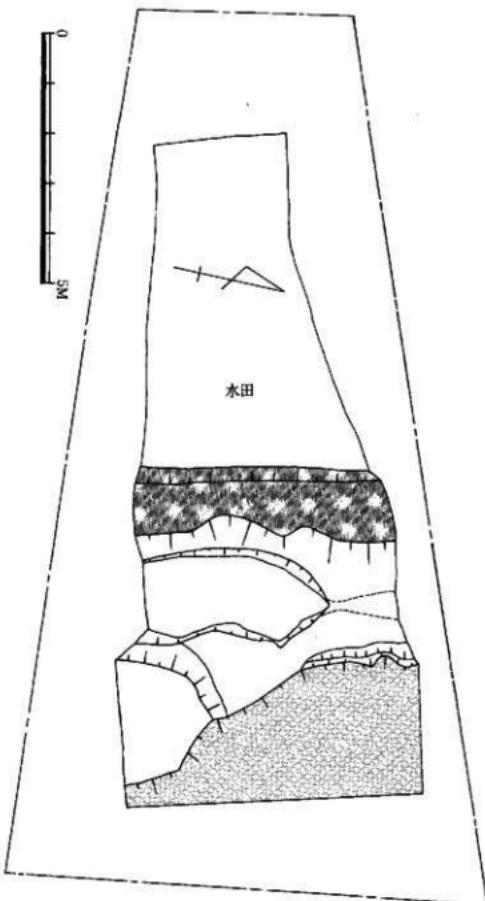


Fig.30 G-7b区 下層遺構全体図

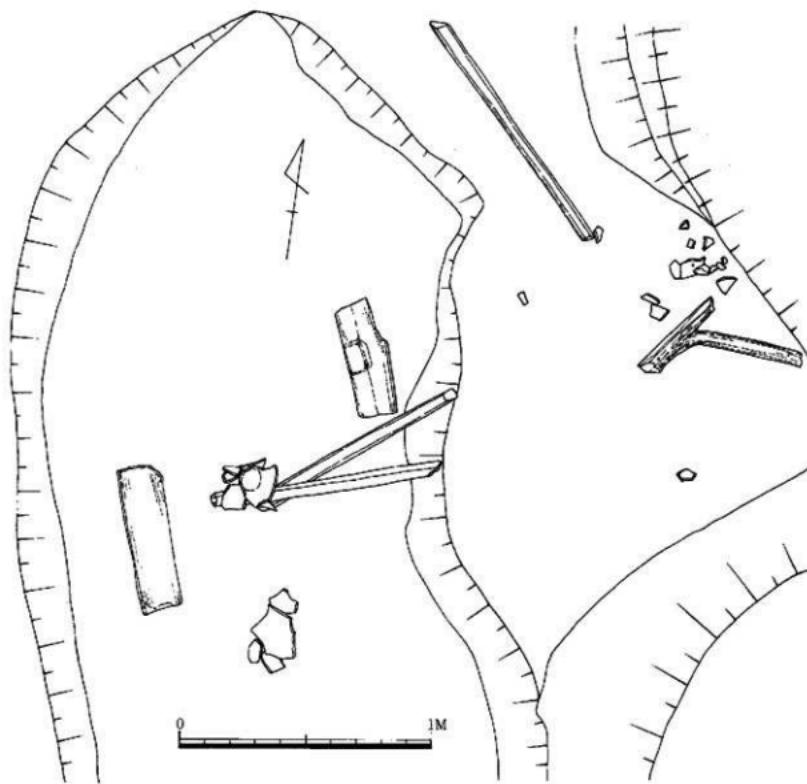


Fig. 31 G-7b区 木器貯蔵坑実測図

の一部が、掘削時より崩れているのは、木器貯蔵の土坑の掘削によると考えられる。壁の途中に一本の杭が打ち込まれていたが、これは木器未製品との関連性が考えられる。

(3) 畦畔

幹線水路と水田を限る畦畔が検出された。畦畔の保存状態は極めて良好である。畦畔の幅は下場で130~150cm、上場で80~120cmを測る。高さは30cm、暗褐色粘土層、暗褐色粘土層、八女ロームのブロックと黒色粘土層の混在層を盛りあげた土盛りの畦畔である。一部、水路の壁が崩壊し、変形しているが、大部分は当初の姿を保っている。

(4) 水田面

水田耕作上は暗黒褐色粘質土層で厚さ10~15cmを有する。表面には若干の凹凸がみられ、凹みは足跡とみられるが発掘不可能である。ほぼ水平に折り入り、西側に6.5m以上伸びているが、水田区画のための畦畔は認められない。水田表面には土器の小片が若干認められる以外ほとんど遺物はない。ただ興味ある現象として、畦畔から水田面にかけて投棄された石庵丁の破片3点がある。1mの範囲に点々と散っている。3点共に接合できる同一個体である。2孔を有する三角形に近い石庵丁であるが、孔の部分から一部破損している。元々欠けていたとみられ、破損部には磨滅痕が認められる。この水田で使用中に孔の部分から三片に欠けたため、投げ捨てた状況を示す出土状態であった。

(5) 木器貯蔵土坑 (Fig.31)

幹線水路の底面、南半部に検出した土坑である。幅1.7~1.9m、長さ3.1m以上で南側は壁中に延びている。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、深50cmを測る。床面はほぼ平坦である。幹線水路の底面をさらに一段掘り下げているため、この土坑は常時、水が満ちていたと考えられる。自然にできた凹みではなく、人工的に掘削されていることは疑いない。

土坑内からは諸手鋤、エブリの未製品各1点、鋤の柄の未製品2点と突帯文土器単純期の壺形土器1個体が出土している。また、土坑外の幹線水路の底に接して、鋤の柄、石斧の柄の未製品各1点が出土している。元来、土坑の中にあったものが、増水等によって土坑の外に流れ出したものとみられる。これら木器未製品の出土から本土坑は、木器未製品を水に浸し、ひずみやヒビ割れを防ぐための施設として利用されていたことがわかる。なお、この土坑の上位の畦畔の斜面には一本の杭が打ち込まれていた。壁の補強のためとは考え難い。あるいは、木器未製品が増水等で流れ出さないように、木器未製品を縄で結び、縄の先端をこの杭に結び止め、木器未製品の散失を防いだかもしれない。上記の鋤の柄、石斧の柄が土坑から出ながらも、近くに残存していたのはこのためであろうか。

第4章 G-7c区の調査

1. 調査区の位置

G-7c区は先に報告したG-7a区のすぐ西側の水田地帯に位置している。対象区は70m×30mの東西に細長い水田となっていた。遺跡の有無、水田の拡がりを確認するために東西に約40mの試掘トレーナーを入れ土層観察を行うこととした。試掘調査は重機で行ったが、基盤層まで2mを越す深さを有し、土層に粗砂層を介在している部分があり、壁の崩落が心配された。よって、安全確保のため、試掘トレーナーの幅を4mにして、1m掘り下げた段階で、その中心に2mのトレーナーをさらに掘り下げて二段掘りの方法で実施した。試掘調査では、土層観察の結果、突帯文土器単純期から連続と続く水田耕作土が確認でき、G-7a、7b区の水田がさらに西側に拡がることを確認した。また、西から35mの地点で自然流路（古諸岡川）を確認し、川の落ちる際から板付II b式土器と梯1点を発見した。古諸岡川は幅100mを有することが、これまでの調査で判明しているので、刻日突帯土器単純期の水田の内限は、古諸岡川の東岸までとなる。対象区には高層の共同住宅を建設予定であったため、基礎が全面にいる部分を自然流路部分にあたる西側にし、水田が遺存する部分は破壊を最小限にとどめるよう杭の基礎に設計変更していただき、遺跡の保存につとめた。

2. 調査区の層序 (Fig.32)

トレーナーの長さが約40mと長いので、トレーナー内の層序はかなり複雑であるが、基本層位はFig.32に示したとおりである。

第1層 現水田耕作土、黒灰色砂質土層で厚さ15cm前後。第2層・第3層は酸化鉄・マンガンが沈

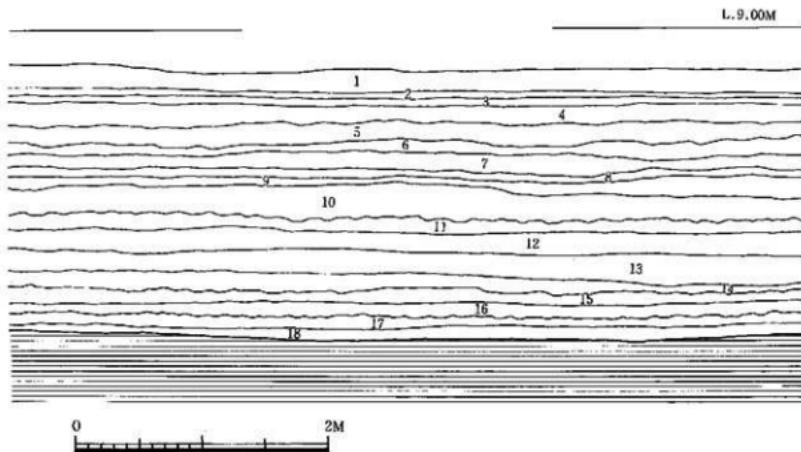


Fig.32 G-7c区 土層断面実測図

着した水田床土、厚さは共に5cm前後、トレンチ東側では、2層になっているが、西では一枚の層になる。第4層、黒褐色粘土層、厚さ15~30cm。第5層、暗黒褐色粘土層、厚さ10~15cm、水田耕作土の可能性が強いが、時期不明。第6層、黒灰色粘土層、厚さ5~15cm、この層の表面は凹凸があり、この層も水田耕作の可能性が強い。第7層、若干の粗砂を混入した黒灰色粘土層、厚さ10~15cm。第8層、粗砂の混入が目立つ黒灰色粘土層、厚さ8~10cm。第9層、若干の砂を含んだ黒灰色粘土層、厚さ8~18cm。厚さが一定していないが、この層も水田耕作土である。西側では幅20cm、高さ10cmの畦畔と思える高まりが観察できる。第10層、黒灰色粗砂層、厚さ20~30cm。トレンチの全域にわたって厚く堆積している。G-7a区の板付I式土器期の水田を覆う粗砂層と同一の層と考えられる。第11層、細砂を若干含んだ黒灰色粘土層、厚さ10~14cm。層の表面は凹凸が顕著である。足跡等の跡であることはG-7a区の調査成果からも明らかである。G-7a区の上層水田に対する水田耕作土である。トレンチの東側から10mの所に、幅40cm、高さ10cmの畦畔状の高まりがある。第12層、黒灰色粘土層、厚さ15~20cm、G-7a区の板付I式土器期の下層水田の水田耕作と対応する層と考えられるが、G-7a区でみられた粗砂層の存在はない。粗砂層の存在から洪水の規模を推測すると、下層段階での洪水は水路に近いG-7a区周辺に粗砂層がみられるが、本トレンチにおよんでいないことから、大きな洪水ではなかったとみられる。一方、上層の粗砂層はG-7a区、本トレンチの全域に認められ、また水路際の立木が倒壊していることなどから、かなり規模の大きな洪水であったと考えられる。水田の遺棄は洪水の規模に左右されていることがわかる。第13層、上層よりや、粘性の強い黒灰色粘土層、厚さ15~20cm。第14層、上層よりや、粘性の強い黒灰色粘土層、厚さ10~15cm。第13・14層は水田耕作土の可能性もあるが確証はない。第15層、粘質度の強い暗黒色粘土層、厚さ10~15cm。層の表面は凹凸が顕著であるが凹みは浅い。突帯文土器単純期の水田耕作土。第16層、上層よりや、明るい色調の暗黒色粘土層、厚さ6~10cm。第17層、第15層と同様の暗黒色粘土層、厚さ10~15cm、この層も表面は凹凸が著しい。突帯文土器単純期の水田耕作土と考えられる。G-7a区下層水田耕作土に対応する層位である。第18層、黒色粘土層、厚さ5~12cm。第19層は基盤層で八女ローム層となっている。

3. 土層断面にみられる遺構

土層断面の観察で確認した遺構は、前節でみた水田耕作土および畦畔状の高まり、自然流路の他に3本の溝状遺構がある。

溝状遺構1

トレンチの東より13~15mの所に位置する。板付I式土器期下層水田の直下にあり、溝幅212cm、深さ約30cm、断面は浅い皿状をなす。埋土は暗黄灰色粗砂層、黒灰色粗砂粘質上層、暗黄灰色粗砂層となっている。

溝状遺構2

溝状遺構1のすぐ西に位置する。溝幅約70cm、深さ約25cm、断面は浅いU字形をなす。埋土は暗黄褐色粗砂層である。層的にも溝状遺構1と同じである。

溝状遺構3

トレンチの東より24mから28mの間に位置する。板付I式土器期上層水田に伴うものである。溝幅約3.6m、深さ約60cm、埋土は上から黒灰色粘土層、黒灰色粗砂混入粘土層、黒灰色粗砂層、黒灰色粗砂混入上層、黄褐色粗砂層となっている。溝の西側は幅約1m、高さ25cmの畦畔状の高まりとなり、それより西側は水田が一段下がっている。

第5章 F-8c区の調査

1. 調査区の位置

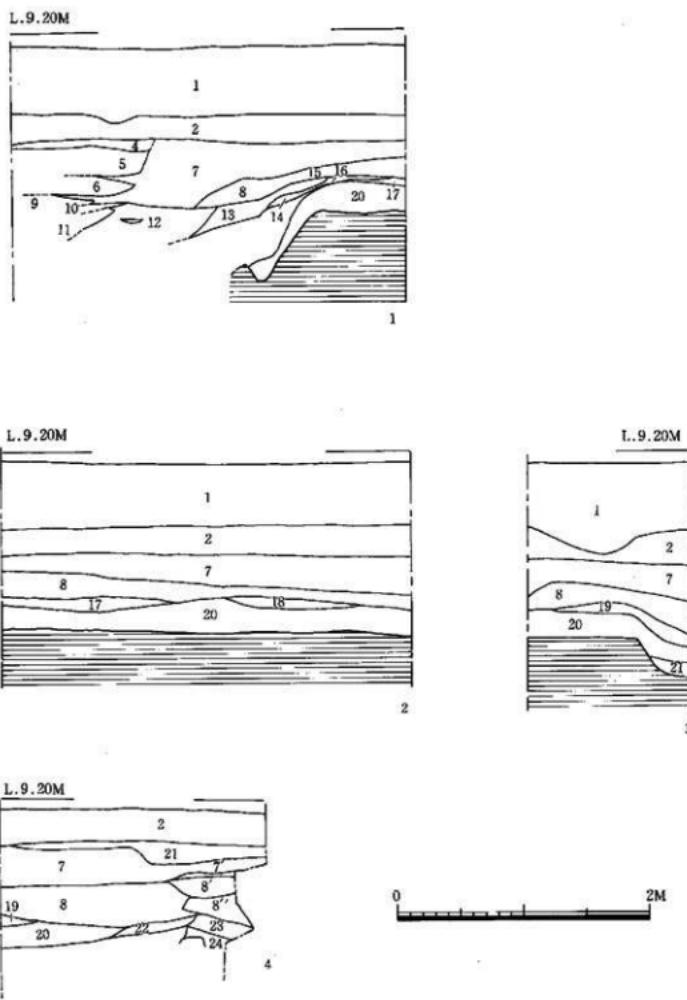


Fig.33 F-8c区 土層断面実測図

中央台地の南端に近い台地際の西側沖積地に位置している。G-7a区とは南に約70m離れている。増築に伴う緊急調査であったために、調査区は狭い範囲に限定されることになった。また、トレンチも狭く、壁の崩落等の危険をさけるために、トレンチの深さも限定された。しかしながら、板付I式土器期の幹線水路（小河川）の西岸を確認したことは重要な成果であった。調査区が狭いために出土遺物の量は少ないが、刻目尖端文土器、板付I式土器が出土し、粗砂と黒色土層の互層である水路の埋土から、G-7a、b区の流路の延長部にあたることは疑いない。

2. 調査区の層序 (Fig.33)

調査区はせまいが、板付I式土器期の水路とその落ち際が確認できたので、層序は極めて複雑である。以下、層序について説明する。Fig.33に示したのが上層断面実測図である。Fig.33-1は南壁、2は西壁、3は北壁、4は東壁の一部である。

第1層、盛土、水田を宅地化した時の盛土である。厚さ55~60cm。第2層、褐色土層、厚さ20cm前後、旧水田耕作土。第3層、青灰色極細砂層、厚さ10~55cm。第4層、やや粘質の灰褐色細砂層。第3層が侵蝕されながら再堆積した層と考えられる。第5層、灰褐色粗砂層、厚さ25cm前後。第6層、第5層同様の灰褐色粗砂層、厚さ15cm前後。第5・6層も層の形成は第4層と同じである。第7層、灰褐色粗砂層のブロック、厚さ3cm。第8層、茶褐色粘質微砂層、厚さ10~20cm。第8'層、茶褐色細砂層、厚さ15cm前後。第8''層、暗灰褐色細砂層、厚さ10~20cm。第8'・8''層は共にブロック層である。第9~11層、灰褐色粗砂層、共に層の境は不明瞭である。第12層、淡茶褐色粘質微砂層、厚さ30cm以上、青灰色極細砂層のブロックを含む。第13層、暗灰褐色細砂層、厚さ5~15cm。第14層、暗茶褐色粘質微砂層、厚さ3~5cmの薄い堆積層である。第15層、八女ロームのブロックを含んだ黒褐色粘質土層、厚さ5cm前後。第16層、黒褐色粘質土層、厚さ8cm前後、レンズ状に堆積する。第17層、黒褐色粘質土層、厚さ10~15cm、東にむかって厚くなる。第18層、黒色粘土層、厚さ20~27cm。第19層、暗青灰色細砂層、厚さ10cm前後。第20層、灰褐色細砂層、厚さ8cm前後。第21層、暗青灰色極細砂層、厚さ14cm前後。第22層、八女ロームのブロックを含んだ黒色粘土層となっている。

3. 検出遺構

調査区がせまく、詳細については明らかにしがたいが、ここで確認した重要な成果は板付I式土器段階の水路西岸の把握である。これまでの成果から、この水路の西側には初期水田の拡張があることは疑いなかろう。

第6章 調査のまとめ

今回のG-7a区、G-7b区、G-7c区、F-8c区の調査は我が国における稻作農耕の問題について、多くの重要な成果をもたらした。これまで、その成果の一部は公表してきたが、ここで改めてその成果について論じることにする。問題は多岐にわたるが、ここでは水田の構造と祭祀を中心に述べることとしたい。

なお、時間尺である土器の編年については「弥生文化成立期における土器の編年的研究—板付遺跡を中心としてみた福岡・早良平野の場合—」1980年において述べているので詳細はそれによられたい。調査成果の一つは板付I式土器の下層に刻日突帯文土器の単純層を確認し、それぞれに遺構を伴い、明確に分離できたことである。

1. 板付I式土器段階の水田構造 (Fig. 34)

これまでに確認した、板付I式土器段階の水田関連遺構には以下の遺構がある。

- ① 水田に水を給水するための幹線水路。② 幹線水路の水位を高め、貯水するために設置された井堰。③ 幹線水路と水田を結ぶ取排水溝。④ 水路を限り、水田を区画する畦畔。⑤ 水田面。⑥ 水田面の取水・排水を便利にする支線水路。

次に上記の各遺構が現在どこまで判明したかを整理しながら、板付I式土器段階の水田構造をみていく。

先ず、この時期の幹線水路（小河川）は、G-7a、7b区の調査所見をはじめとして、台地西側に設定された各トレンチから明らかにことができる。G-7a区の北側は、G-6a区をはじめ、市営・県営住宅建設に伴う調査で設定された各トレンチで、その存在が確認されている。G-6b区とその北側の二つのトレンチでは水路内の粗砂層と黒褐色粘質土層の互層が厚く堆積している状況が観察できる。特にG-6a区からは、夜臼式土器段階の優美な大型の丹塗磨研の壺形土器をはじめ、板付I式土器の壺形土器が完形、あるいはそれに近い形で出土している。F-7b区の出土状況等を加味すれば、これらの土器は祭祀用として使用され、近くの上流部に井堰が設置されていたと想定することができる。また、G-24・25トレンチでは水路の東岸が確認されている。また、かって板付遺跡調査事務所のおかれていた所も、粗砂層と黒褐色有機質土層の互層となっていて水路内であることが確認されている。それから推測すると、台地沿いに流路をとってきた水路は、G-24・25トレンチで方向を北西に変換している。それより北側では、板付北小学校の校庭南側で検出された東西に流路をとる水路と合流すると考えられるが、合流点等はまだ確認されていない。G-7b区から調査事務所までの距離は約170mを測る。G-7a区の南側は、第5章で報告したF-8c区で水路の西岸を確認している。また、F-8d区と道路をはさんだ東側に設定試掘トレンチでは、粗砂層と黒褐色有機質土層の互層となっていて、明らかに水路内の堆積を認められる。試掘トレンチはかなり台地内に切り込んでいて、その延長をもとめれば、板付の中央台地と北台地を堀切るようになる。G-7b区から試掘トレンチまでの距離は約150mを測る。よって、調査で確認された板付I式土器段階の幹線水路は中央台地に沿って約320mを確認したことになる。水路幅約10m、蛇行しながら北流している。

井堰はG-7b区で確認した1ヶ所である。径20cm前後の叉杭を基礎として打込み、二段あるいはそれ以上に構築された大規模で強固な井堰である。井堰の周辺には祭祀に使用された上器等が完形で投

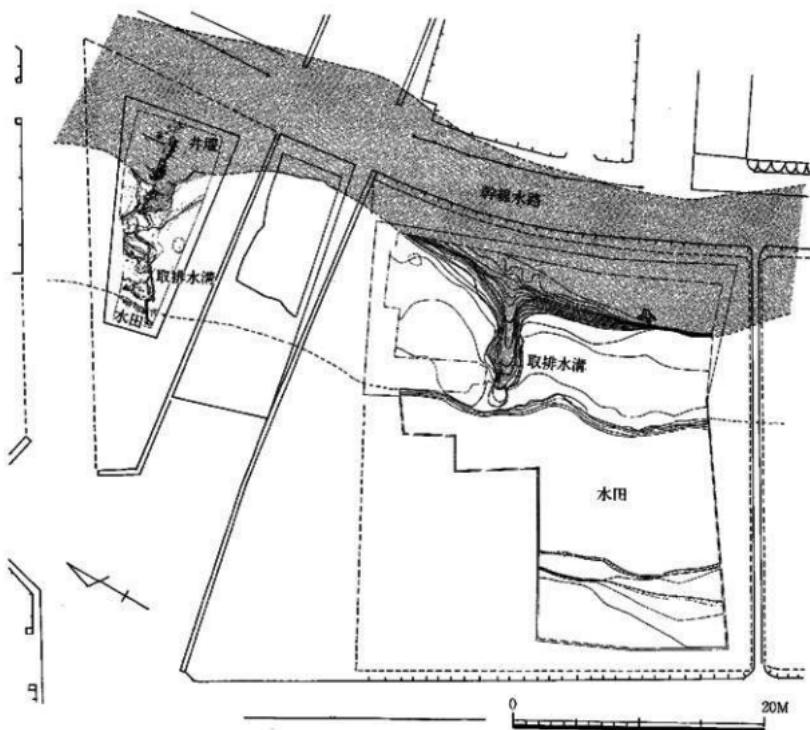


Fig.34 G-7a・b区 水田遺構関連図 I (板付 I式土器期)

棄されている。この祭祀用土器の存在からすれば、G-6a区のすぐ上流にも井堀が設置されている可能性が強い。そうした場合、井堀間の距離は約50mを測る。

井堀の上流には水路と水田と結ぶ取排水溝が設置されているが、現在、G-7a区、7b区にそれぞれ1ヶ所、計2ヶ所を確認している。溝が直線に掘り込まれているか、蛇行気味に掘り込まれるかの違いはあるが、途中に水量調整のため堰をつくるなどの共通性があり、基本的な構造は同じである。この二ヶ所の取排水溝が同時併存したかどうかは判定の資料は持ち合わせていないが、少なくともある時期は併存し、G-7b区の取排水溝がや、永く存続したと理解しておきたい。取排水溝間の距離は30mを測る。取排水溝が同時併存したすれば、一つの井堀で少なくとも二つ以上の取排水溝を補い、かつ水田一筆ごとに取排水溝が設置された可能性は強い。

畦畔は、この時期は水路西側の自然堤防状の高まりを利用している。この高まりには樹木も繁っていたと考えられ、立木のまゝの株も検出されている。水田間を区画する畦畔は矢板・杭を打ち込んでいるが、残存状態は悪い。水田区画としては、南北に細長い矩形が想定できるが、これは多分に地形に左右されていると考えられる。

この時期の水田面には足跡あるいは稻株と考えられる凹みが多数残っている。歩行の軌跡等追求でき、農作業等の復原も可能な場合もある。足跡等の存在は、水田発掘を進める上で有効である。なお、水田面には草木を焼やし肥料とした痕跡が残っており、炭化米も多量に存在する。

支線水路はG-7c区の断面やF-8b区で部分的に検出されている。水田への水まわりを良くするためには欠かせない設備である。調査では具体的に把握できていないが、今後追求すべき遺構である。

2. 突帯文土器単純期段階の水田構造 (Fig.35)

突帯文土器単純期の水田で確認された遺構は、幹線水路およびそれに直交して設置された井堰、取排水溝、畦畔、水田面等がある。この時期の遺構は中央台地西側の沖積地全域に拡がると考えられるが、調査で確認しているのは、G-7a、7b、7c区、F-8e区のみである。

幹線水路は板付I式土器段階同様に中央台地に沿った台地際の沖積地につくられている。板付I式土器段階の幹線水路と切り合い関係にあり、東側壁(右岸)の大部分は破壊されている。溝幅約2.0m、深さ約1.0m、断面形はU字形～逆台形をしている。長さ約50mを確認している。板付I式土器段階

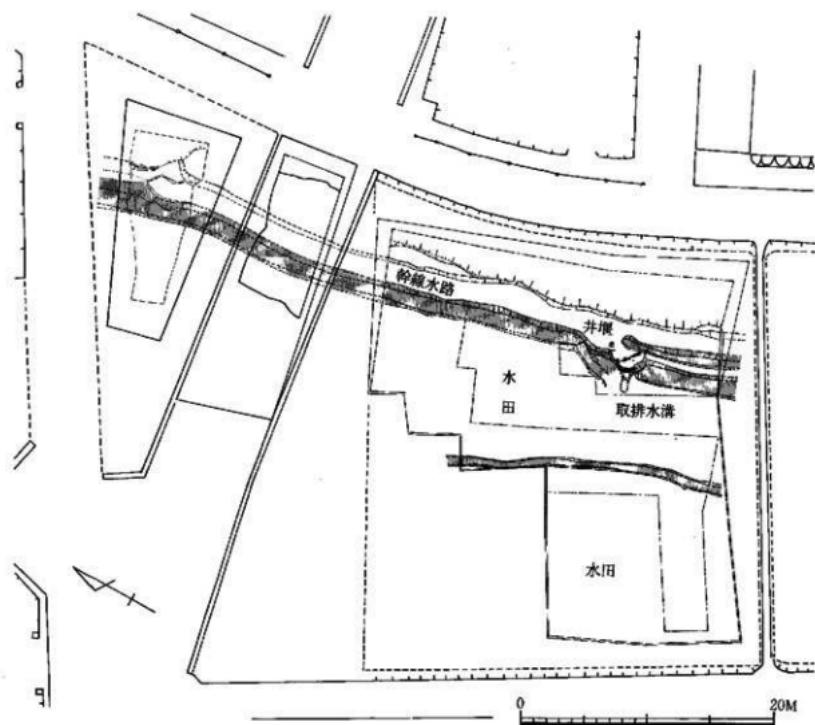


Fig.35 G-7a・b区 遺構関連図II (突帯文期)

の幹線水路に比較すればかなり小規模である。わずかに蛇行するが、ほぼ直線的に掘削されている。

井堰はG-7a区で1ヶ所検出されている。水路に直交して杭が打ち込まれているが、保存状態は極めて悪い。杭に横木を渡した簡単な構造のものであり、板付I式土器段階の井堰とは比較にならない程、小規模であり、その貯水量も少ない。G-7a区ではこの井堰のすぐ上流に取排水溝が設置されているが、規模的に考えれば、取排水溝毎に井堰の設置が必要であろう。

取排水溝は井堰のすぐ上流に設置されているが、その部分はや、複雑である。この地点より上流には幹線水路に平行し、西側にもう一本溝が走っている。この溝は後に考察するが、上流にある水田から排水するための溝である。この溝も取排水溝の前面で幹線水路に合流するが、この合流点にも横木を渡した簡単な堰が設けられ、この溝から排水された水をこの堰で貯水し、取排水溝から水田へ給水している。すなわち、排水を給水に切り替える施設として機能しているのである。取排水溝は水出への給水と水田からの排水を兼ねた水口であるが、ここにも水量調節のための堰が設置されている。三重に堰を設け、水をコントロールする、すぐれた設備をもっていることがわかる。取排水溝は排水による侵蝕で水田側に後退しているが、それに合わせ、畦畔を曲げている。

畦畔は2条検出している。水路際につくられた畦畔はや、大きく、幅約1.5m、高さ30m、水田を区画する畦畔は小さく、幅約80cm、高さ20cmである。大畦畔は水路に沿って約50m、小畦畔は大畦畔より約10m離れて平行しているが、約21mを確認している。水田区画は板付I式土器段階同様に南北に細長い。地形に左右されていることは先に指摘したとおりである。

水田耕作土は黒褐色粘質土層で、厚さ10~15cm。表面には足跡の凹みがみられるのは、板付I式土器段階と同様であるが、保存状態、凹みが浅いことから発掘できていない。耕作土中には炭化米も存在する。

現在のところ、支線水路の確認はない。全体的にみて、全ての遺構は板付I式土器段階より、かなり小規模であるが、突帯文単純期の水田が板付I式土器期の水田より良く整備されている。

ここで板付I式土器、突帯文単純期段階の水田、および南区野多目遺跡等の初期水田について若干のまとめをしておこう。

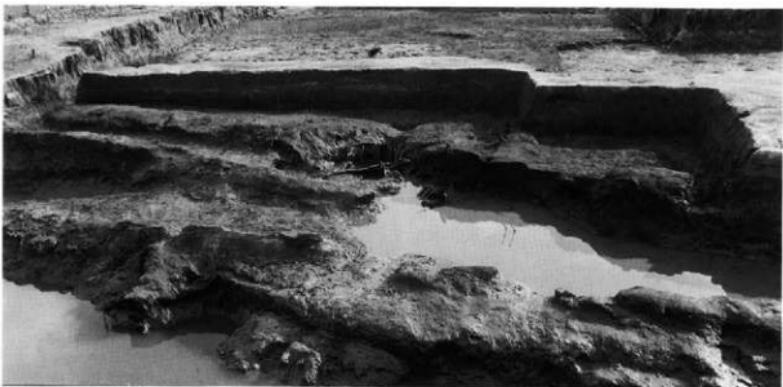
1. 初期水田の立地は中位段丘Ⅱ面や低位段丘上に位置する場合（板付、野多目遺跡）と低地の湿地に位置する場合（菜畑遺跡）の中間に位置する場合（比恵遺跡）がある。
2. 板付、野多目遺跡のように段丘上に開田された水田には自然流路から水路を引き込み、水田の幹線水路を確保している。
3. 幹線水路には井堰が設置されるが、井堰間は野多目遺跡で約30m、板付遺跡で約50m（？）とかなり近距離で、ほぼ等間隔に連続して設置される。この傾向は後まで継続し、板付遺跡では弥生時代中期、三筑遺跡では5世紀段階においても認められる。
4. 井堰の設置間隔が短いため、井堰によって給水される水田は一筆~数筆の水田区画となっている。
5. 水田からの排水を給水に変える構造は、野多目遺跡と板付遺跡の遺構を組み合わせることで立証できるが、同じ構造は三筑遺跡の5世紀の水田においても認められる。
6. 畦畔は土盛り畦畔で、補強のため、杭・矢板や横木が使用されている。
7. 水田区画は明らかに例は少ないが、野多目遺跡や板付遺跡では矩形が考えられ、面積は300~500m²前後と考えられる。
8. 福岡平野では初期水田の構造が永く継続され、三筑遺跡にみるよう5世紀まで見られる。福岡平野の水田の大きな特徴一つである。

3. 水田祭祀について

板付遺跡の初期水田についてみてきたが、以外にも古い水田は整備され、完成度の高いものである。日本列島内で完成されたとするより、外からの伝播と考えた方がよさそうである。これは、水田の祭祀についても言えることである。以下、G-7a区、7b区における祭祀場所、遺物を指摘しておきたい。

突蒂文土器単純期あるいは板付I式土器段階の水田祭祀は、いずれも水に関係している。祭祀がおこなわれた場所は、幹線水路の井堰部と取排水溝である。突蒂文土器単純期段階の祭祀行為はあまり明確でないが、水路中に実用とは考え難い小型壺の破片が存在することから祭祀行為の存在を知ることができる。また、井堰、取排水溝周辺には壺形土器、浅鉢形土器の破片が集中して検出された。特別の土器ではないが、本来、上器の出土を見ない場所であることを考慮すれば、水口で取りおこなわれた祭りの供獻物を盛ったものとも考えられる。なお、取排水溝のすぐ横に三叉になった杭が打ち込まれていたが、大雨で流失してしまった。水口に杭を立てること自体に祭祀行為を示しているが、写真等の記録と詳細が不明なため、存在のみを記録しておく。水田祭祀のあり方は板付I式土器段階はより明瞭となる。G-7a区の取排水溝の堰の西側取排水溝内に上器の破片が比較的まとまって出土した。これらの土器は、いずれも中型の壺形土器である。土器は彩文土器と沈線で有軸羽状文、八字形文を描いた飾られた土器である。八字形文の沈線間に丹をつめている。いずれも特殊な土器と考えて良いものである。G-7b区の取排水溝では前述したように大型の壺形土器が押しつぶされた状態で出土している。G-7b区では水路内に投げ込まれた大型の壺形土器が完形で出土している。同様例は前述したようにG-6a区にもある。偶然落ち込んだものでなく、人為的に投げ込まれたのは明白である。一つの祭祀行為を示していると考えられる。また、井堰に止まって発見された木製丹塗りの「陰部隠し」は、祭祀の実体を示すものである。今後検討を加え、初期水田に伴う祭祀についてみていきたいと思う。

図 版
PLATES



1

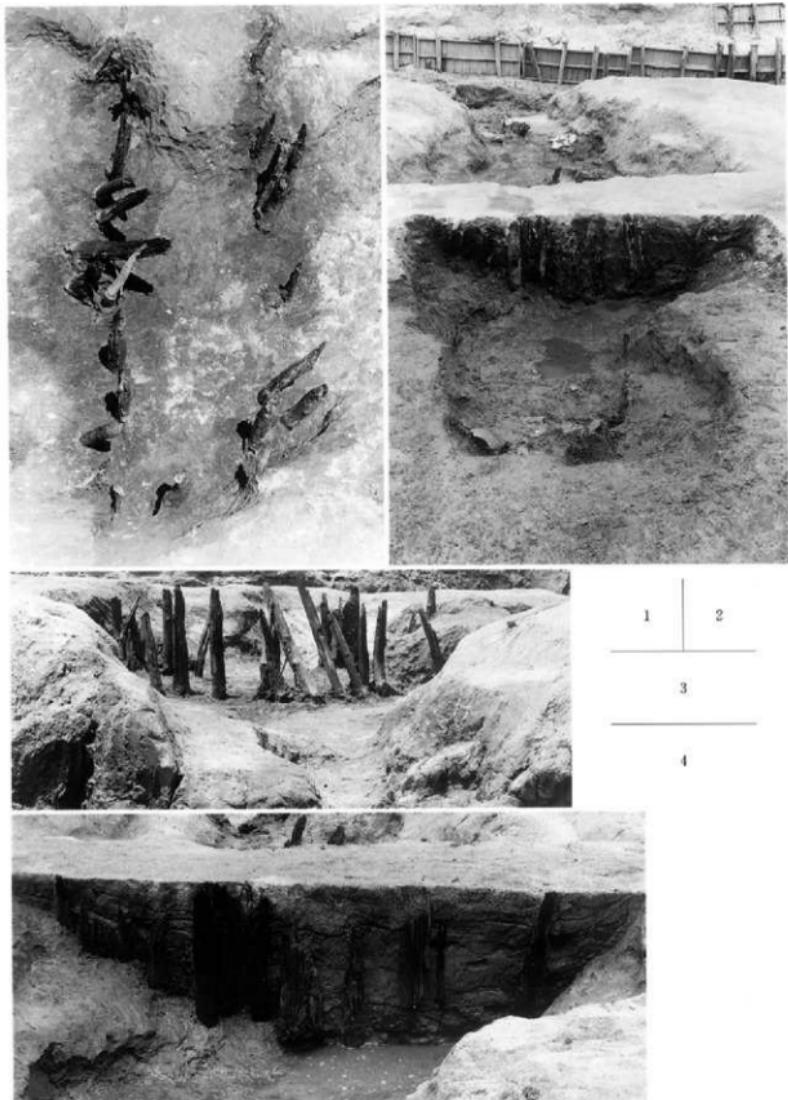
2

3

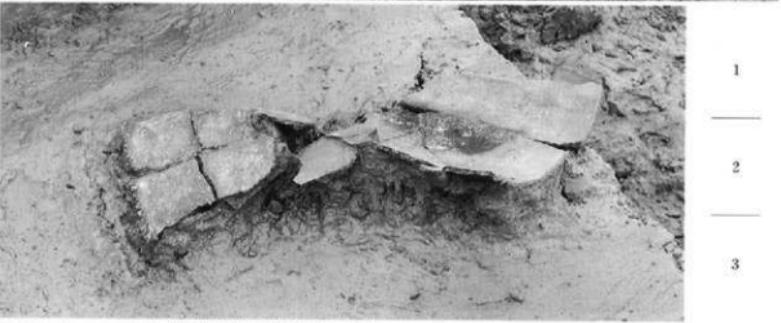
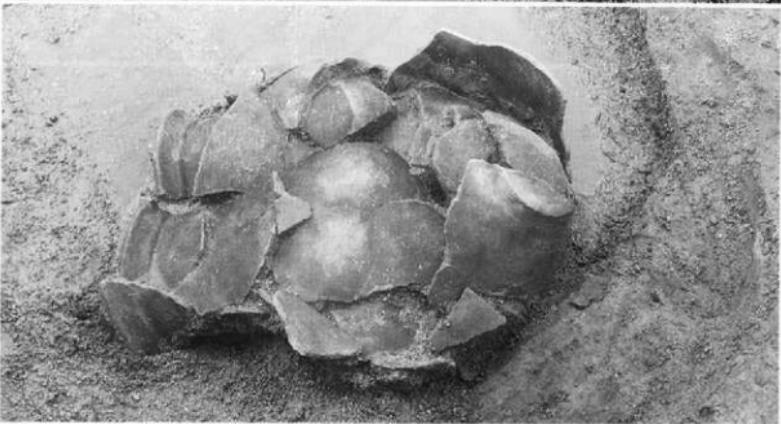
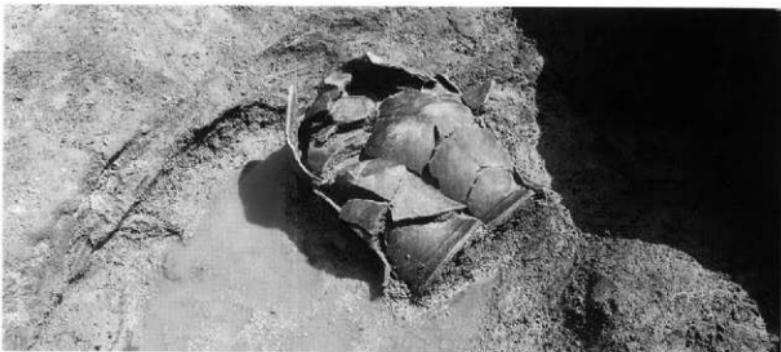


PL. 1 1. G-7a区 全景(東より) 2. G-7a区 全景(北東より) 3. G-7b区 下層遺構全景

PL. 2

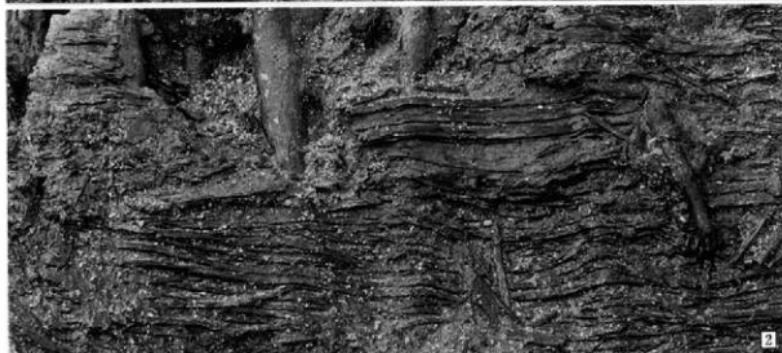


PL. 2 1. G-7a区 板付I式土器期取排水溝の井堰 1. 北より、2. 西より(祭祀用土器出土状況)
3. 東より、4. 西より

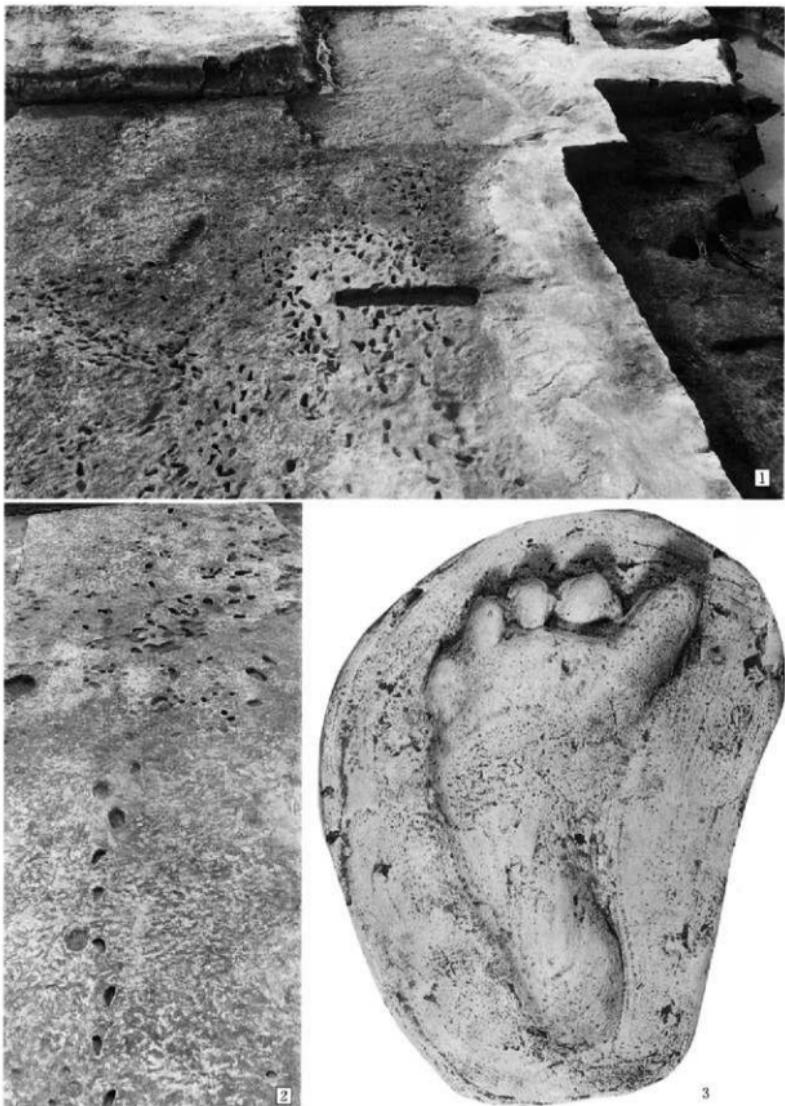


PL. 3 1. G-7b区 祭祀土器出土状況(北より) 2. (南より) 3. G-7a区 突帯文土器出土状況

PL. 4

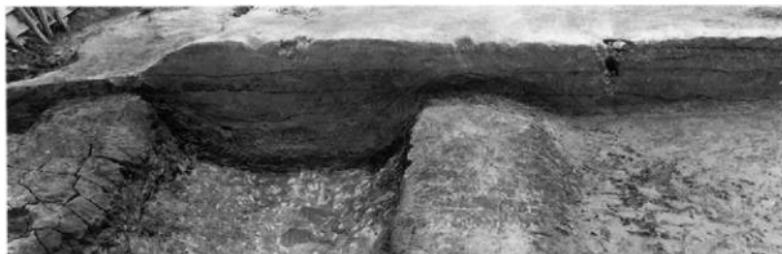


PL. 4 G-7b区の井堰と溝 1. 網代出土状況 2. 網代細部 3. 溝断面

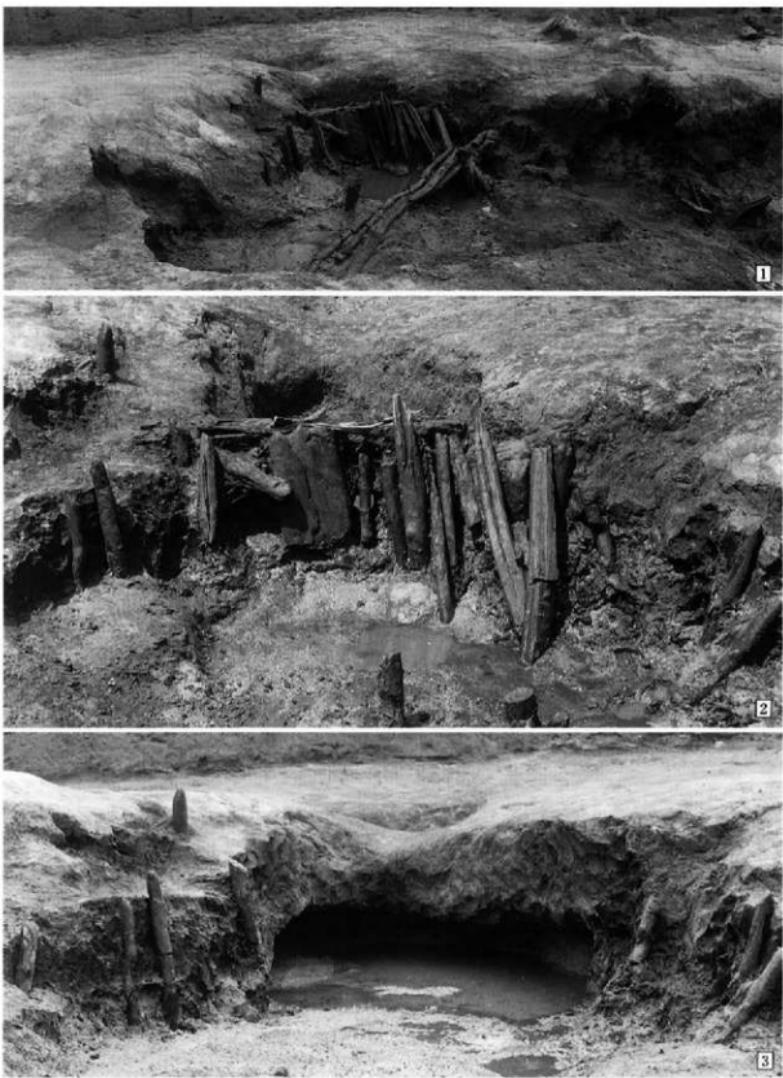


PL. 5 G-7a区の水田面の足跡 1. G-7a区 板付I式土器期下層水田足跡
2. G-7a区 板付I式土器期上層水田足跡 3. G-7a区 突帯文土器単純期足跡石膏型

PL. 6

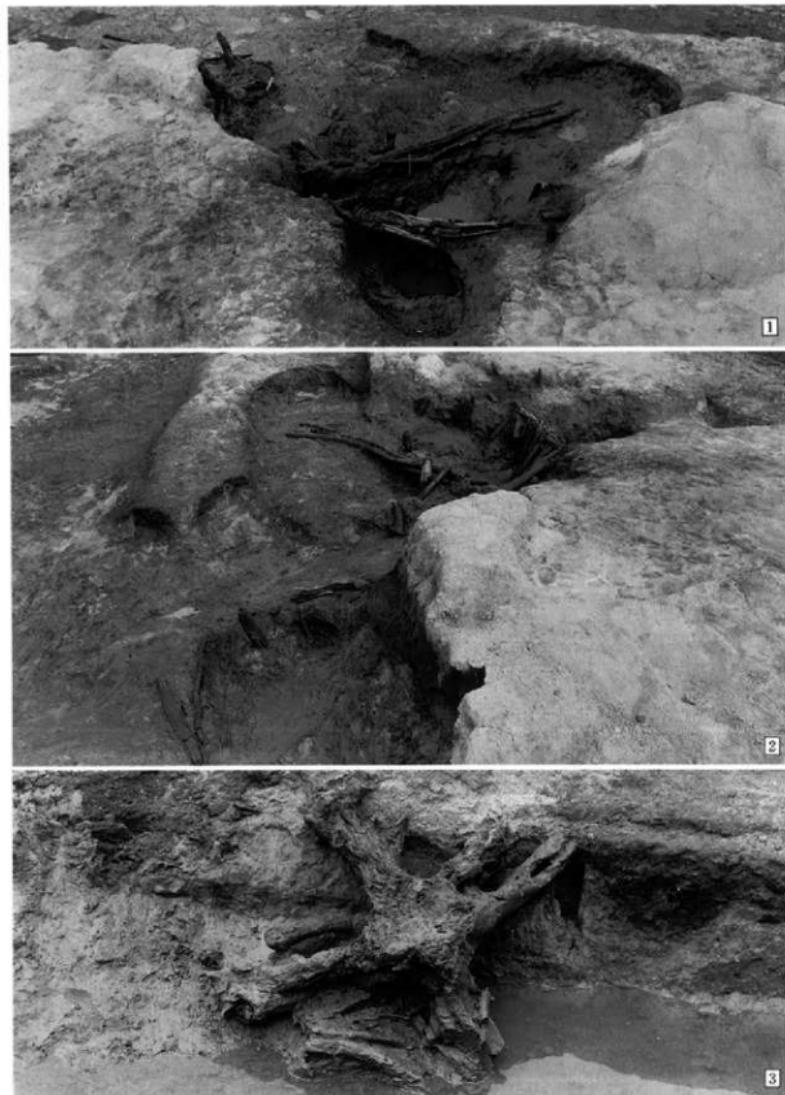


PL. 6 G-7a区 突带文土器早純期幹線水路断面
1.H-I間断面
2.C-D間断面
3.調査区北壁部



PL. 7 G-7a区 突带文土器單純期取排水溝 1. 遠景、2. 近景、3. 杭除去後

PL. 8



PL. 8 G-7a区 突帯文土器単純期の取排水溝と井堰 1. 西より、2. 北より、3. G-7a区 立木倒壊状況



PL. 9 G-7b区 木器出土状况 1. 遠景、2. 近景、3. 石斧柄未製品

PL. 10



PL.10 G-7a区 畦畔 1. 突帯文土器單純期（北より） 2. 突帯文土器単純期断面
3. 板付 I式土器期（東より）

福岡市
板付周辺遺跡調査報告書第20集

—福岡市埋蔵文化財調査報告書第601集—

1999年（平成11年）3月31日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神一丁目8番1号
印刷 魚住印刷
福岡市博多区大博町8-20

